上厚真遺跡

-町道上厚真小学校通り線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2023.3

厚真町教育委員会

カラー図版1

1. 発掘区調査前近景1　NE→

2. 発掘区調査前近景2　W→

3. 発掘区基本土層　N→

カラー図版2

1. ⅢB-01(ⅢSHB-01)出土状態1　NW→

2. ⅢB-01(ⅢSHB-01)出土状態2　NE→

3. ⅢB-01ホタテガイ出土状態　N→

序　文

厚真町は約 14,500 年前の旧石器時代の遺跡も発見されており、以降、縄文時代から先住民族アイヌの方々、現在のわれわれに至るまで、連綿と続く歴史がある町です。

現在は北海道屈指の豊かな水田地帯を有する田園のまちで、平成 30 年 4 月からは厚幌ダム、厚幌導水路の供用が始まり、本町農業のさらなる発展に向け、町全体が新たな段階へ動き出していました。しかし、その年の 9 月 6 日に発生した北海道胆振東部地震は厚真町の山々や豊かな田園風景を一変させる甚大な被害をもたらし、尊い 37 人の命が奪われました。

厚真はこれまでも洪水や地震など、いくつもの自然災害を乗り越えてきた歴史があります。今を生きる私たちも皆様のお力添えのもと、この難局を乗り越えるべく、復旧・復興に向けた道のりを一歩一歩着実に歩んでおり、あらゆる災害に強いまちづくりを進めております。

本書は、こうした災害に強いまちづくりの一環として、避難所に指定されている上厚真小学校の進入路拡幅工事に伴う上厚真遺跡発掘調査の成果を収めたものです。調査結果から、約 500 年前のアイヌの人々が残したホッキガイやエゾシカ、オニグルミなどの送り場跡を検出し、自然と共に暮らし、その恵みに感謝する祈りの場などを収録しております。

本調査・報告にあたり御指導御支援を賜りました関係諸氏並びに関係機関に厚く感謝申し上げますとともに、本書が今後の埋蔵文化財の保護や調査研究、アイヌ文化への理解促進・振興の一助なれば幸いに存じます。

令和 5 年 3 月

厚真町教育委員会　教育長　遠藤　秀明

例　言

1. 本書は、令和３年度に行った町道上厚真小学校通り線改良工事に伴い発掘調査した上厚真遺跡（登載番号：J-13-1）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、厚真町役場建設課土木グループの依頼により厚真町教育委員会が行った。
3. 調査・整理（分担）は以下の体制で行った。

調査担当者　：乾 哲也・奈良智法（厚真町教育委員会生涯学習課社会教育グループ）

発掘・整理作業員　：石山 容（厚真町教育委員会 会計年度任用職員）

奈良：遺物接合・復元作業、土器拓影図・遺構図等作成、遺物写真撮影、写真図版・各種一覧表作成
各種外部委託発注事務

乾　：一次整理作業、フローテーション試料選別、ウバガイ集中整理分析、各種調整業務

4. 本書の執筆は乾が奈良の協力を得て行い、編集は奈良が乾の協力を得て行った。
5. 出土遺物の整理作業等において、下記の機関へ委託した。
   - 放射性炭素年代測定（AMS 測定）：株式会社 パレオ・ラボ
   - 剥片石器実測：株式会社 トラスト技研
   - 金属製品保存処理：株式会社 吉田生物研究所
6. 関連諸科学の同定分析については、以下の個人に依頼した。
   - 動物遺存体同定：札幌大学非常勤講師 高橋 理
   - 炭化種子同定：北海道大学大学院文学研究院 高瀬克範
7. 本調査によって得られた資料等は、厚真町教育委員会軽舞遺跡調査整理事務所で保管している。
8. 調査・報告にあたって下記の機関および個人より御指導御協力を頂き、記して感謝申し上げます。

厚真アイヌ協会、厚真町立上厚真小学校、㈱丸斗工業、㈱五晃建設、北海道電力ネットワーク㈱苫小牧支店、㈱つうけん道南事業部苫小牧事業所、大山眞由美、菅野修広、工藤 肇、佐藤一夫、田口 尚、谷中聖治、土井重男、中田裕香、永谷幸人、畑嶋雄樹、深藪淳一、松永夕起子、圓山芳史、宮地 鼓、宗像公司

凡　例

1. 本書の遺構・遺物等について下記の略号等を用いた。なお、層位がこれらの略号に付加している。

〔遺構〕　土坑墓：GP　焼土：F　柱穴：KP　土器集中：PB　礫集中：SB　灰集中：AS　獣骨集中：BB
貝殻集中：SHB　遺物集中：B

〔遺物〕　土器：P（縄文土器：JP・続縄文土器：ZP・擦文土器：SP）　剥片石器：FT　礫石器：ST　礫：S
ﾌﾚｲｸ・ﾁｯﾌﾟ：FC（黒曜石・頁岩）　鉄製品：IP　ガラス製品：GP　骨：B　貝：SH

〔計測値〕本文・一覧表中の計測値に（　）を付記したものは現存値を記載。

2. 地層等について下記の略号を用いた。

〔堆積土〕樽前ｂ降下軽石：Ta-b　有珠ｂ降下軽石：Us-b　白頭山-苫小牧火山灰：B-Tm
樽前 c2 砂質降下軽石：Ta-c　樽前 d1 降下スコリア：Ta-d1　樽前 d2 降下軽石：Ta-d2
恵庭ａ降下軽石：En-a　黄褐色粘土質シルト（いわゆるローム）：L　支笏第一降下軽石：Spfa-1

〔色調〕　農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修『新版 標準土色帖』2005 年版に従った。

〔注記〕　土層注記は下記の略号を用いて、左側より混合比率の順列をつけている。また、混入土については（　）内に粒径（単位：mm）、状態を記載した。

混入土の比率

A ＋ B：AとBが同量比混じる　　A－B：Aを主体にBが多量に混じる

A ＝ B：Aを主体にBが少量　　A≡B：Aを主体にBが微量

φ：粒径（単位：mm）　↓：以下　（状態）：斑状に混じる・均一に混じる

〔層位〕　標準堆積層はローマ数字を用い、遺構覆土や倒木撹乱などの二次的に堆積したものにはアラビア数字を用いた。また、本文・一覧表等には下記の略号を用いている。

U：上位　M：中位　L：下位

〔焼土・炭化物集中〕　被熱による土壌赤色化の度合い等の表現に以下のトーンを用いた。

3. 挿図は基本的に次のように縮尺を統一したが、異なるものについては図中スケールに縮尺を明記している。

基本土層柱状図：1/10　遺構配置図：1/300　焼土：1/20　柱穴：1/20　集中遺物：1/10・1/20

土器拓影図：1/3　剥片石器：1/2　礫石器：1/3　金属製品：1/2・1/3　ガラス製品：1/1

4. 遺構実測図中に以下の線種・トーンを用いている。

〔線種〕----------：撹乱・倒木痕　- - - -

本　文　目　次

カラー図版 1

1　発掘区調査前近景 1

2　発掘区調査前近景 2

3　発掘区基本土層

カラー図版 2

1　ⅢB-01（ⅢSHB-01）出土状態 1

2　ⅢB-01（ⅢSHB-01）出土状態 2

3　ⅢB-01 ホタテガイ出土状態

序　文

例　言

凡　例

第Ⅰ章　調査の概要

第 1 節　調査要項と体制 …… 1

1. 調査要項 …… 1

2. 調査体制 …… 1

第 2 節　発掘調査に至る経緯 …… 1

1. 発掘調査に至る経緯 …… 1

第 3 節　調査の方法 …… 2

1. 調査区の設定 …… 2

2. グリッド網の設定 …… 2

3. 包含層および遺構調査の方法 …… 3

4. 整理作業 …… 3

第 4 節　遺物の分類 …… 5

1. 土器 …… 5

2. 剥片石器 …… 5

3. 礫石器 …… 6

4. その他 …… 6

第 5 節　遺跡の位置 …… 7

1. 厚真町の概要 …… 7

2. 遺跡の位置及び調査略歴と周辺の環境 …… 9

3. 近世後期以降の厚和地区 …… 10

4. 調査区の地形と地質 …… 16

第Ⅱ章　Ⅲ層の調査

第 1 節　焼土 …… 19

第 2 節　柱穴 …… 20

第 3 節　遺物集中区 …… 22

第 4 節　土器集中 …… 26

第 5 節　礫集中 …… 30

第 6 節　包含層出土遺物 …… 36

第Ⅲ章　Ⅴ層の調査

第 1 節　土坑墓 …… 39

第 2 節　焼土 …… 40

第 3 節　包含層出土遺物 …… 40

第Ⅳ章　まとめ

第 1 節　厚真川流域における上厚真遺跡の立地について …… 43

第 2 節　Ⅲ層の調査成果 …… 43

第 3 節　Ⅴ層の調査成果 …… 44

第Ⅴ章　自然科学的分析

第 1 節　厚真町上厚真遺跡における放射性炭素年代測定（AMS 測定）…… 45

第 2 節　厚真町上厚真遺跡出土の動物骨 …… 48

第 3 節　厚真町上厚真遺跡出土の貝類 …… 54

第 4 節　厚真町上厚真遺跡から検出された種子 …… 62

引用・参考文献 …… 68

上厚真遺跡写真図版 …… 71

報告書抄録 …… 82

奥　付

挿図目次

Ⅰ章

図Ⅰ-1　グリッド設定・区分図及び座標杭位置図 ··· 4
図Ⅰ-2　厚真町内遺跡分布図 ····· 12
図Ⅰ-3　上厚真遺跡周辺の地形図 ····· 15
図Ⅰ-4　基本土層柱状図 ····· 17

Ⅱ章

図Ⅱ-1　Ⅲ層遺構配置図及び調査区横断図 ····· 18
図Ⅱ-2　ⅢF・ⅢKP・ⅢPB-01 平面及び断面・垂直分布図・ⅢPB-01 出土土器 ····· 21
図Ⅱ-3　ⅢB-01（ⅢSHB-01・ⅢAS-01・ⅢBB-01）平面図 ····· 24
図Ⅱ-4　ⅢB-02・03・ⅢPB-02・03 平面及び垂直分布図 ····· 28
図Ⅱ-5　ⅢB 出土遺物 ····· 29
図Ⅱ-6　ⅢSB 平面及び垂直分布図 ····· 31
図Ⅱ-7　ⅢPB・ⅢSB 出土遺物 ····· 32
図Ⅱ-8　Ⅲ層包含層出土遺物 ····· 38

Ⅲ章

図Ⅲ-1　Ⅴ層遺構配置図 ····· 39
図Ⅲ-2　ⅤGP・ⅤF 平面及び断面図 ····· 41
図Ⅲ-3　Ⅴ層包含層出土遺物 ····· 42

挿表目次

Ⅰ章

表Ⅰ-1　上厚真遺跡検出遺構一覧表 ····· 6
表Ⅰ-2　上厚真遺跡出土遺物一覧表 ····· 7
表Ⅰ-3　厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1) ···· 13
表Ⅰ-4　厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2) ···· 14

Ⅱ章

表Ⅱ-1　Ⅲ層遺構属性一覧表 ····· 18
表Ⅱ-2　Ⅲ層遺構出土遺物属性表 ····· 32
表Ⅱ-3　擦文文化期遺構・包含層出土土器属性表 ·· 33
表Ⅱ-4　続縄文文化期遺構・包含層出土土器属性表 ····· 33
表Ⅱ-5　ⅢB 出土礫属性表 ····· 34
表Ⅱ-6　ⅢSB 出土礫属性表 ····· 35
表Ⅱ-7　Ⅲ層包含層出土遺物属性表 ····· 38

Ⅲ章

表Ⅲ-1　Ⅴ層遺構属性一覧表 ····· 39
表Ⅲ-2　Ⅴ層包含層出土土器属性表 ····· 42
表Ⅲ-3　Ⅴ層包含層出土石器属性表 ····· 42

写真図版目次

図版 1-1　ⅢF-01 焼土ブロック検出 ····· 71
図版 1-2　ⅢF-01 被熱層検出 ····· 71
図版 1-3　ⅢF-01（アイヌ期）断面・ⅢPB-01（続縄文期）検出 ····· 71
図版 1-4　ⅢF-02 検出 ····· 71
図版 1-5　ⅢF-02 被熱層検出 ····· 71
図版 1-6　ⅢF-02 断面 ····· 71
図版 1-7　ⅢF-03 検出 ····· 71
図版 1-8　ⅢF-03 断面 ····· 71
図版 2-1　ⅢF-04 検出（立会地点） ····· 72
図版 2-2　ⅢF-04 断面（立会地点） ····· 72
図版 2-3　ⅢKP-01 完掘 ····· 72
図版 2-4　ⅢKP-01 断面 ····· 72
図版 2-5　ⅢKP-02 完掘 ····· 72
図版 2-6　ⅢKP-02 断面 ····· 72
図版 2-7　ⅢB-01（ⅢAS-01・ⅢBB-01）出土状態 1 ····· 72

図版 3-1　ⅢB-01（ⅢAS-01・ⅢBB-01）出土状態 2 …… 73
図版 3-2　ⅢB-01（ⅢBB-01）出土状態 …… 73
図版 3-3　ⅢB-02（左）・03（右）出土状態 …… 73
図版 4-1　ⅢB-02 出土状態 …… 74
図版 4-2　ⅢB-02 シカ下顎出土状態 …… 74
図版 4-3　ⅢB-03 出土状態 …… 74
図版 4-4　ⅢB-03 出土状態拡大 …… 74
図版 4-5　ⅢB-03 刀子出土状態 …… 74
図版 4-6　ⅢPB-01 出土状態 …… 74
図版 4-7　ⅢPB-02 出土状態 …… 74
図版 4-8　ⅢPB-02 出土状態拡大 …… 74
図版 5-1　ⅢPB-02（下層）とⅢBB-01（上層）の層位関係 …… 75
図版 5-2　ⅢPB-03 出土状態 …… 75
図版 5-3　ⅢSB-01 出土状態 …… 75
図版 5-4　ⅢSB-02 出土状態 …… 75
図版 5-5　ⅤGP-01 検出 …… 75
図版 5-6　ⅤGP-01 完掘 …… 75
図版 5-7　ⅤGP-01 断面 …… 75
図版 5-8　ⅤF-01 検出 …… 75
図版 6-1　ⅤF-01 断面 …… 76
図版 6-2　X・Y-11・12 区Ⅲ層遺物出土状態 …… 76
図版 6-3　Y-11 区鉄鍋口縁部片出土状態 …… 76
図版 6-4　Y-12・13 区貝殻文土器出土状態 …… 76
図版 6-5　作業状況 1 …… 76
図版 6-6　作業状況 2 …… 76
図版 6-7　上厚真小学校児童見学 …… 76
図版 6-8　火山灰除去作業状況 …… 76
図版 7-1　ⅢB-01 調査終了断面 …… 77
図版 7-2　調査終了 1 …… 77
図版 7-3　調査終了 2 …… 77
図版 8　ⅢB 出土遺物 …… 78
図版 9-1　ⅢSHB-01 出土ウバガイ殻頂部以外の破片資料（A～L ブロック）…… 79
図版 9-2　ⅢSHB-01 出土貝類 …… 79
図版 10　ⅢPB・ⅢSB 出土遺物 …… 80
図版 11-1　Ⅲ層包含層出土遺物 …… 81
図版 11-2　Ⅴ層包含層出土遺物 …… 81

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査要項と体制

1. 調査要項

事 業 名：町道上厚真小学校通り線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：厚真町役場建設課
受 託 者：厚真町教育委員会
遺 跡 名：上厚真遺跡（J-13-1）
所 在 地：勇払郡厚真町字厚和 66-1, 72-1・6・8
調査面積：113.0 ㎡
調査期間：（発掘）令和3年6月21日 ～ 令和3年7月1日
　　（整理）令和4年4月1日 ～ 令和5年3月31日

2. 調査体制

厚真町教育委員会　教育長　遠藤秀明
　生涯学習課　課　長　加藤克彦（令和3年度）
　　奥村与志照（令和4年度）
　　主　幹　乾 哲也（調査担当者）
　　主　査　奈良智法（調査担当者）
　　会計年度任用職員　石山 容（発掘・整理作業員）
　　伊藤つや子（事務員：令和3年度）
　　山田悠花（事務員：令和4年度）
事業協力　株式会社 丸斗工業・株式会社 五晃建設

第2節　発掘調査に至る経緯

1. 発掘調査に至る経緯

令和2年度に厚真町役場建設課土木グループ（以下、建設課）が町道上厚真小学校通り線の2車線化拡幅改良工事（以下、改良工事）を計画し、令和3年4月9日発行の広報あつま4月号に事業計画が掲載された。上厚真遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、埋蔵文化財保護に係る事前協議が提出されておらず、厚真町教育委員会（以下、町教委）は事前協議書提出と施工中断の指示を行い、令和3年5月14日付けで町教委を経て北海道教育委員会（以下、道教委）へ事前協議書が提出された。

所在調査は5月14日に町教委が実施し、同日に道教委へ調査報告を提出した。町道の法面崩落土より礫1点を採集した。さらに平成30年4月に協議範囲より町道を挟んだ北側40mの自然崩落崖より後北式土器片数点と焼骨片を回収しており、協議範囲へ包蔵地が広がっているものと判断した。なお今回の協議範囲は狭小であることから、包蔵地の損傷を回避することと施工差し止めによる工期延長の影響を抑制するため試掘調査を実施しない方向で、町教委と道教委で調整し、道教委より段丘掘削範囲の要発掘調査91 ㎡と現道法面の整形施工範囲及び段丘削平範囲の工事立会290 ㎡の回答を得た（令和3年5月18日付け 教文博第559号）。

改良工事は既に発注済みであり、施工範囲境界杭打設と立木伐採、法丁張の設置が行われていたが、工事を中断し、発注元の建設課と施工受託者である㈱丸斗工業、文化財保護部局の町教委との間で協議を重ね、発掘調査は町教委が実施することとなった。発掘調査期間については、既に5月･6月に予定していた富里4遺跡発掘調査終了後の7月からの10日間とした。町教委は調査経費を積算し建設課へ提出していたが、予算確保が困難なことから発掘作業員3名と表土除去等の重機を建設課指示のもと㈱丸斗工業が確保提供することとした。また整理作業及び報告書刊行は、次年度以降とし、係る予算は町教委が積算、計上することとなった。なお調査区は上厚真小学校への通学路に接しており、町道改良工事のメイン施工は8月中旬までの完了予定であったが、工期延長や安全確保の調整は建設課と町教委生涯学習課学校教育グループ、上厚真小学校との間で進められ、これに最大限協力した。

関係機関による一連の調整が終了し、令和3年6月16日付けで建設課より文化財保護法第94条の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知が道教委へ提出された。

発掘調査は富里4遺跡発掘調査がほぼ終了した段階で、調査担当者が表土除去に立ち会い、測量基準杭打設及びベンチマーク移設等の準備工を行い、6月21日より施工業者提供の作業員3名と共に包含層の掘削調査を開始した。なお町道北側の法面造成は段丘平坦面の掘削がなかったことから、法面造成時の立会にとどめ、続縄文文化期の焼土1ヵ所を検出している。

また、町道改良工事に合わせて電力柱や電話柱の移設工事も同時に進められることから、北海道電力ネットワーク㈱苫小牧支店と㈱つうけん道南事業部苫小牧事業所より事前協議が提出され、町教委による所在調査を実施、報告書を提出した。いずれも施工位置は盛土敷地内や包含層が消失している地点であり、道教委より「着工支障なし」の回答を得た（令和3年7月29日付け 教文博第1392号･1393号）。いずれも着工の際には法93条の届出が提出されている。

第3節 調査の方法

1. 調査区の設定

調査区は建設課が提出した事前協議書添付の施工図面をもとに、町道改良工事に伴う段丘掘削範囲とし、現道南側の東西長軸約37m、南北短軸約4mの範囲である。現道の法面整形部分と調査区東側の段丘平坦面は、遺物包含層が既に消失していることから工事立会とした。

2. グリッド網の設定

調査区内のグリッド網設定にあたっては、上厚真遺跡が所在する段丘面全体を網羅すべく北西部の軽舞川内水面上に図上の基点A-1（世界測地系公共座標 X座標:-150700･Y座標:-32450）を設定した。調査区西端部から北西に約114.2mにあたる。グリッド網も図上で設定し、5m四方で交点に公共座標値を被せ、南北軸をアルファベット、東西軸をアラビア数字で表記した。発掘調査区はX･Yラインの9～16区に至り、各グリッド呼称も北西コーナーの交点とした。

現地調査においては調査区が狭小であることから作業の安全性等を考慮し、グリッド杭の打設は行わず、調査測量基準杭を3ヵ所（KAM-A･B･C）に設け、光波式トータルステーションで各種データを記録した。測量基準杭の標高値は、発掘区西端より西側に約50mの位置、2018年9月6日発災の北海道胆振東部地震以降に厚真町建設課が設置した「仮BM №.1 H＝9.879m 2020年7月」より移設した（図Ⅰ-1）。

3. 包含層および遺構調査の方法

調査の準備段階は6月17日から着手し、ベンチマーク移設と調査担当者立会のもとジョレンを用いた人力併用でのバックホウによる表土・火山灰及び現道法面の崩落被覆土除去作業を行った。火山灰除去作業中に、遺物包含層の黒色土Ⅲ層上面にて鉄鍋片や貝殻片の一部を検出しており、中近世アイヌ文化期の遺物包含層の存在が判明した。

調査は、6月21日午後から移植ゴテによる包含層掘削調査を着手した。調査区は狭小であることからグリッド単位の面的調査とせず、主に調査区中央部から東西両端の調査排土捨て場方向への掘削調査を進めた。なお、今回は調査期間の工程上、斜面や遺物遺構の検出が少ない範囲はジョレンによる掘削調査を積極的に併用した。調査掘削は約5～10cmを1回の掘削深度とし、調査区を繰り返し掘り下げていった。なお遺物包含層中の樽前ｃテフラ（Ta-c）は黒色土中に5cm程度堆積しており、上層のⅢ層黒色土と下層のⅤ層黒色土を区分する鍵層となっているものの、黒褐色を呈しており一部は下層黒色土（Ⅴ層）との判別が困難であったため、一連の掘削調査となってしまった部分も僅かにあった。

遺構調査は、土坑墓や焼土、土器片や礫などの集中出土地点は光波式トータルステーションを用いて、平面範囲の輪郭線や出土地点単点を記録した。遺構は半裁断面の堆積状態を一眼レフデジタルカメラで撮影し、実測図化、土層注記を行い、土坑や柱穴は漸移層上面での検出確認のうえ、半裁し堆積状態等諸記録を行った。

出土遺物はⅢ・Ⅴ層共に全点に遺物番号を付し、担当者による出土層位と遺物種別を確認の後、トータルステーションによるXYZ座標（世界測地系公共座標）を記録し、取り上げた。

本来は発掘調査現場で遺物等出土状態の微細図作成や遺物取り上げの補足手簿作成などを行うべきであったが、町道改良工事を差し止めての短期間の調査であり、これらを略した。

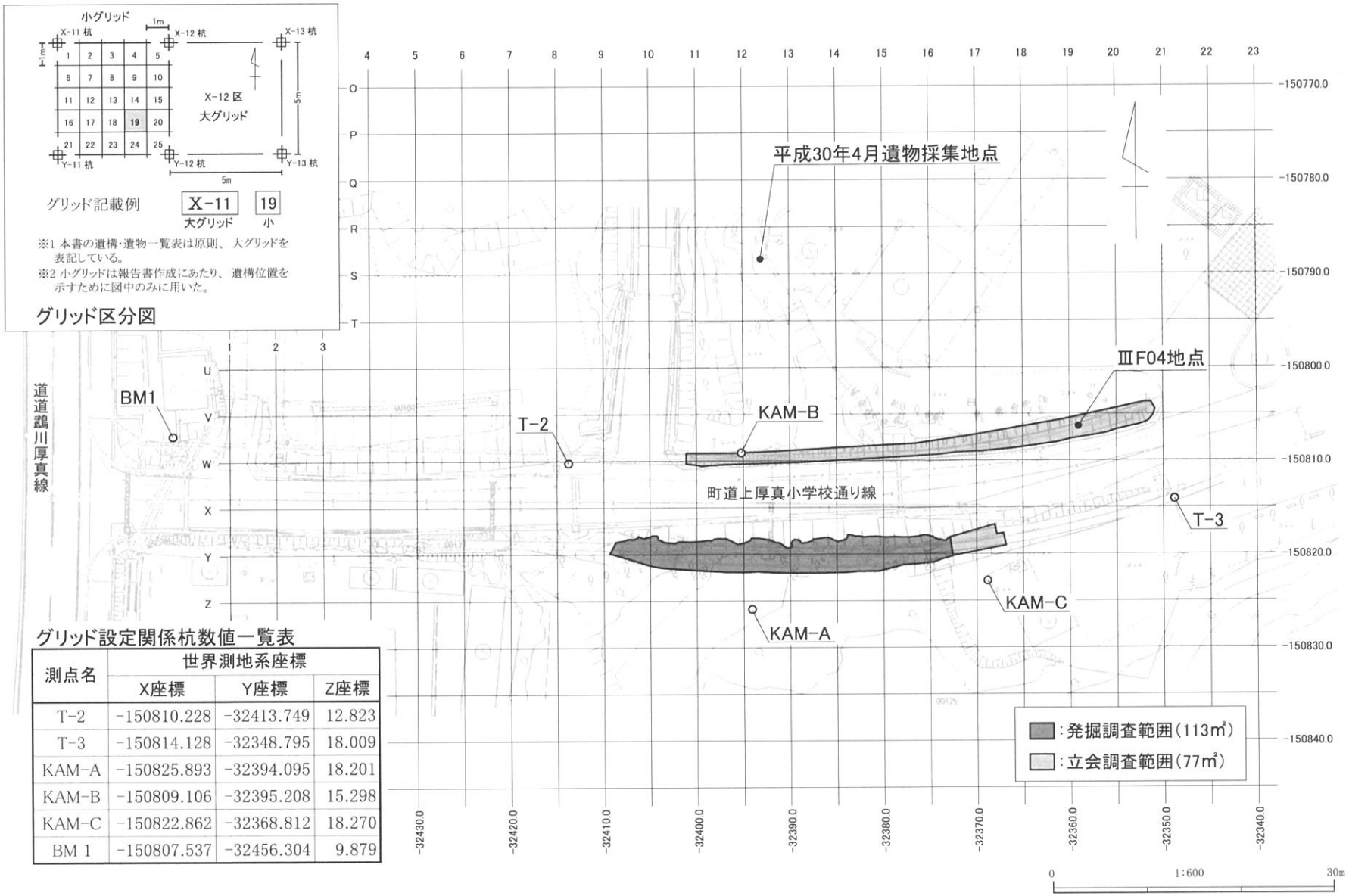
4. 整理作業

令和3年度に一次整理の遺物水洗と出土グリッドや層位の諸情報確認、遺物の種別分類・重量計測・台帳登録・注記作業、獣骨や貝殻の強化とクリーニング作業、フローテーション作業と一部の選別作業を実施した。また遺物出土状態の図化用画像編集やトレース図化作業も実施した。なお、金属製品は令和3年度の調査整理費用の確保ができなかったため、必要最低限の錆の除去作業を行い、湿度40%以下の特別収蔵庫内に設置している防湿庫内にて保管した。

令和4年度は、年度当初より整理作業の予算を確保したうえで二次整理を実施し、各種遺物の接合・実測・拓本採取作業や出土遺物の写真撮影等の作業を行った。この他、剥片石器実測は㈱トラスト技研、金属製品保存処理は㈱吉田生物研究所、年代測定を㈱パレオ・ラボへそれぞれ委託した。またフローテーションによって回収した動物遺存体を高橋 理氏に、炭化種子は高瀬克範氏に同定を依頼した。なお貝殻集中の分析にあたっては、発掘調査段階より元苫小牧市博物館長の佐藤一夫氏に多大なる御指導を頂いた。

図化トレース作業・編集については、Adobe Illustrator2021を用い、写真編集等もAdobe Photshop2021で行っている。報告書掲載図や写真図版、一覧表の編集・版組も上記のソフトで行い、本文原稿はWord、一覧表のExcelデータと合わせて印刷所へデジタル入稿した。

最終的な遺物の保管は、報告書掲載のものは図版毎に行い、それ以外のものは層位、遺構・調査区及び分類毎にコンテナに収納し軽舞遺跡調査整理事務所にて収蔵保管している。



グリッド設定関係杭数値一覧表

測点名	世界測地系座標		
	X座標	Y座標	Z座標
T-2	-150810.228	-32413.749	12.823
T-3	-150814.128	-32348.795	18.009
KAM-A	-150825.893	-32394.095	18.201
KAM-B	-150809.106	-32395.208	15.298
KAM-C	-150822.862	-32368.812	18.270
BM 1	-150807.537	-32456.304	9.879

図Ⅰ-1 グリッド設定・区分図及び座標杭位置図

第４節　遺物の分類

遺物の分類については、上幌内２遺跡（町教委 2017）や幌内８遺跡（町教委 2020）の分類を基準とし、今回の調査で出土していない遺物については記述を省略した。

1. 土 器

縄文時代早期から擦文文化期までの土器をローマ数字に群別し、アルファベットで時期細分した。

第Ⅰ群土器　縄文時代早期に属する土器。

Ａ類　貝殻文・条痕文土器。

A1 類　物見台式系・住吉町式などの尖底土器群。

A2 類　虎杖浜式・アルトリ式などの平底土器群。

Ｂ類　早期後半の東釧路式土器群。絡条体圧痕文、組紐圧痕文などを施すもの。

B1 類　東釧路Ⅱ式土器。

B2 類　東釧路Ⅲ式・コッタロ式土器。

B3 類　中茶路式土器。

B4 類　東釧路Ⅳ式土器。

第Ⅱ群土器　縄文時代前期に属する土器。

今回の調査では出土していない。

第Ⅲ群土器　縄文時代中期に属する土器。

今回の調査では出土していない。

第Ⅳ群土器　縄文時代後期に属する土器。

今回の調査では出土していない。

第Ⅴ群土器　縄文時代晩期に属する土器群。

今回の調査では出土していない。

第Ⅵ群土器　続縄文文化期に属する土器群。

Ａ類　続縄文文化期初頭～前葉の土器群。

A1 類　砂沢式・二枚橋式に並存する在地の土器。

ａ：札幌市 H37 遺跡 丘珠空港地点相当の土器。

ｂ：いわゆる汐見式相当の土器。

A2 類　砂沢式・二枚橋式に並存する搬入系土器。

Ｂ類　アヨロ 2･3 類土器。

Ｃ類　江別太式や後北式土器群。

Ｄ類　宇津内・下田ノ沢式土器群。

Ｅ類　北大Ⅰ式・Ⅱ式土器。

E1 類　北大Ⅰ式土器。

E2 類　北大Ⅱ式土器。

第Ⅶ群土器　擦文文化期に属する土器群。

Ａ類　北大Ⅲ式・十勝茂寄式土器。

Ｂ類　擦文土器（甕形）

B1 類　擦文前期に属する土器。

B2 類　擦文中期に属する土器。

B3 類　擦文後期に属する土器。

ａ：横走沈線文を地文とするもの。

ｂ：綾杉文主体のもの。

ｃ：斜位や縦位の沈線で鋸歯状、Ｘ字状の沈線文を構成するもの。

ｄ：３段以上の文様帯区画を有するもの。

ｅ：口唇部に並行沈線のみを施すもの。

ｆ：無文のもの。

Ｃ類　擦文土器（坏形）

Ｄ類　擦文土器（鉢形・壺形）

Ｅ類　ロクロ成形土器（土師器・須恵器）

2. 剥片石器

ポイント類

長軸 4cm を境に石鏃と石槍･石銛とを区分した。

Ａ　「石鏃」

１　細身で薄手のもの。

２　無茎のもの。

ａ　平基。　ｂ　凹基。　ｃ　凸基･円基。

３　明瞭な茎部をもつもの。

４　不明瞭な茎部を持つもの。

Ｂ　「石槍」・「石銛」

今回の調査では出土していない。

Ｃ　欠損品･未成品

石 錐

今回の調査では出土していない。

ナイフ･スクレイパー類

縁辺に刃部が作出されたもののうち、素材の１辺に対し半分以上の範囲で刃部が形成されているもの。

A　「つまみ付きナイフ」

「縦型」「中間型」「横型」はそれぞれ以下の基準で分類する。

1　つまみ部軸線と体部軸線の角度が 30°未満の「縦型」のもの。

2　つまみ部軸線と体部軸線の角度が 30～60°未満の「中間型」のもの。

3　つまみ部軸線と体部軸線の角度が 60°以上の「横型」のもの。

4　剥片素材につまみを形成するもの。

5　つまみ付きナイフに分類されるが欠損のあるもの。

B　素材長軸端部に刃部が形成されているもの。

1　「ラウンド・スクレイパー」

2　「エンド・スクレイパー」

C　素材長軸端部に刃部が形成されていないもの。

1　「サイド・スクレイパー」

2　「コンケイブ・スクレイパー」

3　「抉入石器」

D　続縄文文化に伴う「ナイフ状石器」

E　欠損品

両面調整石器

今回の調査では出土していない。

R.F・U.F

一縁辺の長さの半分以下の調整痕があるものを R.F、使用による細かな剥離があるものを U.F とした。

ピエス・エスキーユ

今回の調査では出土していない。

石 核

今回の調査では出土していない。

3. 礫石器

石 斧　今回の調査では出土していない。

たたき石　今回の調査では出土していない。

すり石　今回の調査では出土していない。

砥 石　今回の調査では出土していない。

石 鋸　今回の調査では出土していない。

滑沢面のある礫

素材礫の形状を変えず、平滑な面があるもの。

線条痕はほとんど観察できない。

線条痕のある礫

今回の調査では出土していない。

石皿・台石

今回の調査では出土していない。

加工痕ある礫

今回の調査では出土していない。

4. その他

金属製品　鉄製品のみが出土し、鉄鍋、刀剣類、刀子、板状鉄製品が出土している。

ガラス製品　小玉。

表Ⅰ-1 上厚真遺跡検出遺構一覧表

発掘調査面積	113㎡									
時 代	遺構名									備 考
	土坑墓	焼土	柱穴	遺物集中	灰集中	獣骨集中	貝殻集中	土器集中	礫集中	
中世アイヌ文化期	－	1	2	2	(1)	(1)	(1)	－	1	
擦文文化期	－	－	－	1	－	－	－	1	1	
続縄文文化期	－	3	－	－	－	－	－	2	－	
縄文時代	1	1	－	－	－	－	－	－	－	

(　)は遺物集中区を構成する遺構

表Ⅰ-2 上厚真遺跡出土遺物一覧表

遺構名/包含層			遺物細分類							合計
			土器	剥片石器	礫石器	剥片類	礫	鉄製品	ガラス製品	
			P	FT	ST	FC	S	IP	GP	
Ⅲ層	ⅢF-02		-	-	-	-	2	-	-	2
	ⅢB-01	ⅢAS-01	-	-	-	1	-	-	-	1
		ⅢBB-01	-	-	-	-	3	-	-	3
		ⅢSHB-01	-	-	-	1	18	3	-	22
	ⅢB-02		-	-	-	-	3	-	-	3
	ⅢB-03		40	-	-	-	28	1	-	69
	ⅢPB-01		13	-	-	-	-	-	-	13
	ⅢPB-02		27	-	-	1	3	-	-	31
	ⅢPB-03		27	4	-	6	-	-	-	37
	ⅢSB-01		-	-	1	-	58	-	-	59
	ⅢSB-02		-	-	-	-	13	-	-	13
	包含層		46	4	1	26	113	11	1	202
	小計		153	8	2	35	241	15	1	455
Ⅴ層	包含層		7	1	-	1	-	-	-	9
	小計		7	1	-	1	-	-	-	9
表採・撹乱			-	-	-	-	2	-	-	2
合計			**160**	**9**	**2**	**36**	**243**	**15**	**1**	**466**

第5節　遺跡の位置

1. 厚真町の概要

A　地理的環境

厚真町は石狩低地帯南部の東縁にあたる、北海道胆振支庁の東部に位置し、夕張山地南部から太平洋に注ぐ二級河川厚真川水系に水田地帯が広がる人口4,370人（令和5年1月末現在）の農業の町である。町域は流路52.3kmの二級河川厚真川流域に広がり、南北32.5km、東西17.3kmと細長く、総面積は404.56㎢である。南部は約6.5kmにわたって太平洋に面し、勇払平野の東端に位置している。北海道の空の玄関口である新千歳空港から車で35分、海上物流の拠点である苫小牧港からは40分と現代社会において利便性に恵まれた地理的環境である。町域を縦貫する厚真川は源流部から河口まで厚真町域のみを流下している。行政区域の北部は夕張市や由仁町と接し、夕張山地南部の標高200～600mの山地が続き、厚真町の総面積の約70%を山林が占めている。東は夕張山地から続く低い山地を挟んでむかわ町と接し、北西は標高100m前後の山地性丘陵を挟んで安平町、西は厚真町域を含む苫小牧東部工業地帯（以下、苫東地区）内で苫小牧市と接している。厚真の語源は3説ほどあるが、最も有力な説として「アットマム」（at-to-mam:向こうの湿地帯）で、南部に広がる湿地帯に付けられたものが転訛したものという（厚真村1956）。

町内は、大きく4つの地区に分かれ、厚真川沿いに下流域・南部域の浜厚真・上厚真地区、中流域の厚真市街地周辺、中流から上流域・北部域の富里・幌内地区のほか、むかわ町と接し入鹿別川流域の鹿沼地区がある。ここでは厚真川流域を中心に概略を述べる。

南部は砂浜が続き、明治期以前より地引網での鰯漁が盛んであったが、現在では苫小牧沿岸にかけてウバガイ（ホッキ貝）の全国一の漁場となっている。かつては標高10m前後の砂丘列

が発達し、背後には海岸平野の湿地帯が広がっていたが、現在は苫東地区の一部で、苫小牧東港や道内最大の火力発電所、国内最大の石油備蓄タンク群等の工業用地や採草地、畑地となっている。また国道や高規格道路、鉄道があり、札幌圏から日高方面への主要幹線路ともなっている。地形的には、苫東地区の静川・源武台地と同じ様相を示し、樹枝状に開折された標高10～20m前後の支笏火山・樽前山の火山砕屑物で構成される低平な台地と湿地、湖沼群が見られる。特に厚真川左岸から入鹿別川右岸にかけての厚和地区は苫小牧市域の静川台地や柏原台地とほぼ同じ地形・地質様相を呈している（仮称厚和台地・鯉沼台地）。

中部には厚真町の中心市街があり、鵡川、平取・穂別、早来、浜厚真方面への道道交差部に官公署や商業地、住宅地が形成され、町内の石油資源や林産資源、農産物の集散地として発展してきた経緯がある。地形的には厚真川本流と支流知決辺川、ウクル川などの合流点に形成された平野部に位置し、夕張山地系と馬追丘陵南端部の山地性丘陵に挟まれた地域となる。

中部以北の厚真川中流域は、厚真川は富里地区の頗美宇川（はびう）との合流点付近において流路方向を西に変え、左岸には河岸段丘が発達する。北部の幌内地区は、厚真川流域沿いの沖積地の最奥部で、厚真川本流とシュルク川、幌内川の3河川の合流点でもある。この地区は上流域の山間部より産出される豊富な林産資源の集積地として発展し、明治44年から昭和24年までJR早来駅とを結ぶ軽便軌道が敷設されていた。2018年9月6日発災の北海道胆振東部地震において土砂災害が激しかった地域でもあり、現在は住宅や道路、農地に面した崩壊地等の災害復旧作業は概ね完了しているものの、震災後の人口流出が激しく、今後の復興、地域振興が課題となっている。山間部となる厚真川上流域は、新第三紀の堆積岩を基盤とする山地が続く。標高400m以上の頂部は少ないが、小河川の浸食により比較的急峻な山稜を特徴とする壮年期地形を呈している。厚真川源流部は夕張市、由仁町との1市2町の境界線付近、標高500m付近の夕張山地南域にある。

B　歴史的環境

埋蔵文化財包蔵地の概要

厚真町内には令和5年1月末現在で、後期旧石器時代から近世アイヌ文化期、近代に至る151ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている（図Ⅰ-2、表Ⅰ-3・4）。遺跡の分布傾向として、開発行為の多寡に左右されるが、南部の苫東地区や厚真川下流域左岸から入鹿別川流域右岸にかけての厚和台地や鯉沼台地、厚真川中流域の支流河川沿いのほか、北部の高丘地区および幌内地区に集中する傾向がある。遺跡の立地は、南部において湿地と隣接する台地縁辺部や湧水地付近、中部では厚真川沿いや小河川との合流点付近の河岸段丘縁辺部に多い。北部の山間部では、頗美宇川流域の高丘地区や厚幌ダム湛水区域内の河岸段丘上に多く分布する。これらは安平町安平地区や夕張市滝之上地区、むかわ町穂別・豊田地区へ抜ける山越えのルート上の遺跡と考えられ、土器胎土中に石英結晶粒を多量に含む富良野盆地系土器が出土している。

時期的には、町内最古の遺跡として上幌内モイ遺跡で札滑型細石刃核を伴う石器集中が1ヵ所検出している（町教委2006）。縄文時代の最も古いものでは豊沢4遺跡の試掘調査で早期中葉の物見台系貝殻文土器片1点が出土し、豊沢2遺跡において住吉町式ないしは沼尻式の土器片が採集されている（宮夫1980）。また近年、ニタッポロ沢遺跡においても貝殻腹縁文・条痕文を施文する土器片が出土している（道埋文2022）。時期が下って浜厚真3遺跡で東釧路Ⅱ式

土器がややまとまって出土（道埋文 2003）しており、早期中葉から後葉にかけての遺跡は厚真川中下流域に多い。上流域の調査では中茶路式期以降に遺物量が増加する。町内での遺跡数増加や規模の拡大は縄文時代前期前半の尖底土器群の時期で、オコッコ１遺跡（道埋文 2019）などで多量の被熱礫や哺乳綱の焼骨片が出土する遺跡が厚真町南部から北部に至るまで多数確認されている。これ以降、漸移的に遺跡数が増加し、中期末葉から後期初頭の北筒・余市式期に遺跡数のピークを迎える。縄文時代後期中葉から後葉にかけては遺跡数が激減し、晩期前葉以降、続縄文文化期に再び増加、擦文文化期前期は遺跡数が再び減少する傾向にある。この様な各時期における遺跡数の偏りは苫小牧市の傾向と概ね一致している。苫小牧市との差異としては擦文文化期中期後半から中世・近世アイヌ文化期にかけての遺跡数が急激に増加しており、かつ多種多様な交易性の搬入遺物が出土し注目されている。

2. 遺跡の位置及び調査略歴と周辺の環境

A　地理的環境

上厚真遺跡が所在する厚和地区は昭和 32 年の字名地番改正までは周文（シュブン）と称し、アイヌ語の「シュプン」を語源として淡水魚「ウグイ」の固有名詞とされている（厚真村 1956）。アイヌ語地名に関しては、松浦武四郎も「シユブン　小川也。巾二三間、遅流にしてふかし。此上もまた谷地に成水わろしと。依て桃花魚（うぐい）より外には何も不入る故に此名有るなり。シユフンは桃花魚の事也。」と記述している（松浦・秋葉ほか 1985）。武四郎記述のシユフンは、上厚真遺跡調査地点より約 1.8km 下流の厚真川左岸で合流する無名の小河川で、現在は排水路として整備されている（池田・亀井 1976：ペンケシュプン）。

遺跡は厚真川下流域左岸、複雑な樹枝状に開析が進む厚和台地の北西側縁辺部の標高約 20 mの台地上に立地し、東西約 230m、南北約 120m、面積約 23,000 ㎡の広範囲にわたって形成されている。遺跡の北側には東から流れ込む軽舞川、北東から流れ込む当麻内川との合流点があり、その北部には竜神沼などの湖沼を伴う低湿地がある。対岸にも広大な沖積低地が広がり、上厚真市街地が形成されている。なお、これら周辺の沖積低地は、各種地質ボーリング調査でシルト層や泥炭層が厚く堆積する超軟弱地盤で、かつ自然貝層も確認されていることから縄文時代前期の海進期において海水が入り込む内湾であったことが判明している。

遺跡は厚真川と軽舞川などの支流合流点に面し、北側や西側の広大な沖積低地に突出した厚和台地上縁辺部の好条件に立地しているといえる。台地上からは厚真川上流域への交通の指標ともなる夕張岳を望むことができ、交通ルートの要衝ともいえ、現代においても遺跡周辺は道道や町道の交差部であり、交通の要衝となっている。なお町内における同様な立地環境は、厚真川中流域の新町遺跡があり、南部の上厚真遺跡と並び厚真町内で大規模な複合遺跡である。

B　上厚真遺跡の調査歴

上厚真遺跡の最初の記録として、昭和 31 年 7 月発行の『厚真村古代史』がある（厚真村郷土研究会 1956）。これによると昭和 20 年に上厚真小学校のグラウンド拡幅工事の際に東側より多数の土器石器が出土しており、円筒上層式や後晩期、前北式（続縄文前半期の資料）の遺物出土が記録されている。その後も郷土研究会による遺物採集は続けられ、北海道大学大場利夫氏の研究室へ鑑定に持ち込まれている。その結果、恵山式の完形土器や後北式土器、擦文後期の土器と判明している（厚真村郷土研究会 1958）。翌年には、後北式の注口土器や獣骨が出

土していることが記録され、続いて北筒式土器の出土や住居跡、焼土の検出も記されている（厚真村郷土研究会 1959・1960）。また、軽舞遺跡調査整理事務所収蔵庫には上厚真遺跡または軽舞遺跡出土とされる魚形石器1点が保管されている。上記の考古学的記録のほか、厚真村古代史（厚真村郷土研究会 1956）には、地域の古老の聞き取りでアイヌ民族の住居跡が最近まで残存していたとの記録もあり、現在、60歳代以上の町民からは、通学の際に調査地点の町道法面などから土器石器などの遺物を採集していた話を伺うこともでき、町内でも古くから埋蔵文化財包蔵地であることが認知されていた。

埋蔵文化財行政の記録としては、昭和54年9月に北海道教育委員会による一般分布調査で埋蔵文化財包蔵地カードに登載され、52地点の登載のうち最初の登載番号（J-13-1）が付された。現在の厚真町立上厚真小学校の校舎は平成7年に建築され、これに関する埋蔵文化財事前協議、試掘調査等の記録が残っていないため詳細は不明である。なお平成20年4月に調査区南側に隣接する個人住宅の敷地拡張に伴い丘陵先端部付近、約300㎡の事前協議、試掘調査を実施し、2ヵ所のトレンチを掘開しているが遺構遺物は確認されていない。

C　周辺の遺跡

上厚真遺跡周辺2km圏内の遺跡として、南へ約460mに厚和12遺跡（J-13-141）や約1,590mに厚和7遺跡（J-13-70）、約1,890mに厚和11遺跡（J-13-140）、南東約1,320mに厚和6遺跡（J-13-66）がある（図Ⅰ-2・3）。いずれの遺跡も縄文時代の包蔵地で、開発行為に伴う事前協議の試掘調査で新規登載された包蔵地である。厚和6遺跡では縄文時代前期の中野式土器や磨製石斧、礫などが出土し、厚和7遺跡では竪穴住居跡1軒と後期前葉のタプコプ式土器や礫石器が出土している。厚和6遺跡以外の3ヵ所の遺跡では、Tピットを検出している。

やや離れているが、上厚真遺跡より厚真川沿いに下流へ約2,490mの位置に厚和1遺跡（J-13-51）がある。この遺跡は上厚真遺跡と並んで、規模の大きい複合遺跡で近世から近代にかけてのアイヌ民族のコタン（集落）跡でもある。昭和30年発行の『先史時代』には直径120cm、深さ約90cmで断面形が「巾着型」の「食料貯蔵址」が報告されている（石井 1955）。また翌年に刊行された厚真村古代史にも記録があり、縄文中期の萩ヶ岡式系土器や第一結束羽状縄文の土器拓影図が掲載されている（厚真村郷土研究会 1956）。ほか、近現代のアイヌ民族の埋葬地として紹介されており、昭和34年にはアイヌ人骨1体と刀剣類、煙管の出土が記されている。人骨は北海道大学に持ち込まれ40～50歳代のアイヌ民族のご遺骨と判明し、当時、札幌医科大学法医学教室に所属していた埴原和郎氏に預けられている（厚真村郷土研究会 1959）。現在、国土交通省所管の民族共生象徴空間慰霊施設に安置されている厚真町のアイヌ遺骨1体がこれにあたるものと思われる。また、土地所有者の古老からは、戦後まもなくまでアイヌ墓標があり袂には多数の漆器類が伏せておかれていたという。なお、厚和1遺跡についての記録は1858年に厚真を訪れた松浦武四郎も「キムンコタン」として記している。詳細は後述する。

3. 近世後期以降の厚和地区

厚和地区の最初の文献資料は、文化年間（1804～1818年）の「蝦夷地ユウフツ場所之圖」で、厚真川流域に6ヵ所のコタン（集落）が記され、シュブン蝦夷村7軒とある。その後、安政5年（1858年）、松浦武四郎6回目の蝦夷地探検の「安都麻志」がある（松浦・秋葉ほか 1985）。

この記録では、5ヵ所のコタン、23軒120名のアイヌ民族の住人が記されている。現在の厚和地区、厚真川東岸の高台（厚和1遺跡）には、キムンコタン（山の村）があり9軒46名が住んでおり、厚真川流域最大のコタンと記されている。住人のうち約3分の1にあたる16名が勇払会所や会所近くの弁天浜でのイワシ漁労働従事の「雇い」に出ており、高齢者や子供、病人が在住していることが記されている。どの家も煙草や粟、稗、隠元、蕪などの畑を耕し10俵20俵の収穫があり、大変豊かな集落であることが記されている。なお、武四郎が訪れた前年の安政4年（1857年）の「入北記」には、シユフン10軒48名と記されている（玉蟲ほか1992）。

武四郎はキムンコタンより沢地を越え、厚真川流域を北上しており、上厚真遺跡周辺の通過記録に「ノヤシベ」が記されている。現在の軽舞川と思われ、その上流域支流の野安部川の名称にあたる。数日前の洪水で増水した川を渡るにあたり、案内役のアイヌ民族「板蔵」が大木を3･4本切り倒し、即席の丸太橋を架け、馬6匹つないで川を渡したことが記されている。この当時、上厚真遺跡にはコタンが無く、発掘調査地点の東側約800～1,000mの地点で渡河していると思われる。

明治5年（1872年）壬申9月の勇払郡各村畑反別調帳には厚真川流域に4ヵ村102名が記され、シュフン村7戸33名が記されている（土井2013）。

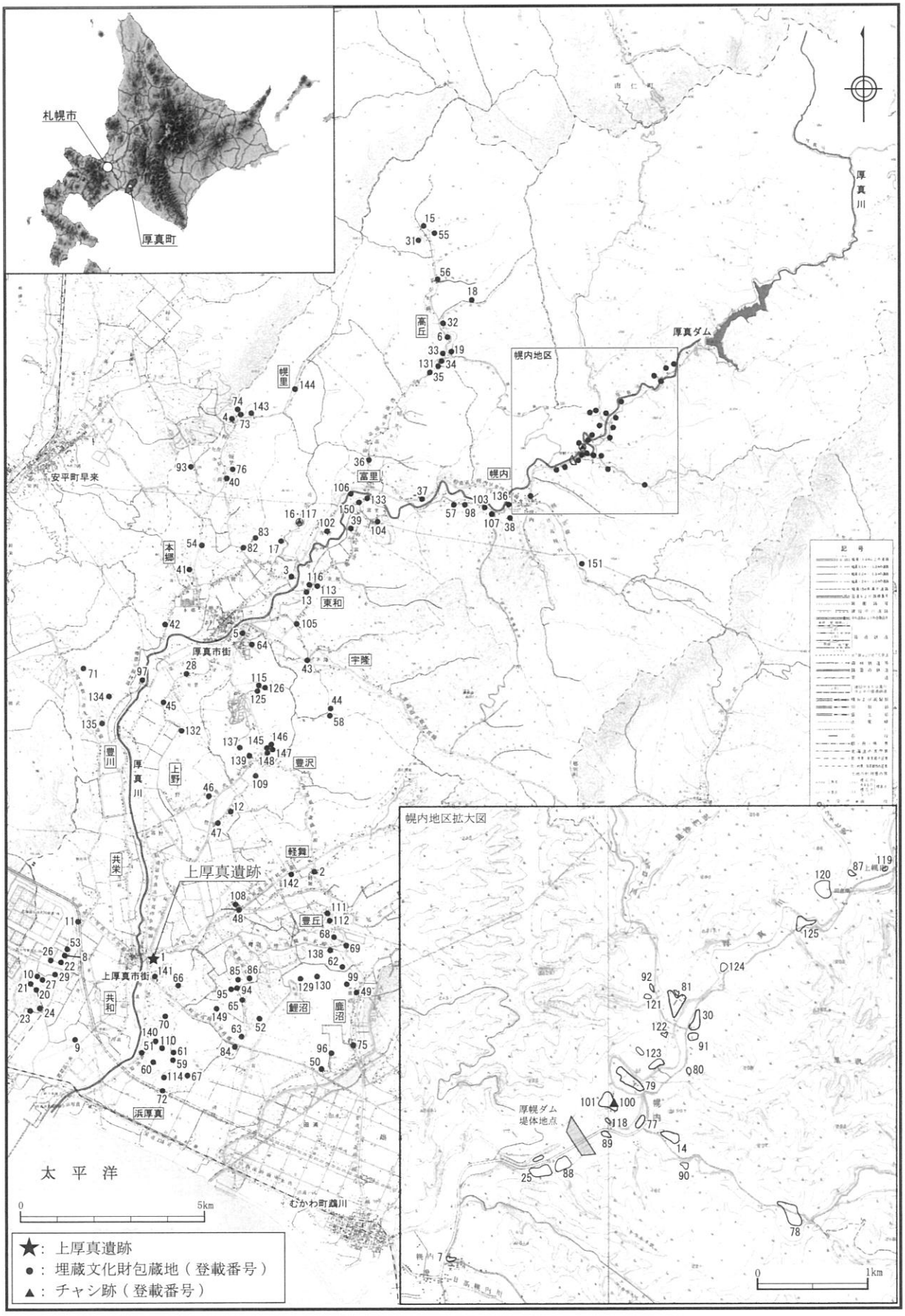
なお武四郎が記述したキムンコタン（前述のシュフン村）は、明治21年（1888年）に北海道庁のアイヌ民族への勧農政策により解体されている。町内に点在するコタンのアイヌ民族も含め現在の吉野地区へ強制移住させられている（厚真村1956）。

その後の厚和地区最初の和人移住者は、明治24年に岩手県人の沢里久平が開墾入地し、翌年に上厚真遺跡隣接地に中館馬蔵が入地している。和人の開拓入地、定住は浜厚真地区厚真川河口部の明治3年（1870年）に次ぐ早い地域で、以後の和人入植者も岩手県人が多い。

遺跡が所在する上厚真小学校は、明治32年（1899年）7月1日に浜厚真簡易教育所として開校したことが始まりである。その後明治38年に厚真第四尋常小学校となり、大正14年（1925年）9月に現在地に移転し、10月に新校舎建設を建設、2学級67名の児童が在籍した。小学校の移転は大正11年に現在の上厚真市街地に北海道鉱業鉄道株式会社の金山線上厚真駅が設置され、上厚真市街地の急激な発展、人口増加に伴うものであり、周辺の農産物や軽舞地区の石油などが移出されていた。なお、金山線は昭和18年（1943年）7月の国有化と同時に廃線となっている。

太平洋戦争中の昭和19年から20年4月にかけて浜厚真地区を中心とする厚真町南部一帯に連合国軍の上陸戦が想定され、厚和地区にもコンクリート製トーチカ3基や塹壕群が構築され、現在は2ヵ所が残っている。上厚真遺跡発掘調査区の南約530mの地点の日本ホワイトファーム㈱食品工場敷地内に1基を見ることができる（図Ⅰ-3）。

現在に至る厚和地区は、昭和42年に発掘調査区より約120m北西の段丘下に地下水を利用した上厚真簡易水道浄水場が整備された。昭和59年9月に日本ホワイトファーム㈱食品工場が操業を始め、厚和地区内に鶏舎など4施設がある。この他に共和コンクリート㈱厚真工場も操業している。平成15年に厚和地区南端部に厚真IC～鵡川IC間の日高自動車道が開通している。現在は26戸52名（令和5年1月末現在）で厚真町南部の酪農と畑作地帯となっている。



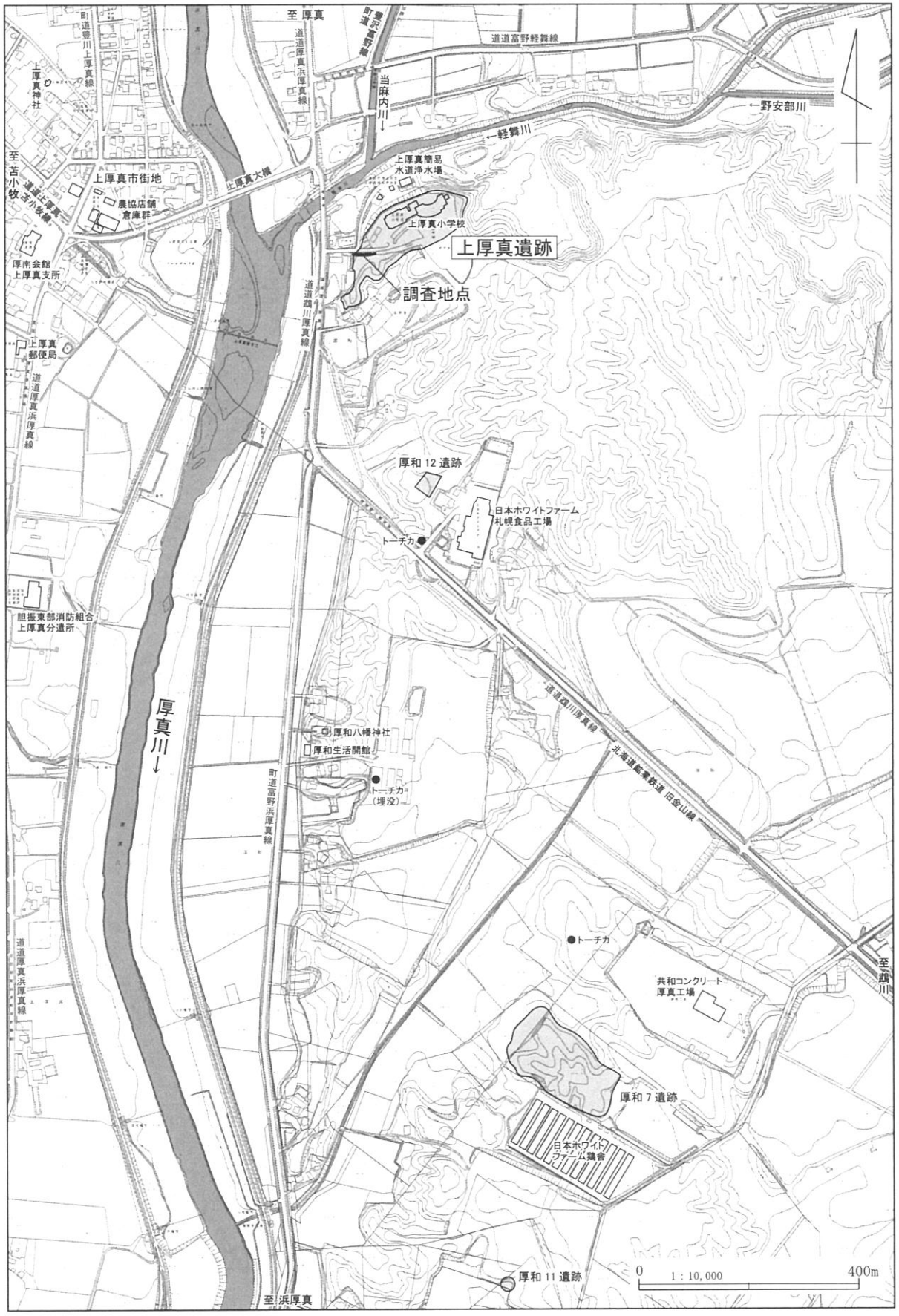
図Ⅰ-2 厚真町内遺跡分布図（令和5年1月31日現在）

表Ⅰ-3 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(1)

登載番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
1	**遺物包含地**	**上厚真遺跡**	**縄文早・中期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期**	**2021**
2	遺物包含地	軽舞遺跡	縄文中期、続縄文期	
3	墳墓・遺物包含地	朝日遺跡	縄文中～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期、近代	2012・13
4	遺物包含地	幌里1遺跡	縄文中・晩期、続縄文期	
5	墳墓・遺物包含地	新町遺跡	縄文早・中期、続縄文期、アイヌ期	
6	遺物包含地	高丘1遺跡	縄文中期・続縄文期、擦文期、アイヌ期	
7	遺物包含地	幌内1遺跡	縄文中・後期	
8	集落跡	共和遺跡	縄文晩期、続縄文期、擦文期	1978
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	詳細不明	
10	溝穴遺構	厚真10遺跡	縄文中・晩期	1977・78
11	遺物包含地	厚真11遺跡	縄文時代	
12	遺物包含地	豊沢1遺跡	続縄文期	
13	遺物包含地	東和遺跡	縄文後期	
14	集落跡	オニキシベ1遺跡	縄文早～晩期、擦文期	2012・13
15	遺物包含地	高丘3遺跡	縄文中期	
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	中世アイヌ期	
17	遺物包含地	桜丘1遺跡	縄文早・中～晩期、続縄文期、擦文期	2021
18	遺物包含地	高丘2遺跡	詳細不明	
19	集落跡	高丘10遺跡	詳細不明	
20	集落跡	厚真1遺跡	縄文中期	1976
21	溝穴遺構	厚真2遺跡	縄文時代	1977
22	溝穴遺構	厚真3遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期	1978・79
23	集落跡	厚真4遺跡	縄文中・後期、続縄文期、近代	
24	遺物包含地	厚真5遺跡	縄文時代、続縄文期	
25	集落跡	厚幌1遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期	2002・03・08・12・13・15
26	集落跡	厚真7遺跡	縄文早・中～晩期、続縄文期、擦文期	1977・78
27	集落跡	厚真8遺跡	縄文早・中～晩期、続縄文期	1977
28	溝穴遺構	美里2遺跡	縄文早・中期	
29	墳墓	厚真12遺跡	縄文早・後・晩期、擦文期	1979
30	集落跡	上幌内1遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2014・16
31	遺物包含地	高丘4遺跡	縄文時代	
32	遺物包含地	高丘5遺跡	縄文時代	
33	遺物包含地	高丘6遺跡	縄文時代	
34	遺物包含地	高丘7遺跡	縄文中期	
35	遺物包含地	高丘8遺跡	縄文時代	
36	遺物包含地	高丘9遺跡	続縄文期	
37	集落跡	富里1遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期	2015・16
38	遺物包含地	幌内4遺跡	縄文中期?	
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	縄文時代	
40	遺物包含地	幌里2遺跡	縄文中期	
41	遺物包含地	本郷1遺跡	縄文中・晩期	
42	遺物包含地	本郷2遺跡	縄文後期	
43	遺物包含地	宇隆1遺跡	縄文晩期、続縄文期、擦文期	2014
44	遺物包含地	宇隆2遺跡	縄文後期	
45	遺物包含地	美里1遺跡	縄文中期	
46	遺物包含地	豊沢2遺跡	縄文早期	
47	遺物包含地	豊沢3遺跡	続縄文期・擦文期	
48	遺物包含地	鯉沼1遺跡	縄文中期	
49	遺物包含地	鹿沼2遺跡	縄文中期	
50	遺物包含地	鹿沼1遺跡	縄文早期	
51	遺物包含地	厚和1遺跡	縄文中期、アイヌ期	
52	遺物包含地	鹿沼3遺跡	縄文中・晩期	
53	溝穴遺構	厚真13遺跡	縄文早期	1980
54	遺物包含地	本郷3遺跡	縄文時代	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	縄文晩期	
56	遺物包含地	高丘12遺跡	縄文時代	
57	墳墓・盛土遺構	幌内5遺跡	縄文前・後期、近世アイヌ期	2009
58	溝穴遺構	豊沢4遺跡	縄文早・後期	
59	遺物包含地	厚和2遺跡	縄文中期	
60	遺物包含地	厚和3遺跡	縄文後期	
61	遺物包含地	厚和4遺跡	縄文中期	
62	遺物包含地	鹿沼4遺跡	縄文時代	
63	遺物包含地	厚和5遺跡	縄文時代	
64	遺物包含地	新町2遺跡	縄文後期	
65	遺物包含地	鹿沼5遺跡	縄文後期	
66	遺物包含地	厚和6遺跡	縄文前期	
67	遺物包含地	浜厚真2遺跡	縄文早期	
68	溝穴遺構	鯉沼2遺跡	縄文時代	1999・2000・18
69	遺物包含地	豊丘遺跡	縄文前期	
70	集落跡	厚和7遺跡	縄文後期	
71	集落跡	豊川1遺跡	縄文前・後・晩期	2000
72	溝穴遺構	浜厚真3遺跡	縄文早・後期	2002
73	遺物包含地	ニタッポロ沢遺跡	縄文早～晩期	2021
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	縄文時代	
75	溝穴遺構	入鹿別沼遺跡	縄文中期	
76	溝穴遺構	幌里3遺跡	縄文時代	
77	集落跡・墳墓	オニキシベ2遺跡	縄文中・後期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2007・08
78	集落跡	オニキシベ3遺跡	縄文早・中・後期	2014-16
79	集落跡・墳墓	上幌内モイ遺跡	旧石器、縄文早・中～晩期、続縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期	2004-07
80	溝穴遺構	一里沢遺跡	縄文早～後期、擦文期、アイヌ期、	2014
81	集落跡	ショロマ1遺跡	縄文早～後期、擦文期、中世アイヌ期	2013-16
82	遺物包含地	東ニタッポロ1遺跡	縄文中・晩期	
83	遺物包含地	東ニタッポロ2遺跡	縄文中・晩期	
84	遺物包含地	浜厚真4遺跡	縄文中期	
85	集落跡	鯉沼3遺跡	縄文早～晩期	2004-07
86	遺物包含地	鯉沼4遺跡	縄文後期	
87	遺物包含地	イクバンドユクチセ遺跡	縄文後期	
88	集落跡	厚幌2遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、中世アイヌ期	2015-17
89	集落跡	オニキシベ4遺跡	縄文早・中～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2012
90	集落跡	オニキシベ5遺跡	縄文中期・後期	2010・11

表Ⅰ-4 厚真町内埋蔵文化財包蔵地一覧表(2)

登載番号	種別	名称	時代	発掘調査年度
91	集落跡・墳墓	上幌内2遺跡	縄文早～後期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2014・16
92	集落跡	ショロマ2遺跡	縄文前～後期	2013・14
93	溝穴遺構	幌里4遺跡	縄文時代	
94	集落跡	厚和8遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、中世アイヌ文化期	
95	遺物包含地	厚和9遺跡	縄文中期	
96	遺物包含地	鹿沼6遺跡	縄文時代	
97	遺物包含地	豊川2遺跡	続縄文期、擦文期	
98	集落跡	幌内6遺跡	縄文前～晩期、擦文期、中世アイヌ期	2015
99	集落跡	鹿沼7遺跡	縄文早～晩期	
100	チャシ跡	ヲチャラセナイチャシ跡	中世アイヌ期	2008・10
101	集落跡	ヲチャラセナイ遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2008-12
102	遺物包含地	吉野1遺跡	縄文中・晩期	
103	集落跡	幌内7遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2008・15・16
104	集落跡	ニタップナイ遺跡	縄文前～後期、続縄文期、擦文期、近世アイヌ期、近代	2007・08
105	遺物包含地	宇隆3遺跡	縄文中期	
106	遺物包蔵地	富里2遺跡	縄文後・晩期、擦文期、近世アイヌ期	2009
107	集落跡・盛土遺構	オコッコ1遺跡	縄文前～後期、続縄文期、擦文期、中世アイヌ期	2015・16
108	遺物包含地	軽舞2遺跡	縄文前期、続縄文期	
109	集落跡	豊沢5遺跡	縄文後・晩期	2016
110	遺物包含地	厚和10遺跡	縄文早・中・後期	
111	溝穴遺構	豊丘2遺跡	縄文早期	2017
112	遺物包蔵地	豊丘3遺跡	縄文中期	
113	遺物包蔵地	東和2遺跡	縄文晩期	
114	遺物包含地	浜厚真5遺跡	縄文後期	
115	遺物包蔵地	豊沢6遺跡	縄文早・中・後期	
116	遺物包蔵地	東和3遺跡	縄文早期	
117	遺物包含地	桜丘2遺跡	縄文中期	
118	溝穴遺構	オニキシベ6遺跡	縄文前～晩期、続縄文期、擦文期	2012
119	溝穴遺構	イクバンドユクチセ2遺跡	縄文中・後期	2013
120	集落跡	イクバンドユクチセ3遺跡	縄文早・中・後期、擦文期、中世アイヌ期	2013
121	集落跡・墳墓	ショロマ3遺跡	縄文早～後期、続縄文期、擦文期	2013
122	集落跡・墳墓	ショロマ4遺跡	縄文早・中・後期、縄文文化期、擦文期、中世アイヌ期	2014
123	集落跡・墳墓	上幌内3遺跡	縄文早～後期、続縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期、近代	2013・14
124	集落跡	上幌内4遺跡	縄文早～後期、中世アイヌ期	2014-16
125	集落跡・溝穴遺構	上幌内5遺跡	縄文中・後期	2013・15・16
126	遺物包含地	豊沢7遺跡	縄文中・後期	
127	遺物包含地	豊沢8遺跡	縄文後期	
128	遺物包含地	ヲイカルマイ遺跡	続縄文期、擦文期、中・近世アイヌ期、近代	2010・11
129	遺物包含地	長沼1遺跡	縄文早期	
130	遺物包含地	長沼2遺跡	縄文中期	
131	遺物包含地	高丘13遺跡	縄文前期、擦文期	
132	遺物包含地	上野1遺跡	縄文中期	
133	溝穴遺構	富里3遺跡	縄文中・晩期、アイヌ期	2015
134	遺物包含地	豊川3遺跡	縄文晩期	
135	遺物包含地	三ヶ月沼遺跡	縄文晩期	
136	集落跡	幌内8遺跡	縄文早～晩期、続縄文期、中世アイヌ期	2018・19
137	遺物包含地	豊沢9遺跡	縄文時代	
138	溝穴遺構	鯉沼5遺跡	縄文時代	
139	遺物包含地	豊沢10遺跡	縄文後・晩期	2017
140	溝穴遺構	厚和11遺跡	縄文時代	
141	溝穴遺構	厚和12遺跡	縄文時代	
142	遺物包含地	軽舞3遺跡	縄文早・中・後期、擦文期	
143	遺物包含地	ニタッポロ沢2遺跡	縄文中期	
144	遺物包含地	幌里5遺跡	縄文中期、擦文期	
145	遺物包含地	豊沢11遺跡	縄文中期・続縄文期	
146	遺物包含地	豊沢12遺跡	縄文中・後期	
147	集落跡・溝穴遺構	豊沢13遺跡	縄文時代	2020
148	遺物包含地	豊沢14遺跡	縄文後期	
149	溝穴遺構	厚和13遺跡	縄文時代	
150	遺物包含地	富里4遺跡	縄文早・中・晩期、中世アイヌ期	2021
151	遺物包含地	日高幌内1遺跡	縄文中・後期	2021



図Ⅰ-3　上厚真遺跡周辺の地形図

4. 調査区の地形と地質

上厚真遺跡は標高約 20m前後の厚和台地北西端部に立地しており、発掘調査区は現地表面で標高 12.5～18.5mの北西斜面から段丘平坦面に所在する。調査区周囲は町道上厚真小学校通り線や事業者事務所、住宅や火山灰採取地（現太陽光ソーラー発電所）などにより地形は大きく改変されているものの、一部の残存地形から、調査区は南西に張り出す舌状台地の基部にあたる（図Ⅰ-3）。

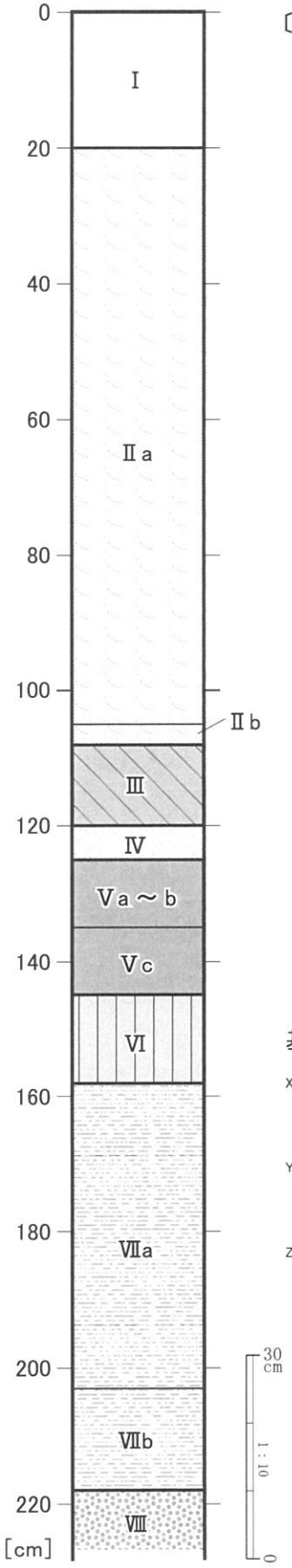
この段丘面は、約 40 万年前の早来層（浅海、内湾海成層）を基底とし、その上部に 12.5 万年前の厚真層（海成層）、約 11.2～11.5 万年前の洞爺テフラ、7.5～8.5 万年前の本郷層（池沼堆積層・低湿地層）、8.5～4.6 万年前のクッタラ、支笏テフラ群（小松原ほか 2014、中川 2018）が堆積している。これらは地質構造作用による隆起によるものとされている（近藤 1997）。今回の発掘調査に伴う基本土層確認トレンチ（図Ⅰ-4）では、支笏第一降下軽石（Spfa-1:噴出年代は約 4.6 万年）の上部層境を地表下約 160cm で確認している。

調査区 X・Y-14 区の基本土層確認トレンチでは、上層から笹や樹木等の植物根が密生する黒褐色～灰褐色の表土層（Ⅰ層）が 10cm 程度堆積する。下層の樽前 b テフラの再堆積物を基質とした砂質層である。Ⅱa 層とした樽前 b テフラ（Ta-b:1667 年降下）は層厚約 85cm を測り、細礫から砂質のフォールユニットが幾層にも発達しているほか、下層のⅡb 層は層厚約 3cm 前後の細礫質の有珠 b テフラ（Us-b:1663 年降下）である。

遺物包含層の主体となるⅢ層及びⅤ層は黒色～黒褐色の腐植シルト層で、間にⅣ層の樽前 c テフラ（Ta-c:約 2,500 年前降下）を挟在する。上層のⅢ層黒色土は層厚約 10cm、下層黒色土Ⅴ層は 20cm ほど堆積しており、それぞれ上層のテフラを斑状に混入する層厚 1cm 程度の上位を細分 a 層、中位本体層の黒色シルト層を b 層、下位の黒褐色～暗褐色土層を c 層に細分している。Ⅲ層では、Ⅲa 層が近世アイヌ文化期に相当し、Ⅲb 層は中世アイヌ文化期から擦文中期、Ⅲc 層は擦文前期から縄文晩期に相当する。なお、Ⅲb 層とⅢc 層との境界に白頭山苫小牧テフラ（B-Tm:946 年降下）が倒木痕の窪地など局所的に堆積している。Ⅳ層樽前 c2 テフラは砂質テフラ層で約 5cm 程度と薄く上下層の黒色土の混入により黒褐色を呈し不明瞭である。Ⅵ層は黒色土Ⅴ層と下層の風化ロームⅦ層との漸移層で、極少量の樽前 d2 パミス（Ta-d:約 8,000～9,000 年前降下）を僅かに含む縄文時代早期の遺物包含層で、今回の調査ではⅠ群 A1 類の住吉町式系の貝殻文尖底土器が出土した。

Ⅶ層は支笏第一降下軽石を主体とする風化ローム質土で、極僅かに恵庭 a テフラ降下軽石（En-a:約 2 万年前降下）を含み、上層はハードローム、下層は締りの弱いソフトロームとなっている。基本土層確認トレンチ掘開の際に約 4 ㎡の旧石器遺物包含層の確認調査を行ったが、遺物は出土していない。

調査区層序の最下層となるⅧ層は、支笏第一降下軽石層（Spfa-1:約 4.6 万年前降下）で、最大約 3cm の繊維状構造の軽石を含む。本層の基底面を確認していないため層厚は不明である。



〔Y-14区基本土層〕

Ⅰ層 ： 表土　笹等の植物根が密生する砂質土　層厚 10cm 前後。

Ⅱ層 ： 近世火山噴出物及び黒色砂質腐植土

a ；樽前 b テフラ (Ta-b)2.5YR7/3 浅黄色　細礫質降下軽石 1667 年降下。層厚 85cm 前後。

b ；有珠 b テフラ (Us-b)2.5YR8/1 灰白色　細礫質降下軽石 1663 年降下。層厚 3cm 前後。

Ⅲ層 ： 黒色腐植土
新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）の調査におけるⅠ黒（ⅠB）層相当。

a ； 砂質シルト 7.5YR2/1 黒色 Ⅱb 層を斑状に含む。近世初頭のアイヌ文化期遺物包含層。

b ； シルト 10YR1.7/1 黒色 やや粘性あり。上位と中位は中世アイヌ文化期遺物包含層。下位は擦文文化期包含層。Ⅲb 層とⅢc 層との層境に白頭山苫小牧火山灰 (B-Tm) シルト質降下火山灰 946 年降下。部分的に堆積する。

c ； 砂質シルト 10YR2/3 黒褐色。樽前 c テフラ基質のⅢ層黒色土混土層。

Ⅳ層 ： 樽前 c2 テフラ (Ta-c)10YR2/2 黒褐色。砂質降下軽石 約 2,500 年前後降下。不明瞭。層厚 5cm 前後。1 層のフォール・ユニット。

Ⅴ層 ： 黒色腐植土
新千歳空港（美沢川流域の遺跡群）調査におけるⅡ黒（ⅡB）層相当。

a ； シルト 10YR3/2 黒褐色 層厚 2cm 前後。縄文晩期前半の遺物包含層。

b ； シルト 10YR1.7/1 黒色 層厚 10cm 前後。縄文中･後期の遺物包含層。

c ； シルト 10YR2/3 黒褐色 層厚 10cm 前後。縄文前･中期の遺物包含層。Ta-d パミスを少量含む。

Ⅵ層 ： 漸移層 2.5YR4/6 褐色 暗褐色シルト。層厚 13cm 前後。ロームを基質とする。縄文早期の遺物包含層。

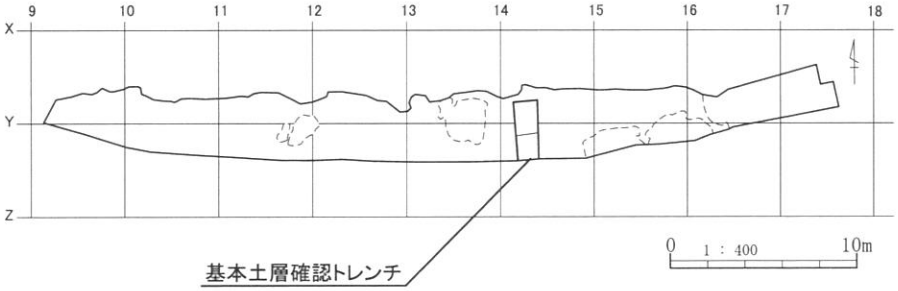
Ⅶ層 ： 黄褐色系風化ローム質土で a・b に細分した。

a ； シルト 10YR7/6 明黄褐色。恵庭 a テフラ (En-a：約 20,000 年前降下）の降下軽石を微量に含む。締りが強いいわゆるハードローム。

b ； シルト 10YR6/4 にぶい黄燈色。Spfa 起源のいわゆるソフトローム。

Ⅷ層 ： 支笏第一テフラ (Spfa-1)10YR5/8 黄褐色。細礫質降下軽石。約 46,000 年前降下。

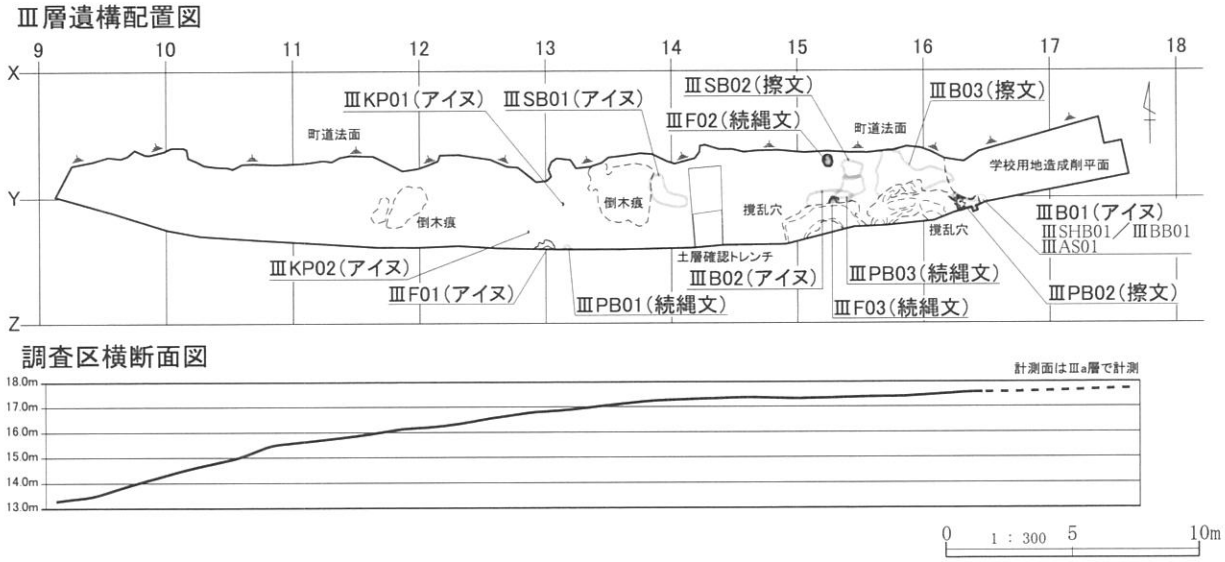
基本土層記録位置



図Ⅰ-4 基本土層柱状図

第Ⅱ章　Ⅲ層の調査

本章ではⅢ層で検出した中世アイヌ文化期と擦文文化期、続縄文文化期の遺構遺物を対象に掲載する。遺構遺物は調査区東側の平坦面付近集中し、遺物は調査区中央から西側の斜面にかけても出土している（図Ⅱ-1・表Ⅱ-1）。また、調査区から町道を挟んで北東側の工事立会区域（V-19 区）で焼土１ヵ所を検出している（図Ⅰ-1・Ⅱ-2）。これらはⅢ層検出面の細分層位や共伴遺物より帰属時期を判断し、以下、遺構種別毎に記載する。



図Ⅱ-1　Ⅲ層遺構配置図及び調査区横断図

表Ⅱ-1　Ⅲ層遺構属性一覧表

挿図番号	図版番号	遺構名	関連遺構名	帰属時期	グリッド	層位	平面形	調査面規模(cm) 長軸	調査面規模(cm) 短軸	厚さ/深さ(cm)	備考
Ⅱ-2	1-1～3	ⅢF-01	－	中世アイヌ文化期	Y-12・13	ⅢbU	－	(65)	(13)	10	
Ⅱ-2	1-4～6	ⅢF-02	－	続縄文文化期	X-15	ⅢcU	楕円形	(50)	40	7	
Ⅱ-2	1-7・8	ⅢF-03	－	続縄文文化期	X・Y-15	Ⅲc	楕円形	(26)	39	7	
Ⅱ-2	2-1・2	ⅢF-04	－	続縄文文化期	V-19	Ⅲc	－	(48)	－	10	工事立会区域町道法面検出
Ⅱ-2	2-3・4	ⅢKP-01	－	中世アイヌ文化期	Y-13	Ⅲb	－	上端 9	下端 1	18	傾き0°打ち込み
Ⅱ-2	2-5・6	ⅢKP-02	－	中世アイヌ文化期	Y-12	Ⅲb	－	上端 8	下端 3	6	
Ⅱ-3	カラー図版2	ⅢB-01	ⅢSHB-01	中世アイヌ文化期	X・Y-16	ⅢbU	不整形	86	(60)	5	ウバガイ集中
Ⅱ-3	2-7・3-1		ⅢAS-01		X・Y-16		不整形	53	28		
Ⅱ-3	2-7・3-1・2		ⅢBB-01		Y-16		不整形	77	(64)		獣骨集中
Ⅱ-4	3-3・4-1・2	ⅢB-02	－	中世アイヌ文化期	X・Y-15	ⅢbU	不整形	180	49	－	獣骨・礫の分布
Ⅱ-4	4-3～5	ⅢB-03	－	擦文文化期	X-15・16	ⅢbL	不整形	304	(133)	－	獣骨・土器・礫の分布
Ⅱ-2	4-6	ⅢPB-01	－	続縄文文化期	Y-13	ⅢcU	－	19	(17)	－	北大Ⅰ式
Ⅱ-4	4-7・8・5-1	ⅢPB-02	－	擦文文化期	X・Y-16	ⅢbL	不整形	82	47	－	
Ⅱ-4	5-2	ⅢPB-03	－	続縄文文化期	X・Y-15	Ⅲc	不整形	133	80	－	汐見式
Ⅱ-6	5-3	ⅢSB-01	－	中世アイヌ文化期	X・Y-13・14	ⅢbU	不整形	(174)	61	－	
Ⅱ-6	5-4	ⅢSB-02	－	擦文文化期	X-15	ⅢbL	不整形	76	68	－	

第1節　焼土

調査区東側の平坦面に中世アイヌ文化期の1ヵ所（ⅢF-01）、続縄文文化期2ヵ所（ⅢF-02・03）と町道を挟んで北側の法面施工時の工事立会で続縄文文化期の焼土1ヵ所（ⅢF-04）の計4ヵ所を検出した。以下に、各遺構の詳細を記す。

ⅢF-01（図Ⅱ-2　図版1-1～3）

位置：Y-12・13区　層位：Ⅲb層上位　帰属時期：中世アイヌ文化期新段階

平面形：－（調査区外）　平面規模：長軸(65)cm×短軸(13)cm　厚さ10cm

確認・調査：層厚約3cmのⅢa層の掘削調査を終えた時点で、調査区壁面にかかって焼骨片を伴う焼土ブロックを検出し、二次的に遺棄された投棄焼土と想定していた。平面範囲を記録し、焼骨片を含む層厚3cm前後の焼土ブロック層をフローテーションサンプルとして約1.2ℓの土壌を掘削回収したところ、下層から地山被熱層を検出し、この場所で形成された焼土と判明し、遺構名ⅢF-01を付与した。調査区壁面に沿う断面確認のトレンチ掘開作業で、指示不手際により地山被熱層全てを掘削してしまい、被熱層範囲の記録は残っていない。その後、調査区壁面にて焼土断面の実測と撮影を行い調査終了とした。

堆積状況：1層は当初、投棄焼土と想定した際の焼土ブロック層で、被熱白色化した獣骨の焼骨片のほか、魚骨と思われる針状の微細な焼骨片も含む。焼土ブロックは明赤褐色で3層の地山被熱層に由来し、焼土形成時の撹拌による可能性があり、燃焼面層位と思われる。2層は焼土本体より約20cm西側に検出した焼土ブロックで、燃焼面と同一層位であり、焼土形成当時に二次的に動いた可能性がある。3層はⅢb層中位の地山被熱層で、強く被熱し明赤褐色を呈し、部分的に土壌の焼き締り硬化がみられる。4層は漸移的な弱い被熱層で斑状を呈する。

帰属時期：Ⅲa層除去段階でⅢb層上位の燃焼面を検出しており、層位的に中世アイヌ文化期の新しい段階で、他の出土遺物と同じく16世紀代と思われる。

なお同一図版で示したが、焼土東側縁辺部より約40cmの地点で続縄文文化期末葉の北大Ⅰ式の土器集中ⅢPB-01を検出している。調査区壁面においても続縄文土器はⅢc層上位での検出層位であり、Ⅲ層黒色土中において焼土形成時期との時間差を層位的に示している。

ⅢF-02（図Ⅱ-2　図版1-4～6）

位置：X-15区　層位：Ⅲc層上位　帰属時期：続縄文文化期前葉

平面形：楕円形　平面規模：長軸(50)cm×短軸40cm　厚さ7cm

確認・調査：X-15区の礫集中（ⅢSB-02・擦文文化期）を精査、Ⅲb層掘削除去中にⅢc層上面にて、焼骨片を少量含む極暗赤褐色の焼土燃焼面を検出した。焼土の長軸北端部は現道の法面により消失している。一部堆積状態観察用のベルトを残しフローテーションサンプルも回収しつつ焼土の範囲を精査し、平面形の記録、撮影をした。その後、断面観察のためのトレンチを掘開し堆積状態の実測、撮影をもって終了した。フローテーションサンプル土壌は約2.0ℓを回収し、ブドウ科の炭化種子1粒とクルミ殻0.193gが検出されている（第Ⅴ章第4節参照）。

堆積状況：1層はⅢc層上位の燃焼面層で、Ⅲb層下位と斑状に堆積し焼骨片を少量含み、被熱した砂岩礫片2点が出土している。フローテーション回収試料は魚骨のみで構成され、サケ科焼骨片がやや多く出土している（第Ⅴ章第2節参照）。

帰属時期：検出層位や周辺出土遺物から続縄文文化期前葉の汐見式期と思われる。

ⅢF-03（図Ⅱ-2　図版 1-7･8）

位置：X･Y-15 区　層位：Ⅲc 層　帰属時期：続縄文文化期前葉

平面形：楕円形　平面規模：長軸(26)cm×短軸 39cm　厚さ 7cm

確認･調査：Y-15 区の撹乱穴壁面精査中に焼土断面を確認し、面的にⅢb 層を掘り下げ燃焼面の検出作業を行った。検出面の平面形を撮影、記録し、断面は撹乱穴壁面を押し削り堆積状態の実測図化、撮影を行った。燃焼面層のフローテーションサンプル回収土壌は 1.6ℓで、焼骨片のみが出土している。エゾシカと思われる哺乳綱のほか、サケ科の椎骨片がやや多く回収されている（第Ⅴ章第 2 節参照）。

堆積状況：1 層はⅢc 層の燃焼面層で明赤褐色の焼土粒をやや多く含み、焼骨片や炭化物も少量含む。2 層はⅣ層地山被熱層で、強い被熱により明褐色を呈し、その西側の 3 層は地山被熱層とⅢ層黒色土が斑状に混在し、焼土粒をやや多く含む。燃焼面からの撹拌により硬化した地山被熱層の焼土粒と思われる。4 層は地山Ⅲc 層の弱い漸移的被熱層である。

帰属時期：検出層位や調査区出土遺物より続縄文文化期前葉の汐見式期と思われる。

ⅢF-04（図Ⅱ-2　図版 2-1･2）

位置：V-19 区　層位：Ⅲc 層上位　帰属時期：続縄文文化期前葉

平面形：－（断面のみ調査記録）　断面規模：(48)cm　厚さ 10cm

確認･調査：調査期間終盤に町道拡幅工事法面の北面施工に際し、工事立会を行った。北面は現道の法面整形のみで平坦面を掘削しないことから工事立会とした。立会区の東端付近 V-19 区の施工時に切土面Ⅲ層中で焼土 1 ヵ所を検出し、施工完了後、法面の清掃を行い焼土断面の撮影、実測した。なお本焼土には多量の被熱獣骨を伴うが、町道法面の清掃作業のみであったことからフローテーションサンプルの回収は行っていない。

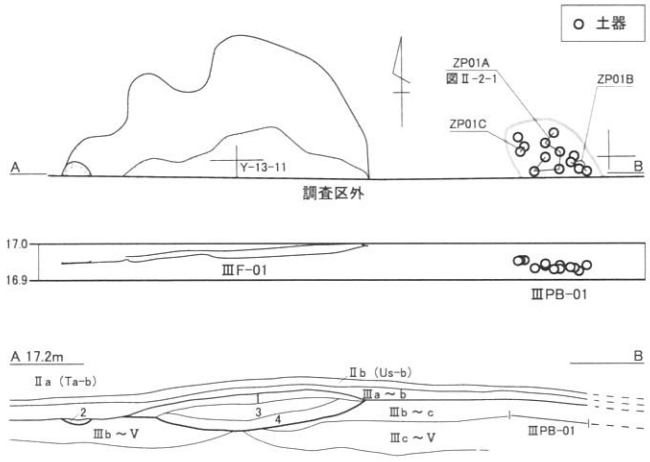
堆積状態：1 層と 2 層はⅢb 層下位～Ⅲc 層にかけて焼骨片が混在した土壌で、焼土形成後の埋没過程で焼骨片が自然散逸したと思われる。ただし、1 層の一部は 4 層燃焼面、Ⅳ層 Ta-c より下位にあることから、焼土形成時の撹拌等による可能性もある。3 層は焼土本体の東側に落ち込み焼骨片を微量に含む黒色土で、帯状で締りがない層であることから植物根貫入の影響と思われる。4 層は焼土燃焼面でエゾシカと思われる哺乳綱の焼骨片を多量に含み、粘性もあることから少なからずの灰層を伴っていた可能性がある。基本土層Ⅲc 層の下位にあたり、焼土形成時の生活面より低いと思われることから、皿状にやや掘り込まれてからの焼土燃焼面の可能性がある。5 層はⅢc 層下位～Ⅳ層 Ta-c にかけて強く被熱した地山層で上位には焼骨片を少量含む。6 層は 5 層焼土本体層のⅣ層～Ⅴa 層にかけての漸移的被熱層である。

帰属時期：検出層位や調査区出土遺物より続縄文文化期前葉の汐見式期と思われる。

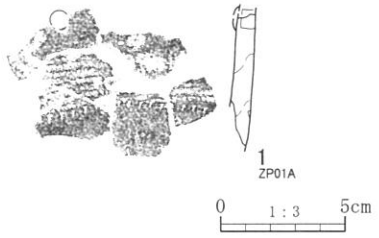
第 2 節　柱穴

Y-12･13 区の調査区中央部付近の緩斜面で 2 基検出した。いずれもⅦ層の風化ローム層上面で検出したが覆土はⅢb 層黒色土であることから、中世アイヌ文化期の帰属と判断した。先端部が尖る打ち込み柱で、本来はより深い柱穴である。緩斜面での検出であることから平地式住居跡の柱穴とは考えられず、用途不明の単独の柱穴と思われる。計測値等一覧表と断面実測図と写真を掲載し、各柱穴の個別記載は省略する（表Ⅱ-1・図Ⅱ-2・図版 2-3～6）。

ⅢF-01（アイヌ文化期）　ⅢPB-01（続縄文文化期）

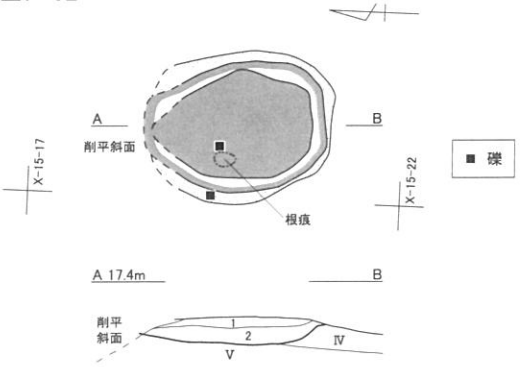


ⅢPB-01



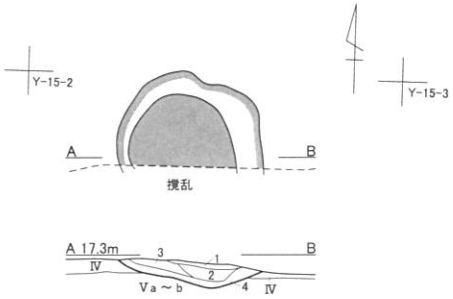
ⅢF-01
1. 5YR2/4 極暗赤褐色　ⅢbU燃焼面－焼土ブロック（φ3↓斑状）＝焼骨片
2. 5YR2/3 極暗赤褐色　ⅢbU－焼土ブロック（φ2↓斑状）≡焼骨片
3. 5YR5/8 明赤褐色　ⅢbM被熱層≡焼土ブロック（φ5↓斑状）≡焼骨片
4. 5YR3/2 暗赤褐色　Ⅲc弱い被熱層（斑状）

ⅢF-02（続縄文文化期）



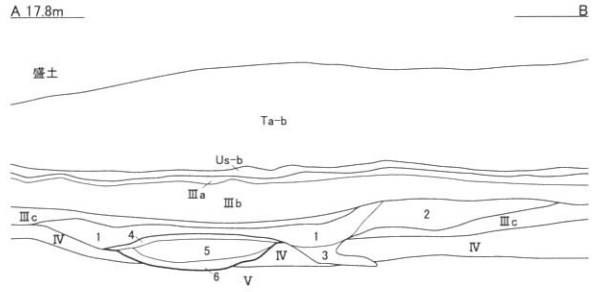
ⅢF-02
1. 5YR2/3 極暗赤褐色　Ⅲc燃焼面＝焼骨片（魚骨）　礫出土
2. 5YR3/3 暗赤褐色　Ⅳ地山被熱層（弱）≡焼骨片（魚骨）

ⅢF-03（続縄文文化期）



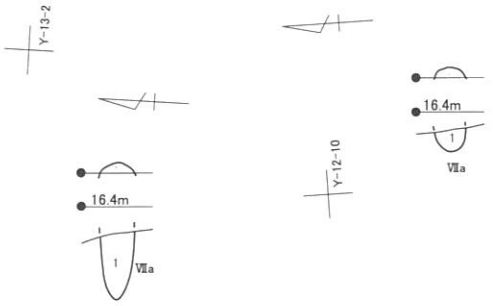
ⅢF-03
1. 7.5YR3/2 黒褐色　Ⅲc主体燃焼面－焼土粒（φ3↓）＝炭化物・焼骨片　粘性強
2. 7.5YR5/6 明褐色　Ⅳ地山被熱層＋Ⅲc黒褐色層（斑状）－焼土ブロック
3. 7.5YR6/8 橙色　Ⅳ地山被熱層（強）≡焼骨片
4. 7.5YR2/3 極暗褐色　Ⅳ～Ⅴb地山被熱層（弱）

ⅢF-04（続縄文文化期　Ⅴ-19区　立会地点）



ⅢF-04（立会）
1. 7.5YR2/1　黒色土　Ⅲb～c黒色砂質土－シカ焼骨片（φ10↓均一）
2. 7.5YR1.7/1 黒色土　Ⅲb～c黒色砂質土≡シカ焼骨片（φ3↓均一）
3. 7.5YR2/1　黒色土　Ⅲc主体黒色砂質土≡シカ焼骨片（φ2↓根押し込み）
4. 5Y3/2　暗赤褐色　Ⅲc燃焼面－シカ焼骨片（φ10↓均一）やや粘性あり
5. 5Y4/6　赤褐色　Ⅲc～Ⅳ被熱層（強）＝シカ焼骨片（φ5↓上部に均一）
6. 5Y3/3　暗赤褐色　Ⅳ地山被熱層（弱）　5層被熱漸移層
※1・2層は燃焼面の焼骨片がⅢb層下位～Ⅲc層にかけて浮いて広範囲に広がったもの

ⅢKP-01（アイヌ文化期）　ⅢKP-02（アイヌ文化期）



ⅢKP-01・02
1. 10YR1.7/1 黒色　Ⅲb主体＝10YR2/3黒褐色砂質土（斑状）
全体に締まりなし

0　1：20　50cm

図Ⅱ-2　ⅢF・ⅢKP・ⅢPB-01 平面及び断面・垂直分布図・ⅢPB-01 出土土器

第3節　遺物集中区

土器や金属製品、獣骨、礫などの各種遺物が混在し、限られた範囲内でまとまって出土した区域を遺物集中区とした。調査区東側の平坦面で中世アイヌ文化期2ヵ所（ⅢB-01･02）、擦文文化期1ヵ所（ⅢB-03）の計3ヵ所を検出した。以下、個別に記載する。

ⅢB-01（図Ⅱ-3・5-1～3　カラー図版2　図版2-7・3-1･2・8-1～5・9）

位置：X･Y-16区　層位：Ⅲb層上位　帰属時期：中世アイヌ文化期新段階

平面形：－（撹乱及び調査区外）　平面規模：長軸86cm×短軸(64)cm　厚さ5cm

構成遺構：ⅢSHB-01（ウバガイ集中）　長軸86cm×短軸(60)cm

ⅢAS-01（灰集中）　長軸53cm×短軸28cm

ⅢBB-01（獣骨集中）　長軸77cm×短軸(64)cm

確認･調査：火山灰除去中にⅢ層上面にてウバガイの貝殻片数点を確認した。移植ゴテでⅢ層上面の検出精査したところ、東西両端を撹乱穴で壊されているもののⅢa層ないしはⅢb層上位に貝殻が広がることが判明した。調査は撹乱穴の精査から始め、壁面でウバガイ検出層位を確認し、調査区壁面の層位断面においても、有珠bテフラより1cm程度黒色土を挟在することが判明した。貝殻は脆弱であり、さらに密集していることから竹ベラや炉ぼうきなどを用いて慎重に検出作業を実施した。なお、この検出精査時の掘削除去の土壌もフローテーションサンプルとして回収している。

検出作業を終えた段階で刀剣類や礫、炭化種子も検出し各種遺物が投棄された集中区であると判断でき、ウバガイ貝殻片の密集検出面をⅢSHB-01と遺構名を付した。平面記録は、検出状態を撮影した後にA～Lの集中ブロックを決め､その範囲をトータルステーションで記録した。本来ならば検出面での出土状態微細図を作成するが、調査期間が極めて短期間であることから、10cm四方のメッシュ枠を据えて上面からの一眼レフデジタルカメラでの撮影を行い、整理作業において出土状態を図化することとした。貝殻の取り上げはブロック単位毎に行った。なお調査終了後、町道法面の切土施工に立ち合い、調査区壁面際の貝殻の一部を土壌ごと回収している。また調査区外へかかる刀剣類については、調査区を必要最低限拡張し取り上げた。

ⅢSHB-01を取り上げたところ、貝殻の下から間層を挟まずに灰集中ⅢAS-01とエゾシカを主体とする未被熱獣骨の集中ⅢBB-01を検出し、出土状態の撮影と灰集中範囲を記録した。ⅢAS-01は、灰層が良好に残る範囲と焼土粒を多く含みやや暗赤褐色を呈する範囲がみられた。これらの範囲記録後、全量のフローテーションサンプル1.6ℓを掘削回収した。灰の残存状況が良好な範囲の下からほぼ完形のホタテガイ1点が出土し、同一面の獣骨集中全体の検出作業も行った。獣骨は個体ごとに骨番号を付与し、トータルステーションで外周を記録、一部は遺存状況等のメモ写真を撮影してから取り上げている。出土状態の図化はⅢSHB-01と同様に10cm四方のメッシュ枠を据えて上面からの一眼レフデジタルカメラでの撮影を行い、整理作業において図化した。ⅢBB-01と同一面で出土している刀剣類も同様に記録し、取り上げている。

出土遺物：図Ⅱ-5-1は切先部分を欠失する平棟平造の刀剣類で、現存長は35.1cmを測る。刃部は研ぎ減りにより緩く湾入している。両区で、棟区付近は丸棟ないしは庵棟となっている。茎は区から直線的で茎尻側が僅かに反り上がり、直径約4mmの目釘穴が2ヵ所穿たれている。区側の目釘穴は錆により閉塞気味であるが、X線撮影により茎尻側の目釘穴とほぼ同じ直径で

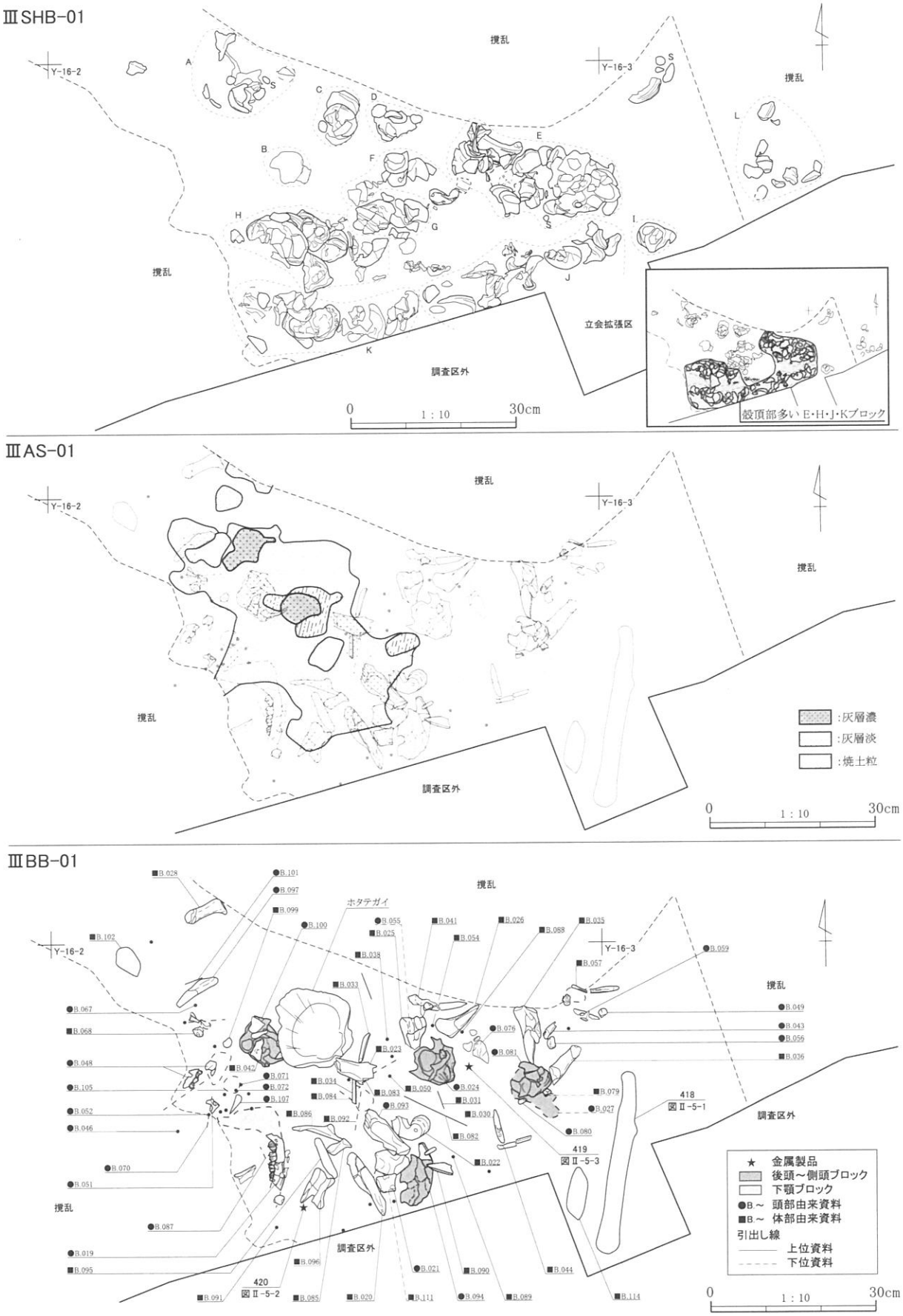
あることが確認できた。茎尻は刃上栗尻である。2 は刀子刃部片で、切先と茎部分が折損により欠失している。3 は厚さ約 2mm の板状鉄製品で、実測面上部が緩く屈曲しており何らかの金具片と思われる。

自然遺物：獣魚骨やウバガイ、炭化種子などは第Ⅴ章第 2 節･3 節･4 節の分析原稿に詳細が記されているので概要を以下に記す。

ⅢSHB-01 のウバガイは全て未被熱であり人為的に破壊されている。殻頂部の右殻、左殻からの最少個体数は 35 個体である。殻頂部を含めた出土貝殻の総重量は 3102.59g で、殻頂部の弾帯受の計測から推定された年令は 8 歳以上の大型（推定殻長 10cm 以上）のものが 90%以上であり、選択的に大型個体を採捕していることが伺える。これらウバガイ貝殻片の中には、貝殻内面に浅い線条痕を残すもの（図版 9-2-4･5）があり、貝殻からの剥き身作業時に残された可能性が想定されている。この総重量から 8 歳のウバガイの右左殻合計の平均重量を割り返すと約 29 個体分と推定できた。またフローテーション処理では未被熱の亜角～亜円礫の細礫～中粒砂 122.7g（うち長軸 2mm 以上の細礫 103.42g、1,204 点）と多量に回収している。石材構成は硬質砂岩やアオトラ石、チャート、火成岩類、石英等多種多様で、現在の浜厚真海岸で見られる石材である。おそらくは採捕時のウバガイに付着していた海浜の砂粒が遺跡内に持ち込まれているものと思われる。このことは比較的、折り目の細かい繊維質の袋か革袋による運搬、搬入が想定される。なおⅢSHB-01 からはウバガイ以外にも海水域のサラガイ（右殻殻頂付近前側歯部分･1 個体）、ヒメエゾボラ（体層周縁角付近ほか･1 個体）、タマキビ（殻頂及び外唇部のみ欠損･1 個体）、ユキノカサまたはサルアワビのカサガイ類（完形･5 個体）が出土している。サラガイ以外は岩礁性の貝類であり他地域からの搬入の可能性がある。ただし、カサガイ類は殻長 5mm 以下の微小貝であるが、種属の同定までは至らず、成貝なのか幼貝なのか判断がつかないものの、他の貝殻や海藻などの付着性混入貝類とみられる。

淡水域のカワシンジュガイ殻皮（4 点）も 0.22g 出土しており、遺跡周辺の河川から持ち込まれている可能性がある。これらのほか、パツラマイマイやヤマボタルなどの微小な陸産巻貝も多数出土しているが、これらはⅢB-01 に寄生したものであり遺構の内容を直接的に示すものではない。なお、ⅢSHB-01 より下層のⅢAS-01 直下からほぼ完形のホタテガイ右殻 1 点が出土している（図版 9-2-1）。貝殻腹縁部は損傷しているものの現存長で殻頂長 16.1cm、殻高 15.7cm を測る大型個体で、内面は右殻に特徴的な浅い椀状の窪みをもち、肉柱痕も残っている。殻頂部縁辺の左右両端、前後の耳部は意図的に切除された可能性がある。内面に灰層が付着しており、ⅢAS-01 と連続した廃棄行為が伺える。なお内面には明瞭な被熱痕跡は認められないものの、油脂痕跡と思われる灰褐色の付着物層の皮膜が発達しており、近世アイヌ文化の絵図でみられる燈明皿（ラッチャッコ）としての利用が想定される。

高橋 理氏による獣骨集中ⅢBB-01 の同定分析（第Ⅴ章第 2 節参照）では、大型の獣骨片はエゾシカが圧倒的に多く、頭蓋骨や椎骨、四肢骨などのほぼ全身部位にわたり、骨端部や頭蓋骨部位の縫合が未癒着であることから若い個体が多数を占める。頭蓋骨は 5 個体分が出土しているものの全て後頭部片であり、解体や脳漿、鹿角等の利活用のほか送り儀礼に関する制約などが想定されている。哺乳綱では、シカのほか小型のネズミ科も少量出土しているが、食料残滓かは不明である。主にフローテーションによって回収された魚骨類はサケ科やコイ科ウグイ属



図Ⅱ-3 ⅢB-01（ⅢSHB-01・ⅢAS-01・ⅢBB-01）平面図

である。この2種類は同量比程度の出土であり、上厚真遺跡が所在する厚和地区のアイヌ語地名シュプン（ウグイ）に偏ることはなかった。

高瀬克範氏による植物遺存体同定（第Ⅴ章第4節参照）では、栽培種としてヒエ属1粒以外は全て野生種でクルミ属（2.034g）、ニワトコ属（33粒）、ブドウ科（1粒と6片）などが出土している。ニワトコ属 33 粒はすべてが酸化状態での出土であったが、現生種子混入の可能性は低いとの同定結果を得ている。ニワトコ属はⅢB-01 の中でも調査区南側壁面付近で 21 粒と全体の約3分の2がまとまって出土しており、当時の植物利用や特別な廃棄行為を示している可能性がある。

遺構の性格：これらの調査過程から当時の状況としてほぼ連続する廃棄行為と思われる。エゾシカを主体とするⅢBB-01 や刀剣類などの金属製品を遺棄し、その後、燈明皿と推定されるホタテガイと灰の遺棄、そして破砕されたウバガイの遺棄の順序が確認できる。これらは間層を挟まないこと、平面位置も重複しており、同一人物または集団（家族等）による廃棄行為と思われ、いわゆる物送り儀礼の痕跡と考えられる。

帰属時期：検出層位より中世アイヌ文化期新段階と思われ、有珠 b テフラとⅢSHB-01 とに約 1cm 前後の黒色土を挟むことから、16 世紀後半頃と推定している。なおⅢSHB-01 精査中に回収したフローテーションサンプル出土の炭化したクルミ属殻片 2 点の年代測定結果は、暦年較正 1σの平均値で 1,559.88 cal AD で、16 世紀中葉の数値となっている（第Ⅴ章第1節参照）。

ⅢB-02（図Ⅱ-4　図版 3-3・4-1・2・8-6）

位置：X・Y-15 区　層位：Ⅲb 層上位　帰属時期：中世アイヌ文化期新段階

平面形：不整形　平面規模：長軸 180cm×短軸 49cm

構成遺物：未被熱獣骨集中・金属製品（錆塊）・礫

確認・調査：X・Y-15 区のⅢa 層掘削除去中にⅢb 層上面から上位において、エゾシカの未被熱下顎歯列等の獣骨や鉄製品（錆塊）、礫を検出した。複数の遺物種別で構成される一定の範囲での検出から遺物集中区ⅢB-02 とした。獣骨は個別のメモ写真や全体の出土状態を撮影した。脆弱な獣骨類は酢酸ビニル系樹脂ボンドで硬化処理をした後、光波式トータルステーションで範囲や出土位置を記録し、取り上げた。検出作業時のⅢb 層はフローテーションサンプルとして 1.2ℓほど回収している。

出土遺物：鉄製品小片の錆塊 1 点が出土しているが、劣化により取り上げ不可能であった。この他は自然遺物のみで、礫 3 点のほか未被熱のシカの臼歯歯冠が圧倒的多数を占める。獣骨は歯冠列をなすものや鹿角も出土しており、頭骨に由来するもので構成される。獣骨の遺存状態は後述する擦文文化期のものよりやや良好であるものの、脆弱であった。被熱したサケ科椎骨片 2 点などの獣魚骨類（第Ⅴ章第2節参照）や炭化種子としてムギ類 1 粒、マタタビ属 1 粒、クルミ属 1.014g、不明種子 8 粒が回収されている（第Ⅴ章第4節参照）。

帰属時期：検出層位より中世アイヌ文化期新段階と思われる。なお、本遺物集中より回収したクルミ属殻片の年代測定結果では、擦文文化期後期の年代が得られた（第Ⅴ章第1節参照）。本集中の北東約 65cm に擦文文化期の礫集中（ⅢSB-02）を検出しており、今回の調査でも馬蹄形押捺文を伴う囲繞帯の擦文後期の土器が出土しており、これらの年代に相当する測定結果と思われる。

ⅢB-03（図Ⅱ-4・5-4～9　図版 4-3～5・8-7～13）

位置：X-15・16 区　層位：Ⅲb 層下位　帰属時期：擦文文化期後期

平面形：不整形　平面規模：長軸 304cm×短軸(133)cm

構成遺物：擦文土器・刀子・礫・未被熱獣骨

確認・調査：X-15 区Ⅲb 層上位のⅢB-02（中世アイヌ文化期新段階）精査中に一部、より下層のⅢb 層下位から礫や擦文土器片、未被熱獣骨をやや散逸した状態で検出した。これらの遺物はほぼ同一レベル、同一層位であることから擦文文化期後期の一連の廃棄行為によるものと考え遺物集中区ⅢB-03 とした。検出作業と並行し南側の撹乱穴の精査を行い、全体の出土状態を撮影した後、光波式トータルステーションで出土位置を記録し取り上げた。なお、未被熱獣骨はシカ下顎歯列の臼歯歯冠片が多く、下顎骨そのものの遺存状態は悪く脆弱であった。このため、酢酸ビニル系樹脂ボンドで硬化処理してから取り上げている。

出土遺物：図Ⅱ-5-4～8 は擦文後期の甕形土器片である。4・7・8 は無文で口縁部がやや外反する。8 は器壁が非常に薄い。5・6 は同一個体片で、口縁部には斜位沈線文帯で区画された文様帯に矢羽根状の沈線文が施されている。他の資料と異なり、胴部には弧状ないしは青海波状の明瞭なハケ目調整が施され、胎土は緻密で焼成も良好硬質である。この様な器表面調整は異質であり厚真町内では上幌内モイ遺跡（町教委 2007・図Ⅲ-56-1）、上幌内 1 遺跡（町教委 2016・図Ⅱ-34-3）など数例があり、いずれも馬蹄形押捺文の囲繞帯を施す土器にみられる。なお、5 の胴部上半文様帯の大型破片は南東約 1.1m離れているⅢPB-02 とした範囲から出土しており、2 つの遺構が同時期に形成された可能性を示す接合関係にある。9 は緩く折れ曲がった刀子完形品で、刃部長 14.4cm、茎長 5.3cm を測る。刃部は浅く湾入する研ぎ減りがあり、両区。茎はやや反り目釘穴 1 ヵ所が穿たれ、切・一文字の茎尻である。

自然遺物：礫が 28 点出土し、うち 43%が完形資料である。平均長軸が約 5cm の円磨度が進んだ板状を呈する資料が多く、石材は堆積岩や火成岩類など多種多様である。この他、未被熱のシカ下顎歯列 1 点が同一面で出土している。下顎骨本体は分解消滅しエナメル質の歯列が良好な状態で検出している。前述のⅢB-02 中世アイヌ文化期新段階のシカ下顎骨と比較しても遺存状態は悪い。

帰属時期：検出層位や出土遺物より擦文文化期後期と思われ、獣骨の遺存状態が中世アイヌ文化期の資料より脆弱で、劣化が進んでいることとも符合する。なお、本遺構の西側約 1mに位置するⅢB-02 サンプリングの炭化種子年代測定では 11 世紀中葉～12 世紀中葉にかけての絶対年代が得られており、本集中の絶対年代の参考値と読み取ることも可能かと思われる。また、土器片の接合関係より約 1m南東にある擦文後期のⅢPB-02 と同時期に残された可能性がある。

第 4 節　土器集中

ⅢPB-01（図Ⅱ-2　図版 1-3・4-6・10-1）

位置：Y-13 区　層位：Ⅲc 層上位　帰属時期：続縄文文化期末葉

平面形：－（調査区外）　平面規模：長軸 19cm×短軸(17)cm

確認・調査：Y-13 区の平坦面と北西側の斜面への地形変換点付近、調査区壁面付近のⅢb 層掘削除去中にⅢc 層上面にて土器片の密集を検出した。周囲を掘削精査し、破片分布範囲を確

認したが比較的狭い範囲に1個体分の同一個体片が密集していると判明し、遺構名ⅢPB-01を付与した。約40cm西側に中世アイヌ文化期新段階の焼土ⅢF-01を検出しており、ⅢF-01燃焼面と有珠bテフラとの間層黒色土は2cm前後の層厚に対し、本集中のⅢPB-01を被覆する間層黒色土は6cmを測る。出土状態の上面観の撮影のほか、調査区壁面での焼土ⅢF-01との層位関係の撮影後、光波式トータルステーションで土器片の出土位置を記録し、取り上げて調査終了とした。なお、報告書中の掲載図は、ⅢF-01との位置関係や層位関係を示すために第1節焼土の図版と統合している（図Ⅱ-2）。

出土状態：土器片同士の重複は無く、かつ破片部位や表裏面の偏向もなく、同一面で出土している。調査区外へ続く可能性がある。

出土遺物：図Ⅱ-2-1は北大Ⅰ式深鉢形土器の口縁部から胴部上半にかけての資料である。拓影図左上部破断面に OI 突瘤文があり、その下部に横走する帯縄文と三角列点文が施されている。胎土は北大式に特徴的な円磨度が進む小礫をやや多く含んでいる。

帰属時期：続縄文文化期末葉の北大Ⅰ式期である。

ⅢPB-02（図Ⅱ-4・7-1･2　図版4-7･8・5-1・10-2･3）

位置：X･Y-16区　層位：Ⅲb層下位　帰属時期：擦文文化期後期

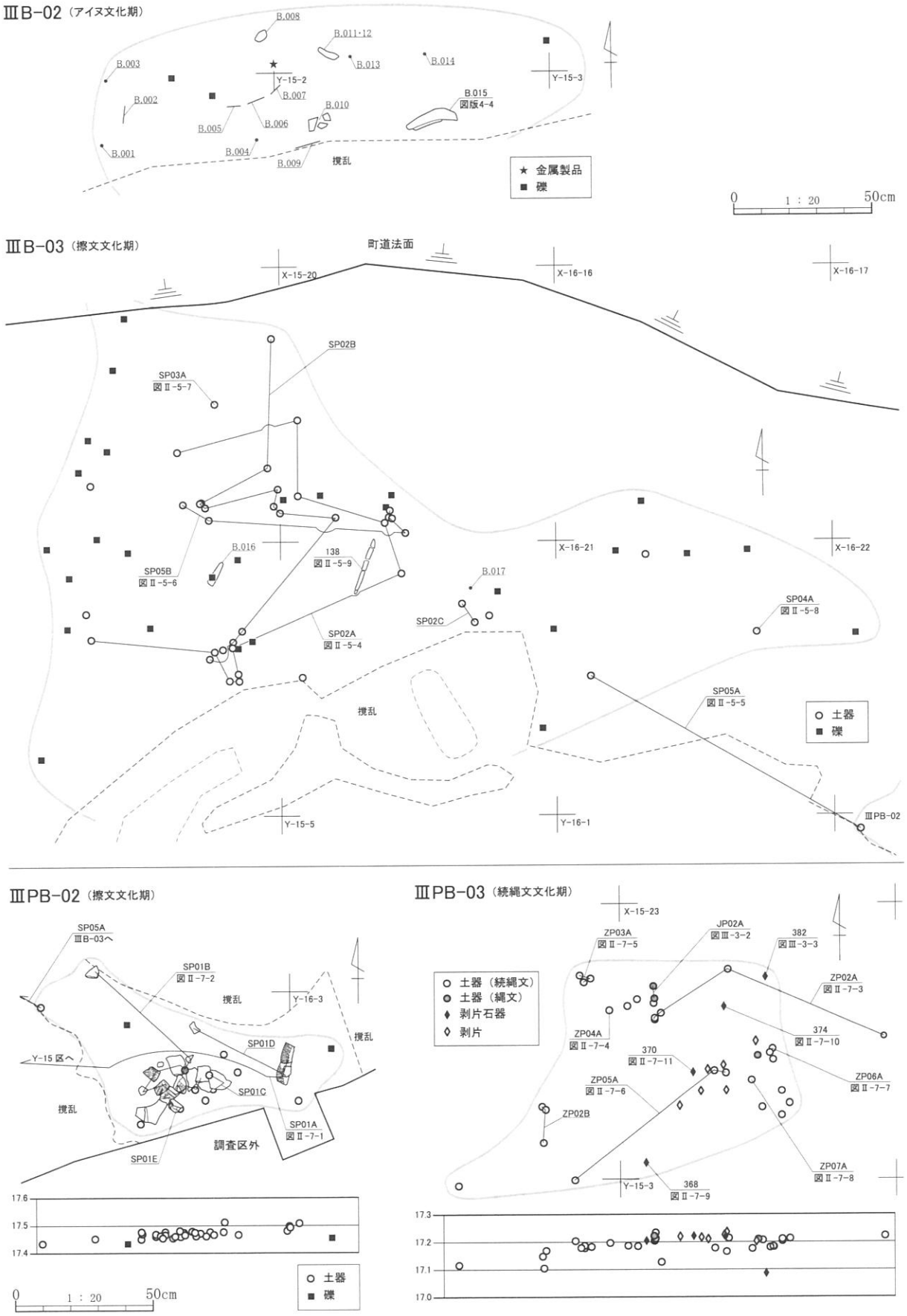
平面形：不整形　平面規模：長軸82cm×短軸47cm

確認･調査：Y-16区のⅢb層上位で検出した中世アイヌ文化期新段階のⅢB-01調査最終段階のシカ獣骨（ⅢBB-01）基底面検出作業において、獣骨基底から黒色土Ⅲb層を挟む状態で擦文土器片がまとまって出土した（図版5-1）。ⅢBB-01の獣骨取り上げ後、周囲をⅢb層下位まで掘削精査し、土器片の出土範囲を確認しⅢPB-02の遺構名を付した。北側と東側、西側が大きな撹乱穴で本来の分布を残していない可能性もある。検出作業後に出土状態を撮影した。本来ならば出土状態の微細図を作成すべきであるが、調査期間短縮のため10cmメッシュ枠を据え置いて上面からのデジタル撮影を行い、整理作業においてパソコン上で微細図を作成した。この後、土器片等個々に光波式トータルステーションの出土位置を計測し、取り上げた。

出土状態：上下垂直方向のレベル差がほとんどない同一層位面で土器片や礫を検出した。土器片が最も密集している部分では、東側に胴部下半、西側に胴部上半の文様帯破片が出土しているが、口縁部片が東側の約1.1m離れた地点で出土している。また、接合した土器片においても二次被熱片の接合もみられることから、土器破砕後の破片状態で遺棄された可能性がある。

出土遺物：図Ⅱ-7-1と2は同一個体片の擦文甕形土器で、口縁部が大きく外反し、口唇部が若干立ち上がる。口縁部は6条の並行沈線文が施され、縦位･斜位･矢羽根状構成に刻みが施されている。胴部上半の文様帯は下縁に馬蹄形押捺文を施す囲繞帯が施されている。なお囲繞貼付帯の剥落部分には施文割り付けの沈線がみられる。文様帯は前述の囲繞貼付帯･馬蹄形圧痕文を施した後に列点文で3段に区画され、上段より右上がりの斜行沈線地に3条1対の斜行沈線文、中段は粗雑な横走沈線文、下段は3条1対の鋸歯状構成の沈線文が施されている。内面は入念なミガキ調整で、黒色処理がなされている。なお、掲載資料2は、拓影図左側の破片など二次被熱により器内面黒色処理が一部抜け落ちている部分がある。

帰属時期：出土土器より擦文後期前半である。土器片の接合関係より、北西側のⅢB-03と同時期の可能性がある。



図Ⅱ-4　ⅢB-02·03・ⅢPB-02·03 平面及び垂直分布図

図Ⅱ-5　ⅢB 出土遺物

ⅢPB-03（図Ⅱ-4・7-3～11　図版 5-2・10-4～12）

位置：X･Y-15 区　層位：Ⅲc 層　帰属時期：続縄文文化期前葉

平面形：不整形　平面規模：長軸 133cm×短軸 80cm

確認･調査：X-15 区のⅢc 層掘削調査中に土器片やチップ類がほぼ同一レベルでややまとまって出土した。周辺の精査をかけ出土範囲を確認し、土器集中と判断した。当初、本集中の北部から縄文時代早期末葉の東釧路Ⅳ式土器のやや大型の口縁部片（図Ⅲ-3-2）が出土しており、検出精査においても頁岩製の縦型つまみ付きナイフ（図Ⅲ-3-3）が出土していたことから、Ⅴ層の土器集中として遺構名ⅤPB-01 とした。しかし一次整理において、調査時点で確認していた 2 片を除き、他の土器片は続縄文文化期前葉の汐見式土器であったことから、遺構名をⅢPB-03 に変更した。調査は、土器集中周辺をⅣ層上面まで掘削し範囲を確定した後に出土状態の撮影、光波式トータルステーションで位置を記録し取り上げ、調査終了とした。

出土状態：ほとんどの土器は内面を向き、剥片石器や黒曜石細片などとほぼ同一レベルで出土した。整理の結果、6 個体以上の土器片が出土しており、複数個体の破片を遺棄したものと

思われる。なお、出土資料の標高値レベル垂直分布図において東西両端部が僅かに低い標高値であり、調査面の土壌色調よりⅤ層の古い倒木痕が想定でき、この影響と思われる。同一面で取り上げた東釧路Ⅳ式土器もこの影響により混入した可能性がある。また、後述に詳細を記すが、北側に一部重複する擦文文化期の礫集中ⅢSB-02（図Ⅱ-6）と明らかな層位、標高値の差異が認められ、これらを区分した報告としている。

出土遺物：図Ⅱ-7-3～8はいずれも続縄文文化期前葉の汐見式土器である。3～6は口縁部片で、4は小波状縁で他は平縁である。口唇部は角状ないしは内削ぎの切り出し状を呈し、縄端刺突文（3）、縄文（4･5）、刻みを施すもの（6）がある。RL斜行ないしは横走縄文のみ施されている。7は口縁部から胴部上半にかけての資料で、口縁部無文帯に棒状工具を斜位に押し当てた半円ないしは三ヶ月状の刺突文が2段施されている。8は上げ底の底部片である。

9は黒曜石製の長軸15.9mm、小型の石鏃で、尖頭部と基部は表裏面から入念に作出されている。10は全体的に著しく被熱し、全面が灰色化した黒曜石製無茎石鏃で、左側基部は発泡変形している。11も全体的に弱い被熱が認められる片面調整のスクレイパー片で、破損が著しい。表面右側が折損し、破断面も被熱している。刃部は弧状に形成されており、エンドスクレイパーの可能性もある。

帰属時期：出土土器及び検出層位より続縄文文化期前葉の汐見式期である。

第5節　礫集中

調査区中央部に中世アイヌ文化期のⅢSB-01と東部で擦文文化期のⅢSB-02の計2ヵ所の礫集中を検出した。以下に詳細を記す。

ⅢSB-01（図Ⅱ-6・7-12　図版5-3・10-13～15）

位置：X･Y-13･14区　層位：Ⅲb層上位　帰属時期：中世アイヌ文化期新段階

平面形：不整形　平面規模：長軸(174)cm×短軸61cm

確認･調査：X-14区の台地平坦面縁辺部においてⅢa層掘削調査中に完形の楕円形板状礫がやや密集して出土した。周辺や西側に隣接する倒木痕も精査し、範囲を確定させてから遺構名ⅢSB-01を付与した。出土状態の撮影後、位置を記録し礫群を取り上げ調査終了とした。

出土状態：Ⅲb層上面から上位にかけてほぼ同一レベルで、半円形の帯状分布範囲で出土している。中央部はやや密集しているが、北側と東側は散逸した状態で出土している。なお、西側は倒木痕により消失し、礫の一部がズリ落ちた状態で出土している。

出土遺物：図Ⅱ-7-12は滑沢面のある礫で、斑れい岩の不整円形の板状礫を素材とし、表面のほぼ全面に滑沢面が形成されている。裏面は礫皮表面の凹凸があり、使用していない。弱く被熱している。

構成礫：完形･略完形51点、欠損･破片資料は2点、計53点が出土し、完形の比率は極めて高い。総重量は1993.3gである。完形礫の平均長軸は約4.7cm、短軸約3.3cm、厚さ1.5cmの円磨度が高い扁平の楕円礫が主体を占め、被熱礫は4点と少ない。石材は重量比で砂岩、チャートなどの堆積岩系が全体の約33%、片麻岩や斑れい岩などの火成岩が約36%、変形砂岩やアオトラ石などの変成岩が31%と石材は多種多様である。上厚真遺跡が立地する厚和台地は火山噴出物が厚く覆う地質であり、地表面等の浅い表層地層での礫の入手は不可能である。これ

らの礫には、礫表面に錆化付着物を認められるものがやや多く含まれており、中部更新統に形成され多種多様な石材で構成される陸成礫層（近藤ほか 1984）から入手している可能性がある。この様な礫層は、厚和台地、厚真川中下流域の山地性丘陵の露頭で確認することができ、当時としては河川浸食等で露出した礫層から採取してきたものと思われる。

帰属時期：検出層位より中世アイヌ文化期新段階（16 世紀代）と思われる。

ⅢSB-02（図Ⅱ-6　図版 5-4・10-16）

位置：X-15 区　層位：Ⅲb 層下位　帰属時期：擦文文化期

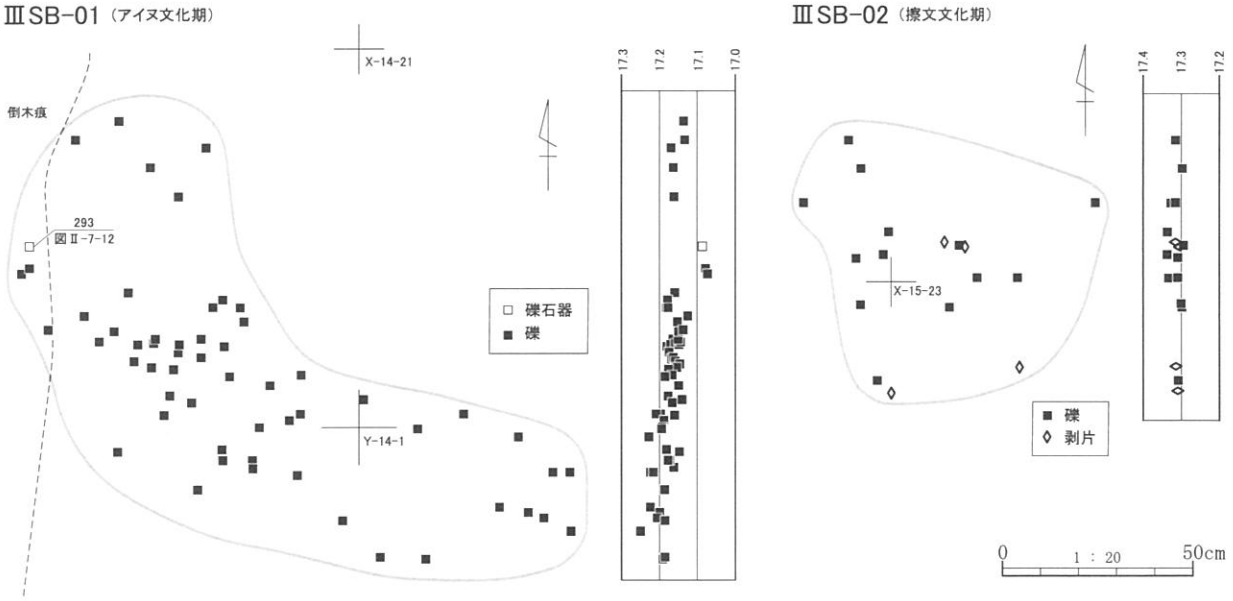
平面形：不整形　平面規模：長軸 76cm×短軸 68cm

確認・調査：X-15 区町道法面側のⅢb 層掘削除去中に楕円形の礫群や黒曜石チップを検出した。同一層位面で周囲を精査し、広範囲へは広がらないことから遺構名ⅢSB-02 を付与した。その後、出土状態の撮影、出土位置を記録し、礫群を取り上げて調査終了とした。なお、本遺構調査終了後の南側に一部重複してⅢPB-03 とした続縄文文化期前葉の土器集中を検出したが、検出層位の差異のほか、出土遺物垂直分布においても擦文文化期の本遺構ⅢSB-02 は 17.30m～17.35mに分布し、続縄文文化期前葉汐見式期のⅢPB-03 は標高値 17.11m～17.23mに分布（図Ⅱ-4）しており、明瞭に区分することができた。ただし本遺構ⅢSB-02 中の黒曜石チップ 4 点は下位のⅢPB-03 に由来するものと思われ、直接的に関連する遺物ではない。

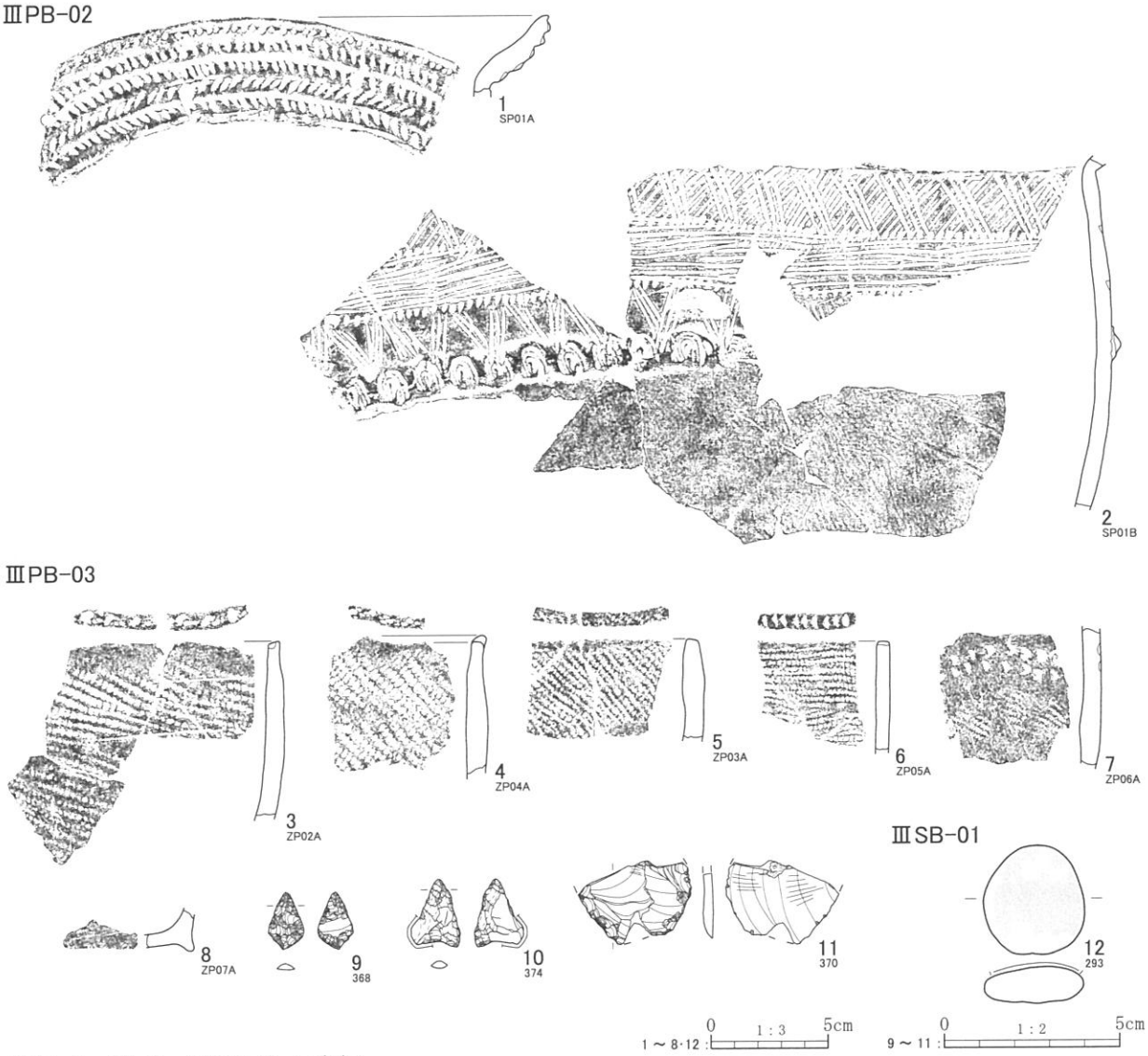
出土状態：散逸した状態出土し、垂直分布においてもⅢb 層中に若干の上下が認められる。

構成礫：13 点の礫が出土し、うち完形・略完形 11 点 626.5g である。完形礫の平均長軸は約 5.6cm、短軸約 3.8cm、厚さ 1.8cm の円磨度の高い楕円棒状礫が主体を占める。被熱礫は 6 点あり、破片を含めた被熱礫重量比は約 55%とやや高い比率となっている。石材は重量比で砂岩や硬質の変形砂岩の堆積岩及び変成岩が主体を占め、片麻岩や斑れい岩の火成岩も含まれる。

帰属時期：検出層位や調査区内出土遺物より擦文文化期後期のものと思われる。



図Ⅱ-6　ⅢSB 平面及び垂直分布図



図Ⅱ-7　ⅢPB・ⅢSB 出土遺物

表Ⅱ-2　Ⅲ層遺構出土遺物属性表

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	分類	層位	グリッド/遺構名	計測値(mm) 長軸	短軸	厚さ	重量(g)	材質	備考
ⅢB-01（アイヌ文化期）												
Ⅱ-5-1	8-1	418	刀剣類	-	ⅢbU	Y-16	(351.2)	32.0	8.9	(250.0)	Irn.	
Ⅱ-5-2	8-2	420	刀子片	-	ⅢbU	Y-16	(50.0)	13.0	2.1	(4.2)	Irn.	
Ⅱ-5-3	8-3	419	板状鉄製品	-	ⅢbU	Y-16	(19.0)	(27.0)	2.5	(6.6)	Irn.	
ⅢB-03（擦文文化期）												
Ⅱ-5-9	8-12	138	刀子	-	ⅢbL	X-15	197.1	14.0	3.6	20.6	Irn.	
ⅢPB-03（続縄文文化期）												
Ⅱ-7-9	10-10	368	ポイント類	A4	Ⅲc	X-15	15.9	9.9	2.1	0.3	Obs.	
Ⅱ-7-10	10-11	374	ポイント類	A2b	Ⅲc	X-15	17.6	13.8	5.6	0.8	Obs.	被熱
Ⅱ-7-11	10-12	370	ナイフ・スクレイパー	B2	Ⅲc	X-15	(21.0)	32.2	2.8	(2.7)	Obs.	被熱
ⅢSB-01（アイヌ文化期）												
Ⅱ-7-12	10-13	293	滑沢面のある礫	-	ⅢbU	X-13	46.3	43.2	15.9	49.6	Gab.	被熱

表Ⅱ-3 擦文文化期遺構・包含層出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	遺物番号	グリッド	層位	器種	部位	器面調整 内側	器面調整 外側	文様 口縁部/文様帯	点数	備考
ⅢB-03													
Ⅱ-5-4	8-7	SP02A	ⅦB3e	126/127ほか	X-15	ⅢbL	甕	口縁部～胴部	口縁横ミガキ・胴部縦ミガキ・黒色処理	縦ミガキ	横走沈線/無文	12	
Ⅱ-5-5	8-8	SP05A	ⅦB3b	241/452	X・Y-16	ⅢbL	甕	口縁部	口縁横ミガキ・胴部縦ミガキ・黒色処理	口縁横ナデ・胴部縦～弧状ハケ	横走沈線区画+斜位・矢羽根状沈線	2	
Ⅱ-5-6	8-9	SP05B	ⅦB3b	132/134ほか	X-15	ⅢbL	甕	胴部	縦ミガキ・黒色処理	縦～弧状ハケ	—	5	
Ⅱ-5-7	8-10	SP03A	ⅦB3f	83	X-15	ⅢbU	甕	口縁部	口縁横ミガキ・胴部縦ミガキ・黒色処理	口縁横ミガキ・胴部縦ミガキ	無文	1	
Ⅱ-5-8	8-11	SP04A	ⅦB3f	220	X-16	ⅢbL	甕	口縁部	横ミガキ	口縁横ミガキ・胴縦ハケ	無文	1	
ⅢPB-02													
Ⅱ-7-1	10-2	SP01A	ⅦB3d	317/422/423	Y-15・16	ⅢbU/ⅢbL	甕	口縁部	横ミガキ・黒色処理	横ナデ	横走沈線+縦位・斜位・矢羽根状刻み	3	補修孔1ヵ所
Ⅱ-7-2	10-3	SP01B	ⅦB3d	438/439ほか	Y-16	ⅢbL	甕	胴部	上半横ミガキ・下半縦位ミガキ・黒色処理	上半ナデ・下半縦ミガキ	列点文区画+斜位・横走・鋸歯状沈線・囲繞貼付帯+馬蹄形押捺文	13	
包含層													
Ⅱ-8-1	11-1-1	SP06A	ⅦB3c	84/150/151	Y-14	ⅢbU/ⅢbL	甕	口縁部	横ミガキ	ナデ	横走沈線+列点/縦位・斜位沈線	3	

表Ⅱ-4 続縄文文化期遺構・包含層出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	グリッド	層位	点数	器形/部位	器形等 口縁－口唇/胴部/底側面－変換点－底面	文様 口唇－口縁－内面/胴部－内面/底側面－底面－内面	胎土	備考
ⅢPB-01											
Ⅱ-2-1	10-1	ZP01A	ⅥE1	Y-13	ⅢbL	6	深鉢/胴部	ほぼ直立	OI突瘤・RL帯縄文+三角列点文	roundedな小礫やや多量	
ⅢPB-03											
Ⅱ-7-3	10-4	ZP02A	ⅥA1b	X-15	Ⅲc	5	深鉢/口縁～胴部	平縁・直立-内削ぎ切り出し状/直立	縄端刺突-無文帯/横走気味斜行RL縄文	砂粒中量	粘土帯成形痕跡
Ⅱ-7-4	10-5	ZP04A	ⅥA1b	X-15	Ⅲc	1	深鉢/口縁部	小波状縁・直立-隅丸角状	RL斜行縄文-RL斜行縄文	砂粒多量	
Ⅱ-7-5	10-6	ZP03A	ⅥA1b	X-15	Ⅲc	3	深鉢/口縁部	平縁・直立-角状	RL斜行縄文-RL斜行縄文	砂粒中量	粘土帯成形痕跡
Ⅱ-7-6	10-7	ZP05A	ⅥA1b	X・Y-15	Ⅲc	3	深鉢/口縁部	平縁・直立-隅丸角状	刻み-RL横走縄文	砂粒中量	粘土帯成形痕跡
Ⅱ-7-7	10-8	ZP06A	ⅥA1b	X-15	Ⅲc	1	深鉢/口縁～胴部	直立	無文帯+刺突文(斜位押捺)/RL斜行縄文	砂粒少量	
Ⅱ-7-8	10-9	ZP07A	ⅥA1b	X-15	Ⅲc	1	深鉢/底部	直立-やや外反-上げ底	RL斜行縄文-無文	砂粒中量	
包含層											
Ⅱ-8-2	11-1-2	ZP10A	ⅥA1b	X-14 X-15	Ⅲc	1 1	深鉢/口縁～胴部	ほぼ直立	無文帯+刺突文(斜位押捺)/RL斜行縄文	砂粒少量	
Ⅱ-8-3	11-1-3	ZP12A	ⅥA1b	Y-11	Ⅵ	1	深鉢/胴部	外傾	RL縦走縄文	砂粒中量・石英結晶多量	富良野盆地系？

表Ⅱ-5 ⅢB出土礫属性表

ⅢB-01(ⅢSHB-01含む アイヌ文化期)

図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm) 長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差	長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質
8-4	-	160	ⅢbU	完形	23.2	-1.8	13.5	-4.0	3.6	-4.5	1.7	0.3	1.8	-	Gr-Mud.
	-	161	ⅢbU	完形	13.3	-11.7	9.0	-8.5	7.5	-0.6	1.5	0.1	1.1	-	Che.
	-	162	ⅢbU	完形	17.5	-7.5	14.1	-3.4	4.4	-3.7	1.2	-0.2	1.8	-	Gr-Mud.
	-	163	ⅢbU	完形	12.6	-12.4	9.0	-8.5	4.5	-3.6	1.4	0.0	0.8	-	Gr-Mud.
	-	164	ⅢbU	完形	12.9	-12.1	11.6	-5.9	4.4	-3.7	1.1	-0.3	0.9	-	Sa.
	-	165	ⅢbU	完形	12.7	-12.3	9.7	-7.8	4.9	-3.2	1.3	-0.1	1.2	-	Mud.
	-	166	ⅢbU	完形	15.5	-9.5	10.4	-7.1	4.4	-3.7	1.5	0.1	1.1	-	Sa.
	-	167	ⅢbU	完形	16.5	-8.5	10.6	-6.9	6.9	-1.2	1.6	0.2	1.7	-	Qz.
	-	168	ⅢbU	完形	17.1	-7.9	11.5	-6.0	3.1	-5.0	1.5	0.1	0.9	-	Mud.
	-	169	ⅢbU	完形	17.6	-7.4	17.0	-0.5	7.4	-0.7	1.0	-0.4	3.1	-	Qz.
	-	170	ⅢbU	完形	13.9	-11.1	13.3	-4.2	6.6	-1.5	1.0	-0.4	1.8	-	Con.
	-	171	ⅢbU	完形	17.8	-7.2	12.9	-4.6	5.9	-2.2	1.4	0.0	2.4	-	Gr-Mud.
	-	172	ⅢbU	完形	19.1	-5.9	17.5	0.0	10.3	2.2	1.1	-0.3	4.5	-	De-Sa.
	-	173	ⅢbU	完形	10.8	-14.2	8.8	-8.7	2.3	-5.8	1.2	-0.2	0.4	-	Ba.
	-	174	ⅢbU	略完形	44.1	19.1	29.1	11.6	15.1	7.0	1.5	0.1	(24.3)	-	Ba.
	-	393	ⅢbU	完形	72.2	47.2	37.6	20.1	17.8	9.7	1.9	0.5	77.7	-	Gne.
	-	395	ⅢbU	完形	52.8	27.8	35.9	18.4	15.6	7.5	1.5	0.1	42.2	-	Sa.
	-	461	ⅢbU	完形	62.1	37.1	43.0	25.5	23.0	14.9	1.4	0.0	82.6	-	Mud.
	-	462	ⅢbU	完形	24.2	-0.8	17.2	-0.3	6.8	-1.3	1.4	0.0	4.3	-	Sa.
完形合計															19
完形平均値					25.0		17.5		8.1		1.4				
完形総重量													254.6		

ⅢB-02(アイヌ文化期)

図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm) 長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差	長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質
8-6	-	107	ⅢbU	完形	58.1	-8.4	26.9	-6.4	18.9	0.4	2.2	0.2	44.7	○	Por.
	-	108	ⅢbU	完形	74.9	8.4	39.6	6.3	18.0	-0.5	1.9	-0.1	82.0	-	De-Sa.
完形合計															2
完形平均値					66.5		33.3		18.5		2.0				
完形総重量													126.7		

ⅢB-03(擦文文化期)

図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm) 長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差	長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質
8-13	-	110	ⅢbL	完形	63.3	13.0	37.0	5.8	12.6	-5.3	1.7	-0.1	53.3	-	Gne.
	-	111	ⅢbL	完形	60.1	9.8	39.3	8.1	9.5	-8.4	1.5	-0.3	38.3	-	Amp.
	-	112	ⅢbL	完形	26.9	-23.4	17.6	-13.6	12.1	-5.8	1.5	-0.3	7.1	-	De-Sa.
	-	115	ⅢbL	完形	49.1	-1.2	40.0	8.8	8.5	-9.4	1.2	-0.6	31.4	-	Gab.
	-	116	ⅢbL	完形	38.2	-12.1	26.2	-5.0	11.4	-6.5	1.5	-0.3	17.2	-	Ba.
	-	117	ⅢbL	完形	73.1	22.8	44.2	13.0	27.5	9.6	1.7	-0.1	114.7	-	Tuf.
	-	118	ⅢbL	完形	44.1	-6.2	31.2	0.0	18.5	0.6	1.4	-0.4	35.0	-	And.
	-	119	ⅢbL	完形	69.1	18.8	27.5	-3.7	15.0	-2.9	2.5	0.7	44.0	-	Sa.
	-	120	ⅢbL	完形	72.2	21.9	68.1	36.9	38.2	20.3	1.1	-0.7	279.0	-	Ba.
	-	121	ⅢbL	完形	75.0	24.7	16.5	-14.7	42.2	24.3	4.5	2.7	202.0	-	Sa.
	-	233	ⅢbL	完形	12.9	-37.4	11.5	-19.7	9.7	-8.2	1.1	-0.7	2.5	-	Ba.
-	-	227	ⅢbL	完形	19.9	-30.4	15.4	-15.8	10.0	-7.9	1.3	-0.5	4.0	-	Che.
完形合計															12
完形平均値					50.3		31.2		17.9		1.8				
完形総重量													828.5		

表Ⅱ-6　ⅢSB出土礫属性表

ⅢSB-01（アイヌ文化期）

図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm) 長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差	長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質
10-14・15	-	250	ⅢbU	完形	41.7	-5.6	23.8	-9.6	8.0	-7.0	1.8	0.4	12.1	-	Sa.
	-	251	ⅢbU	完形	44.1	-3.2	28.2	-5.2	12.2	-2.8	1.6	0.2	24.3	-	Gab.
	-	252	ⅢbU	完形	39.5	-7.8	30.2	-3.2	16.3	1.3	1.3	-0.1	25.0	-	De-Sa.
	-	253	ⅢbU	完形	44.9	-2.4	29.2	-4.2	14.6	-0.4	1.5	0.1	25.7	-	Ba.
	-	254	ⅢbU	完形	45.9	-1.4	43.7	10.3	19.0	4.0	1.1	-0.3	57.5	-	Che.
	-	255	ⅢbU	完形	37.4	-9.9	31.8	-1.6	17.0	2.0	1.2	-0.2	26.8	○	Sa.
	-	256	ⅢbU	完形	37.0	-10.3	30.8	-2.6	10.4	-4.6	1.2	-0.2	22.6	-	Sa.
	-	257	ⅢbU	完形	44.1	-3.2	22.0	-11.4	11.8	-3.2	2.0	0.6	18.6	-	De-Sa.
	-	258	ⅢbU	完形	40.5	-6.8	29.6	-3.8	9.3	-5.7	1.4	0.0	18.1	-	Gne.
	-	259	ⅢbU	完形	32.6	-14.7	26.0	-7.4	12.2	-2.8	1.3	-0.1	16.2	-	Sa.
	-	260	ⅢbU	完形	41.3	-6.0	30.1	-3.3	15.2	0.2	1.4	0.0	25.7	-	Mud.
	-	261	ⅢbU	略完形	43.0	-4.3	24.9	-8.5	7.0	-8.0	1.7	0.3	(11.1)	-	Sa.
	-	262	ⅢbU	完形	42.2	-5.1	31.4	-2.0	9.7	-5.3	1.3	-0.1	58.3	-	Gr-Mud.
	-	263	ⅢbU	完形	54.3	7.0	39.1	5.7	16.6	1.6	1.4	0.0	58.3	-	Amp.
	-	266	ⅢbU	完形	62.4	15.1	30.6	-2.8	14.0	-1.0	2.0	0.6	40.5	-	De-Sa.
	-	267	ⅢbU	完形	48.2	0.9	36.3	2.9	15.3	0.3	1.3	-0.1	36.1	-	De-Sa.
	-	268	ⅢbU	完形	36.3	-11.0	28.6	-4.8	18.8	3.8	1.3	-0.1	29.4	-	Qz.
	-	269	ⅢbU	完形	55.4	8.1	35.7	2.3	27.1	12.1	1.6	0.2	78.8	-	Qz.
	-	270	ⅢbU	完形	65.3	18.0	39.2	5.8	11.7	-3.3	1.7	0.3	49.0	-	Amp.
	-	273	ⅢbU	完形	38.4	-8.9	31.4	-2.0	13.8	-1.2	1.2	-0.2	26.9	-	Gr-Mud.
	-	274	ⅢbU	完形	50.9	3.6	36.5	3.1	17.2	2.2	1.4	0.0	45.5	-	Sa.
	-	275	ⅢbU	完形	43.0	-4.3	35.7	2.3	18.8	3.8	1.2	-0.2	37.2	-	Qz.
	-	276	ⅢbU	完形	34.4	-12.9	27.0	-6.4	12.1	-2.9	1.3	-0.1	19.2	-	Mud.
	-	280	ⅢbU	完形	54.9	7.6	40.7	7.3	16.8	1.8	1.3	-0.1	59.5	-	Gne.
	-	281	ⅢbU	完形	45.6	-1.7	34.8	1.4	11.9	-3.1	1.3	-0.1	27.4	-	De-Sa.
	-	282	ⅢbU	完形	46.5	-0.8	33.2	-0.2	13.8	-1.2	1.4	0.0	33.5	-	De-Sa.
	-	283	ⅢbU	完形	38.1	-9.2	33.1	-0.3	16.3	1.3	1.2	-0.2	35.6	-	Che.
	-	284	ⅢbU	完形	45.2	-2.1	30.1	-3.3	13.3	-1.7	1.5	0.1	25.7	○	De-Sa.
	-	285	ⅢbU	完形	53.1	5.8	30.4	-3.0	14.7	-0.3	1.7	0.3	33.6	-	De-Sa.
	-	286	ⅢbU	完形	52.6	5.3	28.9	-4.5	9.3	-5.7	1.8	0.4	20.4	-	Sa.
	-	287	ⅢbU	完形	35.0	-12.3	26.3	-7.1	10.8	-4.2	1.3	-0.1	15.0	-	Mud.
	-	288	ⅢbU	完形	59.7	12.4	35.6	2.2	15.8	0.8	1.7	0.3	47.8	○	Sa.
	-	289	ⅢbU	完形	46.6	-0.7	40.3	6.9	16.1	1.1	1.2	-0.2	47.0	-	Gab.
	-	291	ⅢbU	完形	36.4	-10.9	23.3	-10.1	15.5	0.5	1.6	0.2	19.6	-	Qz.
	-	292	ⅢbU	完形	48.1	0.8	22.0	-11.4	11.7	-3.3	2.2	0.8	19.6	-	Sa.
	-	294	ⅢbU	完形	50.9	3.6	42.0	8.6	15.1	0.1	1.2	-0.2	45.7	-	Gab.
	-	295	ⅢbU	完形	62.5	15.2	44.0	10.6	12.5	-2.5	1.4	0.0	59.6	-	Gab.
	-	296	ⅢbU	完形	46.0	-1.3	29.8	-3.6	9.8	-5.2	1.5	0.1	22.1	-	Gr-Mud.
	-	298	ⅢbU	完形	42.8	-4.5	32.2	-1.2	17.3	2.3	1.3	-0.1	30.6	-	Sa.
	-	299	ⅢbU	完形	38.7	-8.6	24.0	-9.4	11.7	-3.3	1.6	0.2	16.7	-	Gr-Mud.
	-	300	ⅢbU	完形	45.8	-1.5	32.4	-1.0	14.6	-0.4	1.4	0.0	29.6	-	Che.
	-	301	ⅢbU	完形	76.4	29.1	44.1	10.7	17.3	2.3	1.7	0.3	87.0	-	Sa.
	-	302	ⅢbU	完形	50.5	3.2	46.6	13.2	20.6	5.6	1.1	-0.3	55.5	-	Sa.
	-	303	ⅢbU	完形	38.7	-8.6	21.6	-11.8	17.4	2.4	1.8	0.4	21.4	-	Ba.
	-	304	ⅢbU	完形	58.8	11.5	50.8	17.4	25.6	10.6	1.2	-0.2	89.0	-	De-Sa.
	-	305	ⅢbU	完形	80.8	33.5	64.3	30.9	32.5	17.5	1.3	-0.1	169.1	○	De-Sa.
	-	323	ⅢbU	完形	47.4	0.1	30.5	-2.9	15.3	0.3	1.6	0.2	33.1	-	Che.
	-	324	ⅢbU	完形	45.5	-1.8	35.2	1.8	19.8	4.8	1.3	-0.1	37.5	-	Qz.
	-	325	ⅢbU	完形	44.1	-3.2	30.5	-2.9	11.9	-3.1	1.4	0.0	23.5	-	De-Sa.
-	ⅢS01	264他	ⅢbU	完形	44.1	-3.2	40.8	7.4	11.2	-3.8	1.1	-0.3	33.0	-	Por.
-	ⅢS02	277他	ⅢbU	略完形	56.1	8.8	36.2	2.8	20.0	5.0	1.5	0.1	(28.0)	-	Mud.
完形合計															51
完形平均値					47.3		33.4		15.0		1.4				
完形総重量													1929.0		

表Ⅱ-6　ⅢSB出土礫属性表（続き）

ⅢSB-02（擦文文化期）

図版番号	個体名称	遺物番号	層位	状態	計測値(mm) 長軸	標準偏差	短軸	標準偏差	厚さ	標準偏差	長短比	長短比標準偏差	重量(g)	被熱	材質
10-16	－	177	ⅢbL	完形	52.0	-4.1	34.2	-3.9	14.2	-3.9	1.5	0.0	37.5	－	Sa.
	－	178	ⅢbL	完形	54.0	-2.1	38.5	0.4	18.9	0.8	1.4	-0.1	56.1	－	De-Sa.
	－	179	ⅢbL	完形	56.9	0.8	43.5	5.4	18.2	0.1	1.3	-0.2	69.5	－	Sa.
	－	181	ⅢbL	完形	64.0	7.9	40.2	2.1	14.1	-4.0	1.6	0.1	62.2	－	Gne.
	－	182	ⅢbL	完形	52.0	-4.1	35.2	-2.9	20.9	2.8	1.5	0.0	55.6	－	Che.
	－	185	ⅢbL	完形	55.1	-1.0	29.4	-8.7	19.2	1.1	1.9	0.4	44.0	○	De-Sa.
	－	186	ⅢbL	完形	52.3	-3.8	34.6	-3.5	19.9	1.8	1.5	0.0	53.0	○	De-Sa.
	－	187	ⅢbL	完形	59.0	2.9	39.1	1.0	25.1	7.0	1.5	0.0	97.0	○	De-Sa.
	－	188	ⅢbL	完形	54.5	-1.6	44.2	6.1	15.1	-3.0	1.2	-0.3	61.4	○	Gab.
	－	189	ⅢbL	完形	63.5	7.4	36.2	-1.9	18.0	-0.1	1.8	0.3	54.0	○	De-Sa.
－	ⅢS03	180他	ⅢbL	略完形	53.9	-2.2	43.7	5.6	15.8	-2.3	1.2	-0.3	(36.2)	○	Sa.
完形合計															11
完形平均値					56.1		38.1		18.1		1.5				
完形総重量													626.5		

第6節　包含層出土遺物（図Ⅱ-8　図版11-1）

Ⅲ層からは中世アイヌ文化期新段階（16世紀代）や擦文文化期後期、続縄文文化期末葉と前葉の遺物が合計455点出土しており、うち包含層出土遺物は202点出土している（表Ⅰ-2）。このうち主な遺物を掲載し、以下に詳細を記す。

図Ⅱ-8-1は擦文後期の口縁が大きく外反する甕形土器片で、口縁部は横走沈線と刻みが施されている。胴部上半には僅かに2条1対の縦位と斜位の沈線文が施されている。胎土には粗粒砂を多量に含み重量感がある破片資料である。2は続縄文文化期前葉の汐見式土器深鉢の口縁部文様帯から胴部上半にかけての資料で、無文帯上には棒状工具を斜位に押捺した半円状の刺突列が2段施され、無文帯はミガキ調整が施されている。破片下部には僅かにRL斜行縄文が施されている。3は深鉢形土器の胴部下半の資料で、RL縦走縄文が施されている。胎土には粒径2mm以上の石英結晶をやや多く含む。富良野盆地系土器としたが、地文縄文施文後の弱いナデ調整や内面調整、良好な焼成、硬質感のほか遺跡の位置環境より、胎土中の石英結晶は白老町虎杖浜地区のクッタラ系火山噴出物に由来する可能性もある。

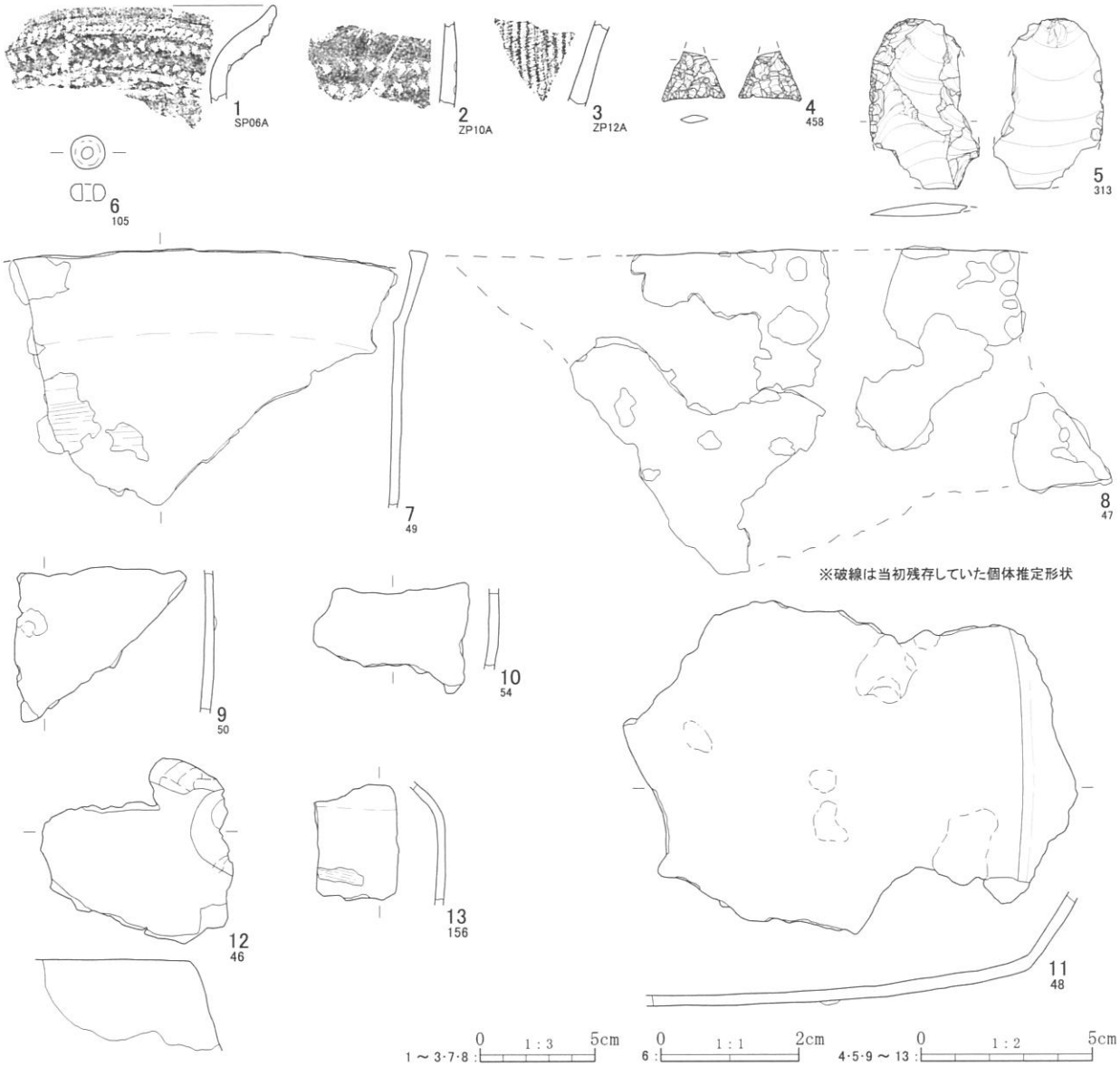
図Ⅱ-8-4は黒曜石製の無茎平基の三角形鏃で、両面入念な押圧剥離調整が施されており尖頭部が欠失している。5は頁岩製のサイドスクレイパーで、素材剥片の片面調整により左側縁に刃部が作出されている。

図Ⅱ-8-6は直径4.8mm、青色系のやや透明感のあるガラス小玉でY-13区発掘調査区壁面付近の傾斜地、Ⅲb層中より単体で出土した。周囲を丹念に精査したが他のガラス玉や関連資料は出土していない。孔周囲の表裏面に1mm前後の平坦面があり、摩滅により強い光沢が発達している。連珠状態でのガラス玉同士の擦れによるものと思われる。孔は直径1.5～2mmあり、若干いびつで正円ではない。ルーペによる肉眼観察では、表面などにガス抜けの細かな気泡痕跡が認められるものの、製作方法の巻き付け技法特有の引き伸びや繊維状構造などは観察できなかった。表面の風化等はみられず、遺存状況は良好であり、出土層位などから本遺跡の中世アイヌ文化期新段階に帰属するものと思われる。

図Ⅱ-8-7～12はX-12・Y-11・12区のⅢb層上位出土の同一個体鉄鍋資料群で、口縁部片、底

部片が出土した。底径は推定で約 26cm を測り、口径や高さの推定は不可能であったものの、大型の鉄鍋と思われる。7 は良好に遺存している口縁部から胴部にかけての大型破片で、口縁部は口唇部より 37mm 下方の位置で約 17° の傾きで明瞭な屈曲をもって直線的に開く。口唇部は内側へ三角形状に肥厚し、厚さ 9mm を測る。口縁-胴部屈曲部分の内面側には肥厚する段差を有し、厚さ 5mm で、他の口縁部や胴部では厚さ 4mm 程度となっている。器表面胴部の左側の一部には錆塊剥落により、鉄鍋本体の器表面が良好に観察でき、鋳型製作時の木型轆轤挽痕跡と思われる並行する線条痕が残る。今回の同一個体片資料等では吊耳･内耳の把手部分の形態を確認できていないものの、口縁部のやや外反する段状構造や口唇部の形状より、内耳鉄鍋と思われる。8 も口縁部から胴部にかけての大型破片であるが、取り上げ後、軽舞遺跡調査整理事務所の温湿度管理特別収蔵庫内にて一時乾燥のため保管していたところ、劣化破砕してしまった資料である。報告書図中は、取り上げ直後に撮影した画像に整合させた位置関係で図上復元している。9･10 は胴部片資料である。11･12 は底部片である。11 は底部の大型片で大部分が底面を占めるが、底面中央部の湯口や周囲の肥厚盛り上がりの鋳型鳥目穴跡は確認できていないことから、丸口湯口の可能性がある。底面中央は平坦で、厚さ 3mm を測る。立ち上がりから底面中央部へ 35mm の範囲までは緩く膨らみをもち、厚さも 4.5mm でやや肥厚する。底面から側面への立ち上がりは明瞭な屈曲を有し、器表面側には幅 3mm の明瞭な段差がある。12 は未掲載の底部立ち上がりの小片に伴う錆塊で、鉄鍋本体器表面の剥離メス型痕跡を良好に残している。メス型剥離面は平坦であり、底部側面立ち上がりより 35mm 程度中央部側の底面に付着していた錆塊と思われる。鉄鍋底面のメス型剥離面から連続する脚部痕跡と推定される筒状のメス型剥離面があり、底面側脚基部で直径約 20mm、高さ 15mm、脚先端部側残存径は 16mm を測る。痕跡では脚高が 15mm 残存しているが、脚先端部が折損している可能性がある。これらの口唇部、口縁部、底部立ち上がり、底面など形態的特徴から、16 世紀後半の内耳鉄鍋と思われる。

13 は板状ないしは帯状の鉄製品で、長軸両端が折損している。幅は 23mm で上部は折り曲げられており、やや厚いものの口金などの部品金具の可能性がある。



図Ⅱ-8 Ⅲ層包含層出土遺物

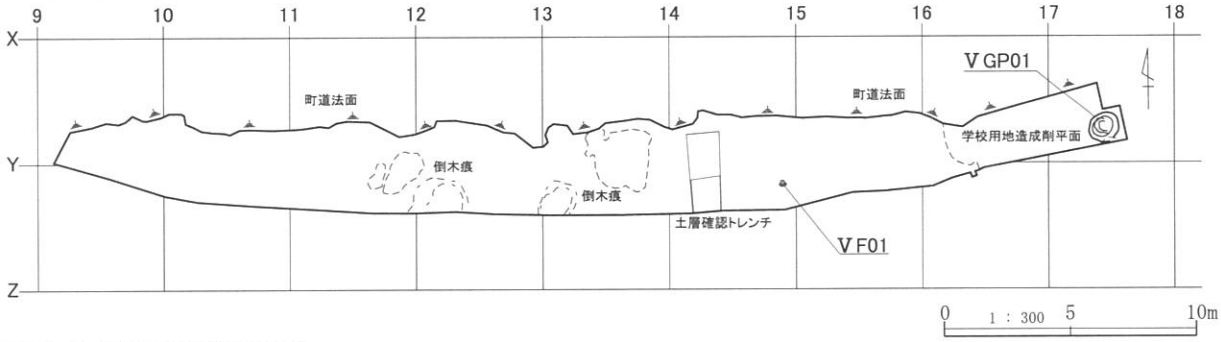
表Ⅱ-7 Ⅲ層包含層出土遺物属性表

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	分類	層位	グリッド/遺構名	計測値(mm) 長軸	短軸	厚さ	重量(g)	材質	備考
Ⅱ-8-4	11-1-4	458	ポイント類	A2a	Ⅲc	X-16	(13.2)	17.7	3.0	(0.6)	Obs.	
Ⅱ-8-5	11-1-5	313	ナイフ・スクレイパー	C1	ⅢbL	Y-15	50.5	27.8	3.9	(7.1)	Sh.	
Ⅱ-8-6	11-1-6	105	ガラス玉	-	Ⅲb	Y-13	4.8	4.8	2.6	0.1	Gl.	青色系
Ⅱ-8-7	11-1-7	49	鉄鍋口縁部片	-	ⅢbU	X-12	(169.2)	(112.1)	8.7	(195.0)	Irn.	口唇肥厚
Ⅱ-8-8	11-1-8	47	鉄鍋口縁部片	-	ⅢbU	Y-11	(290.7)	(142.1)	9.0	(225.0)	Irn.	推定個体
Ⅱ-8-9	11-1-9	50	鉄鍋胴部片	-	ⅢbU	X-12	(49.2)	(43.0)	3.5	(21.6)	Irn.	
Ⅱ-8-10	11-1-10	54	鉄鍋胴部片	-	ⅢbU	Y-12	(44.1)	(31.8)	3.3	(15.6)	Irn.	
Ⅱ-8-11	11-1-11	48	鉄鍋底部片	-	ⅢbU	X-12	(133.7)	(92.1)	4.5	(179.7)	Irn.	
Ⅱ-8-12	11-1-12	46	鉄鍋底部片	-	ⅢbU	Y-11	(55.0)	(53.3)	-	(63.3)	Irn.	錆塊(メス型)
Ⅱ-8-13	11-1-13	156	板状鉄製品	-	ⅢbL	Y-15	(33.4)	23.4	2.8	(8.4)	Irn.	

第Ⅲ章　Ⅴ層の調査

本章ではⅤ層で検出した縄文時代の遺構、遺物を対象として記載する。遺構は調査区東側の台地上平坦面で焼土１ヵ所、東側の工事立会区域で土坑墓１基を検出し、遺物も極少量に限られた。以下に遺構種別毎に記載する。

Ⅴ層遺構配置図



図Ⅲ-1　Ⅴ層遺構配置図

表Ⅲ-1　Ⅴ層遺構属性一覧表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	調査面規模(cm)		厚さ/深さ(cm)	備考
						長軸	短軸		
Ⅲ-2	5-5～7	ⅤGP-01	X-17	Ⅵ	楕円形	128	114	(43)	工事立会区域
Ⅲ-2	5-8・6-1	ⅤF-01	Y-14	ⅤcU	不整円形	28	24	5	

第１節　土坑墓

調査区に隣接する東側の町道改良工事区域で、土坑墓１基を検出した。この区域は学校用地造成で自然地形面より既に約 1m削平されていたため、整地盛土層をバックホウで除去した。Ⅵ層～Ⅶ層面での工事立会対応とし、土坑墓１基を検出、調査した。以下に詳細を記す。

ⅤGP-01（図Ⅲ-2　図版 5-5～7）

位置：X-17 区　層位：Ⅵ層　帰属時期：縄文時代後期以前

平面形：楕円形　平面規模：長軸 128cm×短軸 114cm　深さ(43)cm

確認・調査：町道改良工事の発掘調査区の調査終了段階で、工事施工事業者より調査区東側の学校用地削平部分の工事施工も引き続き実施したいとの要望を受け、調整し対応した。

施工は地山層までの掘削であったが、立会にあたり事業者の協力を得て、重機による撹乱整地層を掘削除去し、Ⅵ層漸移層の地山層を検出した。施工立会区域の東端区域境界で、黒色土が半円形に落ち込むプランを検出し、遺構名ⅤP-01 としたが、調査過程において堆積状態などから土坑墓ⅤGP-01 へと変更した。検出面プランから当初、円形ないしは楕円形の土坑と判断し、中央部付近で堆積状況等確認のセクション面を設定し、半裁掘開した。なお、検出面において黒色土落ち込み中央部付近に風化ローム質土や恵庭・支笏パミスを含む暗褐色土をリング状に確認したため、検出状況の撮影およびその範囲も図化している。堆積状況実測完了後、セクション面から土坑墓の残る半分を立ち上げ完掘し、調査区域拡張範囲を必要最低限の面積に

留めている。

形態：完掘の結果、平面形は楕円形で、長軸約 1.3m、短軸約 1.1mを測る。坑底面はほぼ水平で、壁面立ち上がりは明瞭な角をもち北側はほぼ垂直に立ち上がり、南側は壁面中位に狭小な段状のステップがみられた。深さについては土坑墓構築面が削平されており、調査検出面からの深さで、約 40cm を測る。本来は 20cm 程度、より深いものと思われる。

堆積状況：土坑墓中央部は窪み、樽前ｃテフラが堆積していることからＶ層縄文時代の遺構と判断できた。樽前ｃテフラ直下と土坑墓埋土のローム質土を多く含む１層との間に自然堆積層のＶａ層とＶｂ層上位の黒色土が堆積しており、構築時期は縄文時代後期以前と推定できる。遺構内堆積土壌は全体的に締りが強く、ローム質土やパミス類を含む人為的な埋め戻し土と思われ土坑墓と判断した。埋土１層はローム質土を多量に含み、パミス混入もやや目立つ。埋土最上層の土坑墓構築面と思われる。2～5 層はＶ層黒色土を主体にローム質土やパミスを少量ないしは微量に含む層で、6 層はロームを多量に含みやや黄色味が強い。7 層はローム主体層である。なお、坑底面直上のいわゆる遺体層やベンガラ等の赤色層にも留意したが、堆積状態などでは確認できなかった。

帰属時期：共伴遺物は出土していないものの、遺構構築面に係る埋土１層より上層のＶａ層、Ｖｂ層上位の自然堆積層の堆積状況から縄文時代後期以前の土坑墓と思われる。

第２節　焼土

調査区東側の台地平坦面にて焼土１ヵ所を検出した。以下に詳細を記す。

ＶF-01（図Ⅲ-2　図版 5-8・6-1）

位置：Y-14 区　層位：Ｖｃ層上位　帰属時期：縄文時代後期以前

平面形：不整円形　平面規模：長軸 28cm×短軸 24cm　厚さ 5cm

確認･調査：Y-14 区のＶｂ層掘削除去後のＶｃ層上位において、不整円形の赤褐色被熱層を検出し、遺構名ＶF-01 とした。周囲を精査し、検出面の撮影と平面形を記録した後、中央部ラインで半裁し断面の撮影と実測図化を行い調査終了とした。なお、検出時点で燃焼面を削平しており、炭化物や焼骨片は確認できなかったため、フローテーションサンプルは回収していない。

堆積状況：1 層は土壌の締り具合が強いものの、形状より焼土形成後の植物根の影響で落ち込んだ被熱層と思われる。炭化物を微量に含んでおり焼土燃焼面の土壌の可能性もある。2 層は検出確認面におけるＶｃ 層地山被熱層で、焼土形成後の植物擾乱によりＶｃ 層が斑状に混じる。

帰属時期：周辺からも遺物が全く出土していないものの、検出層位より縄文時代前期から後期にかけてのものと思われる。

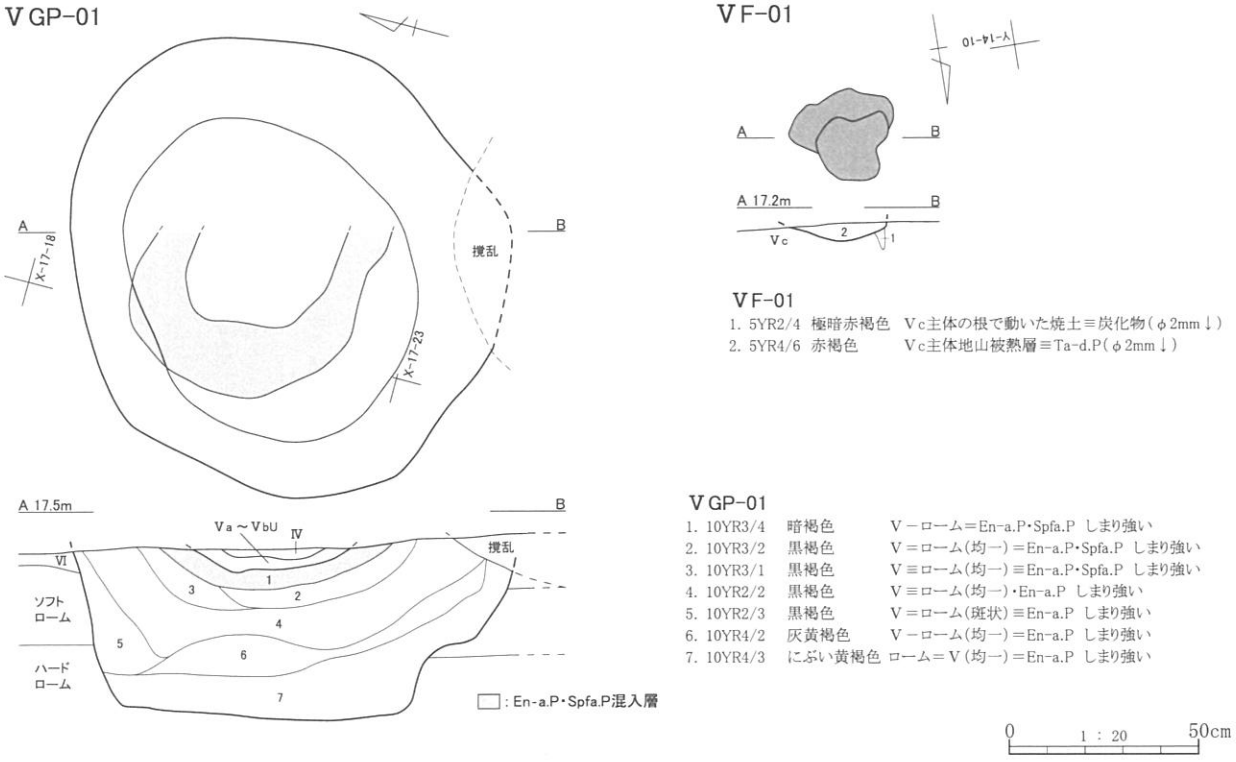
第３節　包含層出土遺物（図Ⅲ-3　図版 11-2）

Ｖ層からは遺構に伴う遺物の出土は無く、包含層から土器片 7 点、剥片石器 1 点、剥片類 1 点の計 9 点が出土したに留まる。主な遺物を掲載し、以下に詳細を記す。

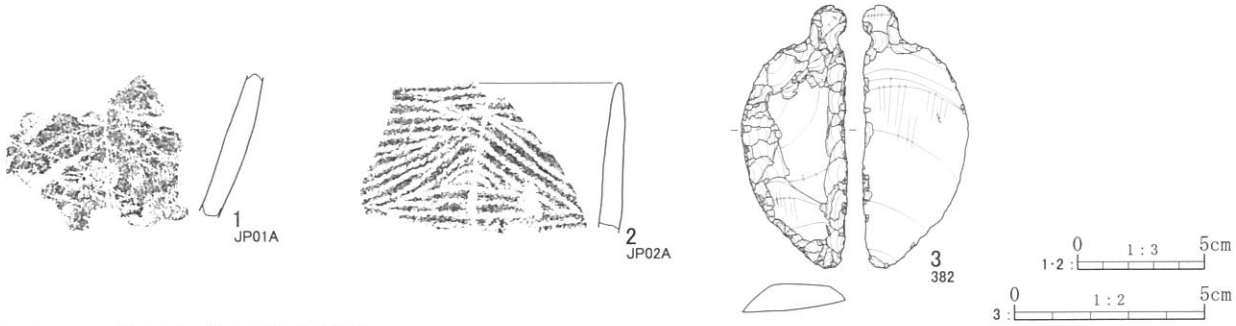
図Ⅲ-3-1 は縄文時代早期中葉の住吉町式系土器と思われる胴部下半の資料で、被熱による器表面の風化が著しいものの貝殻腹縁文が矢羽根状構成に施文されている（図版 11-2-1b）。胎

土は砂粒をやや多く含み重量感がある。Y-13 区の倒木痕落ち込みから出土し、周辺もⅦ層上位まで掘削調査したが、他の破片資料は出土しなかった。本資料は、町内の埋蔵文化財調査において最も古い縄文土器片の１つである。2 はⅢPB-03 と同一面で出土した破片である。縄文早期末葉の東釧路Ⅳ式土器口縁部片で、口唇部の形状より古手の資料と思われる。緩い波状縁を成すものと思われ、口縁部文様帯には上下に入組む山形構成の撚糸文が施されている。内面は成形時の指頭圧痕が顕著に残る。

3 は続縄文文化期汐見式期のⅢPB-03 北西部よりほぼ直立した状態で、低い位置より出土しており、倒木痕の影響かと思われ、Ⅴ層包含層扱いとした。珪質頁岩製片面調整の縦型のつまみ付きナイフである。裏面の素材剥片主剥離面は打点を下方としており、かつ、裏面右側縁に表面への剥離調整用の打面形成がみられないことから、早期後葉から前期初頭にかけての松原技法のつまみ付きナイフとは異なる加工整形を施している。刃部は表面右側縁に直線的に形成され刃角は鈍角を成し、裏面には僅かに使用に伴う微細剥離がみられる。表面左側縁は弧状に整形され、刃潰しと思われる微細剥離が連続する。



図Ⅲ-2　ⅤGP・ⅤF平面及び断面図



図Ⅲ-3　Ⅴ層包含層出土遺物

表Ⅲ-2　Ⅴ層包含層出土土器属性表

挿図番号	図版番号	個体名称	分類	グリッド	層位	点数	器形/部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁－口唇/胴部/底側面－変換点－底面	口唇－口縁－内面/胴部－内面/底側面－底面－内面		
Ⅲ-3-1	11-2-1	JP01A	ⅠA1	Y-13	Ⅵ	3	深鉢/胴部	内湾気味外傾(推定:尖底土器胴部下半)	貝殻腹縁文(矢羽根状構成)	砂粒やや多量	
Ⅲ-3-2	11-2-2	JP02A	ⅠB4	X-15	Ⅲc	3	深鉢/口縁部	波状縁・直立-尖状	L撚糸圧痕文(山形構成)-指頭圧痕(調整痕)	砂粒中量	ⅢPB-03混入

表Ⅲ-3　Ⅴ層包含層出土石器属性表

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	分類	層位	遺構/グリッド	規模(mm)			重量(g)	材質	備考
							長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-3-3	11-2-3	382	ナイフ・スクレイパー	A1	Vc	X-15	68.2	26.8	7.5	15.5	Sh.	ⅢPB-03混入

第Ⅳ章　まとめ

第１節　厚真川流域における上厚真遺跡の立地について

平成 14 年から 28 年までの厚幌ダム建設事業や平成 19 年から 30 年までの厚幌導水路建設事業に伴う一連の大規模事業では、そのほとんどが厚真川上流域・中流域での埋蔵文化財発掘調査であった。今回、調査面積は限られているものの厚真川下流域沿いでの唯一の調査例となり縄文時代以降、中世アイヌ文化期新段階（16 世紀後半）に至るまでの調査成果を得ている。

これらの発掘調査成果や厚真町郷土研究会等の町内での考古資料の収集成果により現在では 151 ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。遺跡立地の傾向として、複数の時期にわたり遺物が出土し、かつ集落跡を形成する比較的規模の大きな遺跡は、河川の合流点や厚真川本流に台地が近接する地点に立地する傾向が伺える。かなり限定的な調査であったが、今回の調査成果からも、上厚真遺跡は厚真川本流が台地に接し、かつ隣接する野安部川や鯉沼川のほか、両河川の支流で広範囲の集水面積をもつ軽舞川や当麻内川も含めたこれらの小河川の合流点に面した好条件の立地環境といえる。河川合流点に面した大規模な遺跡としては、厚真川中流域の新町遺跡や富里１遺跡、同３遺跡、オコッコ１遺跡などがあり、上流域ではヲチャラセナイ遺跡、上幌内モイ遺跡、ショロマ１遺跡などが挙げられる。

今回の調査により、厚真川流域における上記の遺跡立地の特徴を下流域でも肯定するものであり、厚真川が果たした交通ルートとしての役割を補完し、より確証を得る成果ともいえる。

第２節　Ⅲ層の調査成果

1.　中世アイヌ文化期

焼土や遺物集中区の検出層位や年代測定結果より、これらはほぼ同時期に残された遺構遺物群であり、その年代観は 16 世紀代後半と思われる。

これまで厚真町内では厚真川上中流域の厚幌ダムや厚幌導水路建設事業に伴う大規模調査が進められてきたが、厚真川下流域でのアイヌ文化期の遺構遺物の出土は組織的調査として初例となる。近隣では苫小牧市静川 22 遺跡（苫小牧市教育委員会 2002）のアイヌ文化期の焼土や獣骨群の出土例があり、近世末期から明治初期にかけての弁天貝塚（苫小牧市教育委員会 1987・1988・1989）が知られていた。

今回の発掘調査で特筆すべき成果としては、ⅢB-01 遺物集中区としたウバガイ集中、灰集中、獣骨集中で構成される送り場跡を検出したことである。有珠ｂテフラとの層位関係や鉄鍋の形態、AMS 法炭素年代測定の結果から 16 世紀後半のものと考えられる。撹乱部分もあり、かつ、調査区外へも続くことから一部の発掘調査となっているが、アイヌ民族の送り儀礼・廃棄行為の一端を伺うことができた。下層の獣骨集中ⅢBB-01 と灰集中ⅢAS-01 ではシカ若獣の頭骨を意識している可能性があると指摘されている（第Ⅴ章第２節参照）。ほぼ同時に送られたホタテガイと灰層は火や炉に係るセットを意識されたものと思われる。その上層のウバガイ集中ⅢSHB-01 はホタテガイや灰層の中心縁辺部に殻頂部を意識したと可能性がある出土状態であった（第Ⅴ章第３節参照）。また、ⅢB-01 からは炭化種子も出土し、ニワトコ属の分布にも偏向があり一連の送り儀礼行為を反映している可能性がある。これらの事象は、単なる不要物の廃

棄ではなく 16 世紀後半におけるアイヌ民族の送り儀礼の事例として貴重な成果といえよう。

出土遺物では鉄鍋が挙げられる。出土層位などから 16 世紀後半で、口唇部や口縁部の形態よりの内耳鉄鍋と思われる。北海道における鉄鍋編年（越田 2004）においても、合致する年代観と思われる。

2. 擦文文化期

検出遺構は獣骨を主体とする遺物集中区や土器集中、礫集中に限られ、擦文後期の馬蹄形押捺文を有する囲繞貼付文土器などが出土している。年代観は、中世アイヌ文化期ⅢB-02 からの年代測定試料ではあるものの 11 世紀中葉から後葉にかけての絶対年代数値が得られており、擦文文化期後期の年代を反映していると想定される。

ⅢB-03 とした遺物集中区はシカ頭骨由来の獣骨で構成されており、厚真川上流域の上幌内モイ遺跡で検出されているシカ送り儀礼の痕跡（集中区 35・ⅢBB-41:町教委 2009）と同じ性格の可能性がある。擦文土器では特異な資料として土器胴部下半の青海波状ないしは弧状のハケ目調整痕が施されている個体が出土している。当該期の擦文土器の多くは、胴部下半はミガキ調整であり、このような調整技法は、青森県の擦文後期の土器片にも数例見られる。出土例の集成など行っていないがルーツについては今後の課題としたい。

3. 続縄文文化期

焼土 3 ヵ所と土器集中 2 ヵ所と遺構遺物は少ないものの、主体は続縄文文化期前葉の汐見式期である。厚真村郷土研究会の文献資料では恵山式が採集されていることから、継続して遺跡が残されていたことが判明した。なお研究会が記録している昭和 31 年の町内遺跡一覧表には恵山式期の遺跡は上厚真遺跡と厚真町北部の高丘地区の 2 ヵ所であり、研究会採集の完形の魚形石器も上厚真遺跡の可能性が高いと思われる。

焼土からは多量の被熱した獣魚骨が回収されているが、シカが多い傾向は厚真川上流域の調査成果と同様であるものの、サケ科やコイ科（ウグイ）の魚骨の混入率が上流域の遺跡と比べて高い傾向にある。厚真川下流域の生業を示す特徴の可能性がある。

出土遺物では、土器胎土に石英結晶を多量に含む資料 1 点（図Ⅱ-8-3）を回収しているが、厚真川上流域に特徴的な富良野盆地系土器か、白老町虎杖浜台地の遺跡群に特徴的なクッタラ火砕流に起因する石英結晶粒を含む土器かは出土した土器が小片であることから、断定できなかった。いずれにせよこの地域には無い胎土混和材の特徴であり、搬入資料であることが間違いないものの、今後の課題である。

第 3 節　Ⅴ層の調査成果

副葬品を伴わない土坑墓 1 基と焼土 1 ヵ所、出土遺物も 9 点と遺構遺物が極めて少ない調査結果であった。郷土研究会によると縄文時代の上厚真遺跡では円筒式、北筒式が採集されていることから、広い遺跡内の他の地点に縄文時代の拠点があったものと思われる。

主な成果としては、縄文早期の貝殻文尖底土器が出土したことが挙げられる。町内の貝殻文系土器が出土した遺跡は、ニタッポロ沢遺跡（道埋文 2022）や豊沢 2 遺跡（宮夫 1980）などに次いで 4 例目となる。

第Ⅴ章　自然科学的分析

第１節　厚真町上厚真遺跡における放射性炭素年代測定（AMS 測定）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・三谷智広

1. はじめに

厚真町上厚真遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、炭化種実（クルミ属）3 点である。試料 No.1（PLD-48298）はⅢSHB-01 から出土、試料 No.2（PLD-48299）はⅢSHB-01 の壁面拡張部から出土、試料 No.3（PLD-48300）はⅢB-02 から出土した。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表1　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-48298	試料No.1 調査区：Y-16 遺構：ⅢSHB-01	種類：炭化種実（クルミ属） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48299	試料No.2 調査区：Y-16 遺構：ⅢSHB-01 （壁面拡張部）	種類：炭化種実（クルミ属） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-48300	試料No.3 調査区：X・Y-15 遺構：ⅢB-02	種類：炭化種実（クルミ属） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

3. 結果

表 2 に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.27％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正には0xCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、0xCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-48298 ⅢSHB-01 試料No. 1	-23.70±0.19	363±19	365±20	1474-1513 cal AD (37.76%) 1515-1517 cal AD (1.30%) 1590-1620 cal AD (29.21%)	1458-1524 cal AD (52.16%) 1560-1564 cal AD (1.02%) 1572-1631 cal AD (42.27%)
PLD-48299 ⅢSHB-01 試料No. 2	-23.41±0.19	325±19	325±20	1512-1528 cal AD (13.55%) 1540-1546 cal AD (4.50%) 1550-1591 cal AD (36.86%) 1620-1635 cal AD (13.36%)	1494-1602 cal AD (75.97%) 1609-1639 cal AD (19.48%)
PLD-48300 ⅢB-02 試料No. 3	-24.04±0.17	925±20	925±20	1047-1083 cal AD (37.58%) 1095-1102 cal AD (5.54%) 1125-1141 cal AD (13.00%) 1148-1161 cal AD (12.15%)	1037-1168 cal AD (94.85%) 1171-1174 cal AD (0.60%)

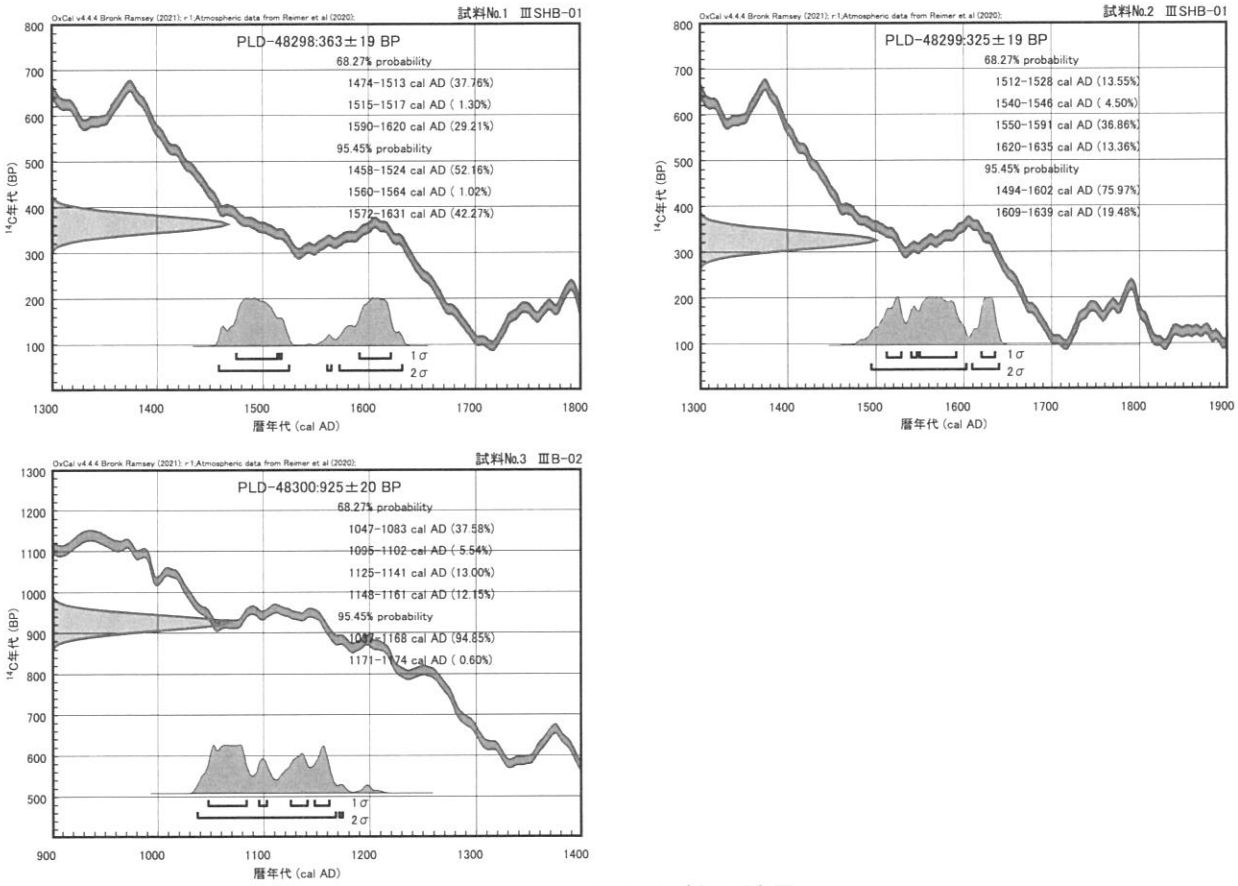


図 1 暦年較正結果

4. 考察

放射性炭素年代測定の結果について、2σ暦年代範囲（確率 95.45%）に着目すると、ⅢSHB-01 の試料 No.1（PLD-48298）は、1458-1524 cal AD（52.16%）、1560-1564 cal AD（1.02%）、1572-1631 cal AD（42.27%）で、15 世紀中頃～17 世紀前半の暦年代を示した。

ⅢSHB-01 の壁面拡張部の試料 No.2（PLD-48299）は、1494-1602 cal AD（75.97%）および 1609-1639 cal AD（19.48%）で、15 世紀末～17 世紀前半の暦年代を示した。

ⅢB-02 の試料 No.3（PLD-48300）は、1037-1168 cal AD（94.85%）および 1171-1174 cal AD（0.60%）で、11 世紀前半～12 世紀後半の暦年代を示した。

いずれの試料もクルミ属の炭化種実であり、測定結果は結実した年代を示す。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

第2節　厚真町上厚真遺跡出土の動物骨

札幌大学非常勤講師　高橋　理

遺跡の名称　上厚真遺跡（J-13-1）
遺跡の所在地　勇払郡厚真町字厚和 66-1, 72-1・6・8
発掘調査期間　令和3年6月21日～7月1日
発掘調査面積　113 ㎡
発掘調査機関　厚真町教育委員会
発掘調査担当者　奈良智法・乾　哲也
遺跡の立地　厚真川河口から約5.6kmの支流軽舞川との合流点に面した標高約17mの台地上
検出遺構　中世アイヌ文化期：焼土、柱穴、遺物集中区、礫集中
擦文文化期：遺物集中区、土器集中、礫集中
続縄文文化期：焼土、土器集中
縄文時代：土坑墓、焼土

はじめに

令和3年度に実施された町道上厚真小学校通り線改良拡幅工事に伴う発掘調査において、縄文時代から中世アイヌ文化期の遺物が回収された。分析の機会を与えられた厚真町教育委員会各位に感謝いたします。

出土動物

分析の対象とした動物骨は、中世アイヌ文化期、擦文文化期、続縄文文化期の各遺構から出土しており、その出土状況を表1・2に示した。

条鰭綱 Actinopterygii
　サケ目 Salmoniformes
　　サケ科 Salmonidae
　　サケ属 *Oncorhynchus*
　コイ目 Cypriniformes
　　コイ科 Cyprinidae
　　ウグイ属 *Tribolodon*
哺乳綱 Mammalia
　ネズミ目（齧歯目） Rodentia
　　ネズミ科 Muridae
　クジラ偶蹄目 Cetartiodactyla
　　シカ科 Cervidae
　　ニホンジカ *Cervus nippon*

コメント

全体として哺乳類のシカが主体であり、フローテーション法によって魚類のサケ科サケ属やコイ科ウグイ属がやや多く確認されている。

① 続縄文文化期前葉

ⅢF-02・03の焼土から動物骨が出土した。これらはフローテーション法によって回収されたものであり、椎骨破片をはじめとするサケ属魚類が主体的である。種不明の哺乳類骨が少量認められる。当該期の軽舞川や厚真川における積極的なサケ漁を伺うことができる。

② 擦文文化期

ⅢB-03の遺物集中からシカ骨が出土した。保存状態は不良であり詳細は不明であるが、直接採集（ハンドピック法）とフローテーション法によってシカの下顎臼歯歯冠片が回収された。その摩耗状態は指数化できないが、若い個体の可能性がある。

③ 中世アイヌ文化期

ⅢB-01・02、ⅢF-01から多くのシカ骨が出土しており、少量のサケ属、コイ科ウグイ属の骨片が加わる。

シカは頭骨から椎骨、四肢骨のほぼ全身骨にわたるが、角がほとんど確認されないという特徴が指摘できる。捕獲が落角期である可能性もあるが、出土頭骨は後頭骨と下顎骨に限られ頭頂骨や前頭骨を欠いている。しかし一方で、側頭骨や上顎骨の一部および上顎臼歯などが認められることから、解体時にシカの頭骨は各部位に細かく分離・裁断され、頭頂骨と前頭骨が取り去られたのではないかと推測される。その目的は脳食利用および角の採取・利用ではなかったか。

これに関連して、上厚真遺跡出土シカの捕獲年齢が多くはごく若いものであったことを指摘しておきたい。シカの年齢推定は、歯の萌出状態、第一切歯の咬耗状態、下顎大臼歯の摩耗（咬耗）状態、四肢骨骨端の癒合状態の観察によるものである（大泰司1980・1994、Perdue1983、Carden *et al.* 2002、山崎2016ほか）。今回の上厚真遺跡出土の中世アイヌ文化期のシカについては下顎臼歯の萌出状態、大臼歯の摩耗状態、第一切歯の咬耗状態、四肢骨骨端の癒合状態の観察によって推定を行った。それぞれの観察内容は表1の備考欄を参照されたい。また、椎骨や寛骨にも未癒合例が認められたことを付記しておく。

以上の観察によって、上厚真遺跡出土のシカは多くが2歳から3歳の若い個体が捕獲されたものと結論される。頭頂骨・後頭骨間のラムダ縫合が未癒合であった3例が認められたが、このことは以上の推定年齢と親和的である。未癒合のラムダ縫合部から頭骨の分離・裁断が施され、頭頂骨・前頭骨や脳が取り去られた状態で他の部位骨とともに送り儀礼に供されたのではなかったと考えられる。

また報告本文の、図Ⅱ-3に示されたとおり、ウバガイの殻頂部はホタテガイ・焼土・灰を囲繞するように選択的に配置され、シカの頭骨由来骨もよくそれに重複しているようにみえる。動物の送り儀礼に関して、貝殻殻頂部の選択的取扱いという点も今後考慮されるべきであろう。

引用文献

大泰司紀之 1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡時期査定法」『考古学と自然科学』 13, 51-73

大泰司紀之 1994『骨格標本作成法』 北海道大学図書刊行会

山崎　健 2016「ニホンジカの骨端癒合時期」『動物考古学』33, 35-48

Perdue, J. R. 1983
Epiphyseal closure in white-tailed deer. *Journal of Wildlife Management* 47(4), 1207-1213.

Carden, R. F. and Hayden, T. J. 2002
Epiphyseal Fusion in the Postcranial Skeleton as an Indicator of Age at Death of European Fallow Deer(*Dama dama dama*, Linnaeus, 1758)
9th ICAZ Conference, Durham 2002
Recent Advance in Ageing and Sexing Animal Bones, 227-236 Oxbow Books

表1-1　ハンドピック法動物遺存体同定一覧表

小臼歯:pmは乳臼歯, PMは永久歯を示す。

時期 遺構種別	遺構名	層位	骨No.	出土動物	部位	出土部位	L/R	数量	備考
中世アイヌ文化期 遺物集中区	ⅢB-01	ⅢbU	**19-1**	**シカ**	**下顎骨**	**pm1-pm3, M1・M2・M3 (萌出中)**	**R**	**1**	**未萌出永久歯PM2・PM3 あり W.I.M1:5,M2:6**
			19-2	シカ	側頭骨	岩様部	-	1	
			20	**シカ**	**脛骨**	**近位骨 幹前面**	**L**	**1**	**脛骨粗面癒合完了 直前**
			21	シカ	後頭骨	底部	-	1	横走するエグリ状 カット4条
			22	**シカ**	**上腕骨**	**遠位端**	**R**	**1**	**外側上顆稜にカット1条 内側上顆未癒合 外側上顆癒合完了直前**
			23	シカ	脛骨	遠位端	R	1	
			24	シカ	後頭骨	後頭顆・ 頸静脈突起	-	1	後頭骨底部にエグリ状 カット2条 ラムダ縫合未癒合　蝶形 骨体・後頭骨底部未癒合
			25	シカ	上腕骨	遠位端	R	1	外側上顆稜に複数の短い カット 滑車に複数の噛痕 内側上顆癒合完了直前
			26	シカ	橈骨	近位端	R	1	
			27-1	シカ	後頭骨	後頭顆		3	
			27-2	シカ	下顎切歯	第1切歯	R	1	W.I.Ⅱ
			28-1	シカ	踵骨	載距突起・踵 骨隆起を欠く	R	1	外側に横方向の浅い カット1条
			28-2	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			29	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			30	シカ	中手骨	骨幹背側	-	1	背側全面を加工した 中柄？
			31	シカ	中節骨	完形	-	1	
			32	哺乳綱 sp.	長管骨	骨幹破片	-	1	
			33	シカ	中手・ 中足骨	骨幹掌(底) 側一部	-	1	
			34	シカ	中手・ 中足骨	骨幹掌(底) 側一部	-	1	
			35	**シカ**	**脛骨**	**遠位端**	**R**	**1**	**内果・外果・ラセン癒合 完了直後**
			36	シカ	踵骨	載距突起以 下を欠く	R	1	
			37	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			38	シカ	末節骨	ほぼ完形	-	1	
			39	哺乳綱 sp.	長管骨	骨幹破片	-	1	
			40	哺乳綱 sp.	長管骨	骨幹破片	-	1	細いカット数条
			41	シカ	尺骨	肘突起・ 滑車切痕	R	1	
			42	シカ	中節骨	近位端	-	1	細片化
			43-1	シカ	下顎臼歯	M2	R	1	W.I.M2:5
			43-2	シカ	下顎臼歯	歯冠破片	-	4	
			44	シカ	中手骨	骨幹背側	-	1	背側全面を加工した 中柄？
			45	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			46	シカ	下顎骨 ・臼歯	PM1・PM2	L	1	
			47	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			48-1	シカ	上顎臼歯	PM1－PM3	R	3	
			48-2	シカ	上顎骨	破片	-	7	
			49	シカ	下顎臼歯	PM3	R	1	歯冠摩耗なし
			50	シカ	果骨	完形	R	1	
			51	シカ	上顎臼歯	M2	L	1	
			52-1	シカ	下顎骨	歯槽破片	-	1	
			52-2	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			53	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	2	
			54-1	シカ	大腿骨？	遠位端大腿 骨滑車？	L？	1	
			54-2	シカ	大腿骨？	近位端大腿 骨頭？	？	1	
			54-3	シカ	中節骨	近位端	-	1	
			54-4	シカ	尺側 手根骨	ほぼ完形	R	1	
			55	シカ	上顎臼歯	M2	R	1	
			56	シカ	上顎臼歯	M3	R	1	W.I.M3:7
			57	シカ	中手骨	骨幹背側	-	1	背側全面を加工した 中柄？
			58	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	4	
			59-1	シカ	下顎臼歯	PM1・PM2	R	1	
			59-2	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			60	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			61	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			62	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			63	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			64	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			65	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			66-1	哺乳綱 sp.	肋骨	骨幹破片	-	1	エグリ状カットによる切断
			66-2	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			67-1	シカ	上顎臼歯	PM3	R	1	
			67-2	シカ	上顎臼歯	M3	L	1	
			67-3	シカ	距骨	ほぼ完形	L	1	風化著しい
			67-4	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	3	
			68	シカ	第2・3 手根骨	完形	L	1	
			69	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	4	
			70	シカ	下顎骨	槽間縁から 下顎間 結合部	R	1	
			71	シカ	上顎臼歯	M1	L	1	摩耗著しい 72と同一個体
			72	シカ	上顎臼歯	PM3	L	1	摩耗著しい 71と同一個体
			73	シカ	上顎骨	M1付近	L	1	
			74	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			75	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	3	
			76	シカ	側頭骨	鼓室部	L	2	
			77	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			78	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	3	
			79-1	シカ	胸椎	第2胸椎 椎体	-	1	
			79-2	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			80	シカ	下顎臼歯	M2	L	1	W.I.M2:6
			81-1	**シカ**	**後頭骨**	**-**	**-**	**1**	**ラムダ縫合未癒合**
			81-2	シカ	後頭骨	底部	-	1	
			81-3	シカ	後頭骨	頚静脈突起	R	1	
			81-4	シカ	犬歯	歯冠	L	1	
			81-5	シカ	頭蓋	破片	-	6	
			81-6	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	4	
			82	シカ	肋骨	肋骨体破片	-	2	
			83	シカ	肋骨	肋骨体破片	-	1	
			84	シカ	寛骨	寛骨臼、 坐骨板及び そこに 向かう枝	R	1	寛骨臼下に短いカット数 条　小型の個体 坐骨板に粗面残 寛骨臼未融合？
			85	シカ	寛骨	寛骨臼から 恥骨・坐骨枝	R	1	小型の個体　全体に粗面 残　寛骨臼未癒合 恥骨結合未癒合
			86	シカ	寛骨	寛骨臼、坐 骨板及びそ こに向かう枝	R	1	坐骨板に粗面残
			87-1	シカ	下顎骨	槽間縁から 下顎間 結合部	R	1	
			87-2	シカ	下顎臼歯	PM1	R	1	

表1-2 ハンドピック法動物遺存体同定一覧表

小臼歯:pmは乳臼歯, PMは永久歯を示す。

時期 遺構種別	遺構名	層位	骨No.	出土動物	部位	出土部位	L/R	数量	備考
中世アイヌ文化期 遺物集中区	ⅢB-01	ⅢbU	88	シカ	尺側手根骨	完形	L	1	
			89-1	シカ	末節骨	完形	-	1	
			89-2	シカ	側頭骨	岩様部	-	1	
			90	シカ	脛骨	骨幹外側破片？	-	1	
			91	シカ	腰椎	椎体	-	1	椎頭・椎窩未癒合
			92	シカ	肋骨	肋骨体破片	-	1	
			93-1	シカ	後頭骨	頚静脈突起	L	1	
			93-2	**シカ**	**中足骨**	**遠位端**	**-**	**1**	**遠位滑車未癒合**
			93-3	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	7	
			94-1	シカ	後頭骨	頚静脈突起	R	1	
			94-2	シカ	頭蓋	後頭骨破片	-	4	
			94-3	シカ	上腕骨	近位骨幹内側	L	1	
			94-4	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	9	
			95	シカ	肋骨	肋骨体破片	-	1	
			96	シカ	類椎	第3頚椎椎体	-	1	
			97	シカ	下顎骨？	-	-	1	
			98	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			99	シカ	第四手根骨	完形	L	1	
			100-1	シカ	後頭骨	-	-	1	ラムダ縫合未癒合
			100-2	シカ	後頭骨	頚静脈突起	L	1	
			100-3	シカ	側頭骨	岩様部	-	1	
			100-4	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	5	
			101	シカ	後頭骨	頚静脈突起	R	1	
			102-1	シカ	第五頚椎	後関節突起	-	1	
			102-2	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			102-3	哺乳綱 sp.	長管骨	-	-	1	細かいカット数条
			103	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			104	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	4	
			105-1	シカ	上顎骨 上顎臼歯	PM1・PM2	L	1	
			105-2	シカ	下顎切歯	第2・3切歯	L	2	
			106	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			107	シカ	下顎切歯	第1切歯	L	1	W.I.Ⅱ
			108	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			109	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			110	哺乳綱 sp.	長管骨	-	-	1	細かいカット数条
			111	シカ	胸椎	棘突起	-	1	
			112	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			113	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			114	シカ？	踵骨？	-	L？	1	
			115	哺乳綱 sp.	長管骨	-	-	1	
			116	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
			117	哺乳綱 sp.	長管骨	-	-	1	

時期 遺構種別	遺構名	層位	骨No.	出土動物	部位	出土部位	L/R	数量	備考
中世アイヌ文化期 遺物集中区	ⅢB-01 拡張立会	ⅢbU	118	シカ	大腿骨	遠位骨幹	R	1	遠位端未癒合
			119	シカ	中手骨	近位骨幹背側	R	1	
			120-1	シカ	中節骨	遠位端	-	1	
			120-2	シカ	側頭骨	岩様部	-	1	
			120-3	哺乳綱 non det.	長管骨	-	-	3	
			120-4	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			121	シカ	橈骨	遠位端	R	1	
			122	シカ	大腿骨	遠位端外側顆	R	1	
			123	シカ	大腿骨	遠位端内側顆	R	1	
			124	哺乳綱 sp.	長管骨	-	-	1	
			125	シカ	大腿骨	顆上窩	R	1	118と同一個体
			126-1	シカ？	角？	角幹？破片？	-	1	
			126-2	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	5	
			127	哺乳綱 sp.	長管骨	-	-	1	
	ⅢB-01		128	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	ⅢSHB-01貝殻付着
	ⅢB-01 東側撹乱	KR	129	シカ	下顎臼歯	pm3	L	1	
			130	シカ	下顎臼歯	M1	R	1	W.I.M1:2
	ⅢB-01 西側撹乱		131	シカ	上顎臼歯	M2	L	1	
			132	シカ	腰椎	乳頭関節突起	L	1	
			133	哺乳綱 sp.	部位不明	-	-	1	
中世アイヌ文化期 遺物集中区	ⅢB-02	ⅢbU	1	シカ	臼歯	歯冠破片	-	19	
			2	シカ	臼歯	歯冠破片	-	27	
			3	シカ	臼歯	歯冠破片	-	5	
			4	シカ	臼歯	歯冠破片	-	8	
			5	哺乳綱 spp.	部位不明	-	-	2	
			8	哺乳綱 non det.	部位不明	-	-	3	
			9-1	シカ	下顎臼歯	PM3－M3	R	4	
			9-2	シカ	臼歯	歯冠破片	-	11	
			10	シカ？	角？	袋角？	-	1	
			11・12	シカ	臼歯	歯冠破片	-	11	
			13	シカ	臼歯	歯冠破片	-	12	
			14	シカ	臼歯	歯冠破片	-	3	
			15	シカ	下顎臼歯	PM3－M3	R	4	
※	ⅢB-03	ⅢbL	16-1	シカ	下顎臼歯	M1－M3	R	3	
			16-2	シカ	臼歯	歯冠破片	-	3	
			17	シカ	臼歯	歯冠破片	-	4	
※※	ⅢSB-01	ⅢbU	18	シカ	臼歯	歯冠破片	-	11	

※擦文文化期遺物集中区

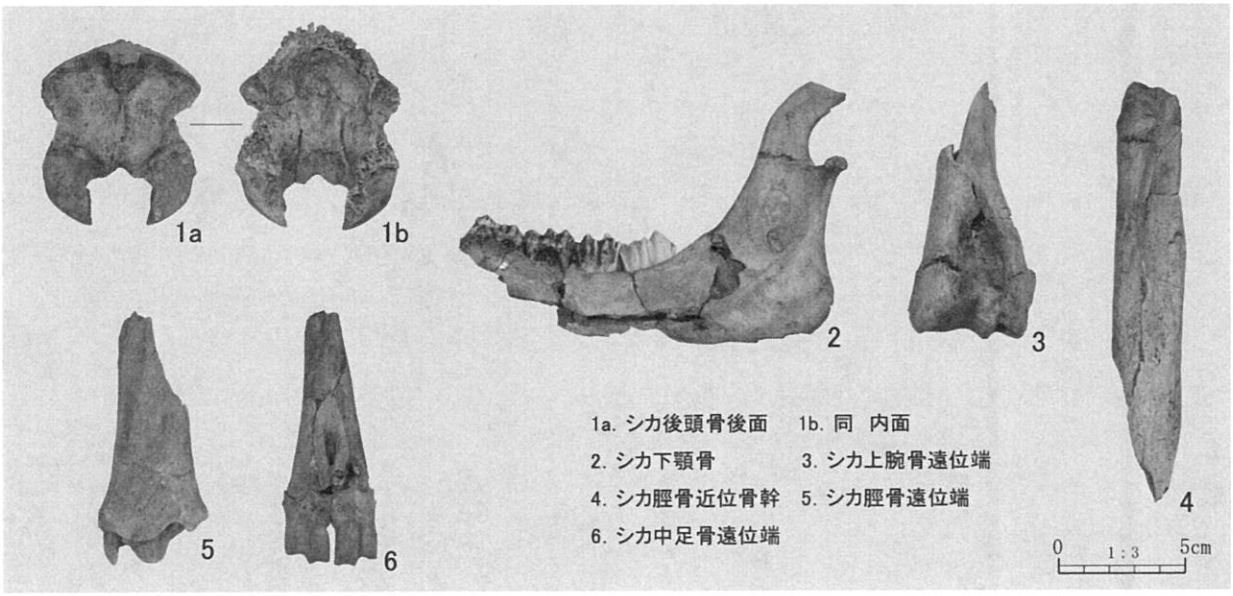
※※アイヌ文化期礫集中

:写真図版掲載資料

表2 フローテーション法動物遺存体同定一覧表

時期 遺構種別	遺構名	層位	サンプリング場所	出土動物	部位	L/R	数量	被熱	備考
中世アイヌ文化期焼土	ⅢF-01	ⅢbU	燃焼面	哺乳綱 non det.	部位不明	-	77	○	
				サケ属 sp.	椎骨	-	1	○	
続縄文文化期前葉焼土	ⅢF-02	Ⅲc	燃焼面	サケ属 non det.	椎骨	-	48	○	
				魚綱 non det.	棘・鰭	-	7	○	
				魚綱 non det.	部位不明	-	32	○	
	ⅢF-03	Ⅲc	燃焼面	哺乳綱 non det.	部位不明	-	28	×	
				サケ属 non det.	椎骨	-	104	○	
				魚綱 non det.	棘・鰭	-	40	○	
				魚綱 non det.	部位不明	-	14	○	
中世アイヌ文化期遺物集中区/貝殻集中	ⅢB-01/ⅢSHB-01	ⅢbU	上面清掃土	シカ	臼歯 歯冠破片	-	27	×	
				ネズミ科 sp.	下顎切歯	R	1	×	
				ネズミ科 non det.	臼歯 歯冠破片	-	5	×	
				ネズミ科？ sp.	上腕骨？	R？	1	×	
			下位 ⅢAS-01検出清掃土	哺乳綱 non det.	部位不明	-	121	×	
				哺乳綱 non det.	部位不明	-	82	○	
			貝殻取上げ時清掃土	サケ属 non det.	椎骨	-	17	○	
			上面清掃土	コイ科 sp.	椎骨	-	1	○	土量未計量処理
			貝殻付着土	ウグイ属 non det.	咽頭歯	-	3	○	
			統合残土出土	コイ科 sp.	咽頭骨	R	1	○	
				コイ科 sp.	咽頭骨	L	1	○	
				魚綱 spp.	椎骨	-	2	○	
				魚綱 non det.	棘・鰭	-	23	○	
				魚綱 non det.	部位不明	-	6	○	
			壁面細片	哺乳綱 spp.	長管骨？	-	2	○	骨角器？
			南側壁面拡張立会区域 獣骨付着土壌	哺乳綱 non det.	部位不明	-	71	×	
			統合残土出土	シカ？	角？ 角幹 破片？	-	1	○	
				不明 non det.	部位不明	-	3	○	
				哺乳綱 spp.	部位不明	-	2	○	小型哺乳類？
				魚綱 sp.	部位不明	-	1	○	
中世アイヌ文化期遺物集中区/灰集中	ⅢB-01/ⅢAS-01	ⅢbU	灰層サンプル	シカ	臼歯 歯冠破片	-	1	×	
				哺乳綱 non det.	部位不明	-	115	×	
				哺乳綱 non det.	部位不明	-	30	○	
				サケ属 non det.	椎骨	-	4	○	
				サケ属 sp.	椎骨	-	1	○	
				コイ科 spp.	椎骨	-	2	○	
				ウグイ属 spp.	咽頭骨 咽頭歯	-	2	○	
				魚綱 non det.	棘・鰭	-	3	○	
				不明 non det.	部位不明	-	3	○	
中世アイヌ文化期遺物集中区	ⅢB-01（東側）	ⅢbU	獣骨付着土壌	哺乳綱 non det.	部位不明	-	57	×	
	ⅢB-01（中央）		獣骨付着土壌	哺乳綱 non det.	部位不明	-	70	×	
				哺乳綱 non det.	部位不明	-	8	○	
				サケ属 sp.	椎骨	-	1	○	
				魚綱 non det.	部位不明	-	6	○	
				不明 non det.	部位不明	-	3	○	
	ⅢB-01（西側）		獣骨付着土壌	シカ？	臼歯？ 歯冠破片？	-	1	×	
				哺乳綱 non det.	部位不明	-	135	×	
	ⅢB-01	ⅢbU	ホタテガイ下の土壌	哺乳綱 non det.	部位不明	-	13	×	擦文期混入の可能性あり
		攪乱	壁面攪乱SH獣骨付着土壌	哺乳綱 non det.	部位不明	-	12	×	
中世アイヌ文化期遺物集中区	ⅢB-02	ⅢbU	獣骨付着土壌	シカ	臼歯 歯冠破片	-	64	×	
				哺乳綱 non det.	部位不明	-	21	×	
				哺乳綱 non det.	部位不明	-	11	○	
				サケ科 sp.	椎骨	-	1	○	
				サケ科 sp.	椎骨	-	1	○	
				魚綱 spp.	部位不明	-	2	○	
擦文文化期後期遺物集中区	ⅢB-03	ⅢbL	獣骨付着土壌	シカ	臼歯 歯冠破片	-	5	×	

図版1



第3節 厚真町上厚真遺跡出土の貝類

乾 哲也・黒住耐二[※1]・高橋 理[※2]・佐藤一夫[※3]

今回の発掘調査で検出した 16 世紀代後半と推定される中世アイヌ文化期末期の送り場跡ⅢB-01 を構成する、ⅢSHB-01 としたウバガイを主体とする貝殻集中で得た貝類について記す。

1. 試料分析までの経緯

有珠 b テフラ（1663 年降下）より下層の黒色土を 1～2cm ほど被覆した状態で検出したウバガイを主体とする貝殻集中は、送り場跡とされる遺物集中の最上層で検出している。出土状態や取り上げ方法については第Ⅱ章第 3 節を参照されたい。

一次整理については、ブロックごとに取り上げた土壌付着の貝殻片を乾燥させたのち、乾いたブラシや竹ヘラ、竹串を用いて付着土壌の除去作業を慎重に行った。この作業で排出した土壌も回収し、フローテーション処理を行っている。

ホタテガイは、ほぼ完形を保った出土状態であったものの腹縁部が脆弱であることから、酢酸ビニル系ボンドで硬化処理とクリーニング作業を行い、整理段階での破損には特に注意した。

最も出土量が多いウバガイの二次整理は殻頂部とそれ以外の破片に分類し、殻頂部は右殻と左殻に細分した。フローテーション回収試料の選別作業では、微小貝や貝殻片、小礫・細礫等を検出した。その他の貝類としてカワシンジュガイ、サラガイやヒメエゾボラ、陸産巻貝なども含まれていることが判明し、出土点数と重量などの諸属性の一覧表を作成した（表 1）。

クリーニング作業やフローテーション試料の抽出は、乾の指導のもと整理作業員が行い、貝種の分類や出土したウバガイの年齢推定作業は佐藤所蔵の現生標本を元に乾が行った。同定報告書作成にあたっても佐藤、黒住および高橋と協議を進めながら乾が行った。

2. 出土資料

ⅢB-01 送り場跡からは巻貝やカサガイの腹足綱 6 種類、二枚貝綱 4 種類が出土している。これらの貝殻片は、海岸波浪により摩滅したものは 1 点のみであったことから、生体の貝を採捕したものと考えられる。

軟体動物門

腹足綱

- タマキビ *Littorina brevicula*
- ヒメエゾボラ *Neptunea arthritica*
- ユキノカサ *Niveotectura pallida*
- パツラマイマイ *Discus pauper*
- ヤマボタル *Cionella lubrica*
- ケシガイ属の一種 *Carychium* sp.

二枚貝綱

- ウバガイ *Spisula sachalinensis*
- サラガイ *Megangulus venulosa*
- ホタテガイ *Patinopecten yessoensis*
- カワシンジュガイ *Margarieifera margaritifera*

上記の構成種に関する点数や重量は表1のとおりで、ウバガイが重量比にして約96%を占め、貝殻集中ⅢSHB-01はウバガイ集中と呼称しても支障ないものと思われる。

ウバガイ以外の食用貝類では、ホタテガイ殻長 16.1cm、タマキビは残存殻高 20mm、ユキノカサは殻長 4.2mm 程度であり、ヒメエゾボラは螺塔体層部破片の湾曲から殻長 60mm 程度と推定した。カワシンジュガイは殻皮小片のみの出土であり殻長等のサイズ推定はしていない。他の種は破片のみの出土で、いずれの種でも被熱痕跡は認められない。

これらの貝類を生息域別に分類すると、海水域の砂泥～礫底の水深 30m以内の潮間帯～浅海に棲息する二枚貝が主体を占め、苫小牧市や厚真町の沿岸で産出する貝類である。そのうちウバガイが重量比で 95.81%と圧倒的に多い。このほか 1.5%に過ぎないが、ヒメエゾボラなどの岩礁性の貝類も出土している。厚真町の海浜には岩礁が発達していないことから、他の地域から持ち込まれたものである。参考までに上厚真遺跡から現在の海岸線で最も近い岩礁帯は、南東方向へ直線で約 22.5km の位置にある日高町シノダイ岬で、西は白老町虎杖浜アヨロ川河口付近の約 57km の位置にあり、前者では、17 世紀後葉のシノタイⅠ－A遺跡でウバガイやヒメエゾボラを主体とする貝層の検出例がある（扇谷 1979）。

淡水域の渓流砂礫底に棲息するカワシンジュガイは、これまでも厚真川上流域や中流域の遺跡から数点ずつの出土例があり、近隣の小河川にも棲息している可能性はあるものの、現生種の調査報告例がないため確証はなく、入手ルートは不明である。

パツラマイマイ、ヤマボタル、ケシガイ属は小型・微小な陸産貝類（カタツムリ）で、当然食用ではない。この3種は林縁に生息し、これまで想定されてきたように送り場の周囲は木立ちに囲まれた環境だったことを示している。

3. ウバガイ集中について

ⅢB-01 送り場跡の最上層に検出したⅢSHB-01 の主体を占めるウバガイについて分析を試みたので報告する。

出土したウバガイは整理作業中の破損を除き全て破砕された貝殻片で総重量 3012.59ｇであった。殻頂部は 77 点で、右殻 35 点、左殻 42 点で、最小個体数は 35 個体であった（表 1）。これらの貝殻片には磨滅したものは破片 1 点のみであり、またヤスなどの刺突痕も確認できないこと、さらにウバガイと共に円磨度が進んだ粒径 1～3mm の小礫が多量に出土していることから砂浜海浜に波浪で打ち上げられた生体を採捕している可能性が考えられる※4。現在でも強い波浪が発生した翌日には、浜厚真や弁天地区などの海浜に大小様々なウバガイが多数打ち上げられており、現在と同様に採捕したものと思われる。

出土したウバガイのサイズについては、黒住耐二らによる出土バカガイの弾帯受幅からの殻長復元方法（黒住ほか 2007）を参考とし、出土資料のうち遺存状態が良い殻頂部の弾帯受の長軸（写真 1･2）と現生標本やウバガイの成長に関する各種論文（杉浦ほか 2017、吉村･道林 2021）の殻長数値を比較して復元を試みた（表 3）。年齢と殻長の関係は青森県八戸市沖のウバガイ計測値において満年齢 1 歳で殻長が 31.3mm を測り、満 5 歳で 82mm、満 7 歳で 90.6mm の計測値が公表されている（杉浦ほか 2017）※5。このデータを元に佐藤一夫所蔵の苫小牧市弁天浜漂着のウバガイ現生標本の年齢を査定し、さらに殻頂部の弾帯受長軸を計測し、現生標本における

年齢・サイズと弾帯受幅の関連性についての比較表を作成した（表 4）。この計測結果をもとに出土資料の殻頂部弾帯受幅との比較し、ウバガイの年齢や殻長の推定数値を導き出した（表 5）。

分析対象は出土資料の右殻 14 点、左殻 19 点の計 33 点で、3 歳未満の個体（推定殻長 7cm 程度以下）・4 歳（推定殻長 8cm 程度）・6 歳（推定殻長 9cm 程度）がそれぞれ 1 個体ずつ確認され、8 歳以上（推定殻長 10cm 以上）が 30 点（90%）と圧倒的主体を占めた。現生標本では殻長約 10cm 以上の大型の個体群となる（表 4）。このことは、当時の採捕段階でも、現在の海浜に打ち上げられた状況と同様に大型の個体を意識した採捕であった可能性が高いことを示している。なお、ウバガイと共に出土している細礫（全重量 122.7g・うち長軸 2mm 以上 1,204 点）は海浜で採捕されたウバガイに付着していた可能性もあり、ウバガイが繊維の織り目の細かい植物質の網袋あるいは革袋に入れて遺跡内に持ち込まれている可能性がある。

このほか、高橋の観察により出土ウバガイの貝殻内面には、幅 1mm 以下の極めて浅い複数の線条痕が認められる破片も 19 点ほど出土している（本文写真図版 9-4・5）。多くは殻頂方向に直線状に認められ、線条痕には土壌が付着していることから、整理クリーニング段階の新たな傷ではない。生体のウバガイの捌き方としては、貝殻後方の水管付近の噛み合わせがやや開いている部分からナイフを差し込み、閉殻筋（貝柱）を殻頂方向にナイフを動かし切断し、貝殻を開く。この際、肉柱を貝殻に沿って深く除去する際に、ナイフなどの金属利器の先端部が貝殻内側の表面に接触するが、ウバガイの貝殻は硬質であるため、ナイフによる解体痕はほぼ目視できないほどの浅い傷となる。出土した貝殻にみられる線条痕の多くは内面中央付近であり、肉柱が付着する前後の閉殻筋痕には残っていない。

これらの状況をふまえると、現代のウバガイの捌き方法と同様に、遺跡が形成された当時、生体のウバガイを上厚真遺跡内に持ち込み、刀子などの金属利器により肉柱を切断切除し、捌いたものと推定できる。

4. まとめ

北海道内のアイヌ文化期の動物遺存体等が出土した遺跡を集成した木村英明の論考（木村 2003）を参考にするとウバガイが多産する遺跡として、苫小牧市弁天貝塚、日高町シノタイ遺跡群、新ひだか町東静内チャシ貝塚の胆振東部から日高中西部にかけてのほか、天塩川河口遺跡の日本海北部、斜里町クシンコタン貝塚・ガツタンコ貝塚・タンネウシ貝塚Ａ地点のオホーツク沿岸域の知床半島基部がある。いずれも 15 世紀以降から 19 世紀中葉にかけてのアイヌ民族が残した貝塚や送り儀礼場跡で 13 地点がある。それぞれの遺跡形成地点の環境は、近隣に砂浜・砂泥底海岸に隣接しており、日常の漁撈採集活動で採捕されたウバガイと思われる。

これらのうち、上厚真遺跡から最も近位置にある苫小牧市弁天貝塚は幕末期から明治時代初頭にかけて形成された遺跡で、苫小牧や厚真などの近隣に居住するアイヌ民族が和人経営のイワシ漁漁場労働に従事した際に残した貝塚（佐藤ほか 1989）とされている[※6]。形成時期は上厚真遺跡より約 300 年程下るものの、ほぼ同じ自然環境下でアイヌ民族の伝統文化を担った人々が形成した遺跡といえる。

弁天貝塚の貝類を報告した赤松守雄の分析報告によると、出土貝類は不明も含め 3,148 点が出土し、ウバガイが 62.7%を占め、エゾタマキガイ 11.72%、ホタテガイ 8.96%を占め、続い

て淡水域のカワシンジュガイが 8.3%、オオタニシ 3.02%などとなり、サラガイは 0.76%であった（赤松 1989）。一方、厚真町を含む胆振東部や千歳市南部における縄文時代早期から前期にかけての海進期には 9 ヵ所の貝塚が知られているが、これらはヤマトシジミやアサリ、ウネナシトマヤガイなどの内湾性砂泥底や干潟汽水域に棲息する貝類が圧倒的主体（佐藤 1976、高橋 2002）を占めており、中世アイヌ文化期の上厚真遺跡や幕末から明治初頭の弁天貝塚の構成主体貝類と大きく異なっている。以上の出土貝類組成の相違は、上厚真遺跡や弁天貝塚が形成された当時の海岸・海底環境を反映していることを示すものであり、現在と同様の外洋に面した砂泥底環境であったと推定できる。

上厚真遺跡と弁天貝塚とでは時間的に開きがあるが、ともにアイヌ民族が残した遺跡であり、当時の海岸環境は汀線に僅かな変動が想定されるものの同じ砂浜海岸であったと思われる。ウバガイは現代社会においても有用可食の貝類の中でも非常に消費量が多く、苫小牧港の水揚げ量は令和 2 年度で約 800 t であり、全国漁獲量の 16%の全国一を誇っており、「苫小牧市の貝」として「ホッキ貝」と親しまれている。上厚真遺跡のアイヌ民族も可食貝類のウバガイを積極的に採捕し、逆に同じ生息環境であるサラガイは消極的採捕に留まるといえる。

ウバガイ集中の下層からはエゾシカ獣骨集中やこれに伴う灰集中、刀剣類などの鉄製品、クルミ殻やニワトコ属などの炭化・酸化種子類が出土しており、これらの連続した行為の最終段階に残された遺物である。

遺物の多種多様な構成で一ヵ所にまとめられた出土状態は、町内でも上幌内モイ遺跡（町教委 2007）やニタップナイ遺跡（町教委 2010）でも検出例があり、アイヌ民族の精神文化で全ての事物に宿るカムイ（神）を人間界からカムイの世界への霊送りとしての物や灰の送り儀礼の痕跡と考えられている。上厚真遺跡の貝殻集中を最上層に伴う遺物集中ⅢB-01 はこれらと同様の性格と考えている。刀剣類の金属製品や焼土・灰、獣骨、種子、貝殻の遺物構成における複合的な様相は、村上貞助、村上島之允、間宮林蔵らにより 1794 年（寛政 6 年）に完成した『蝦夷生計圖説』「ムルクタウシウンカムイ之圖」（河野・谷本解説 1990）を想起させる[※7]。なおⅢB-01 では、シカ頭骨 3 個体のほかウバガイの殻頂部も 77 点出土しており（表 6）、貝送り儀礼における殻頂部の意識の可能性がある（第Ⅴ章第 2 節参照）ものの、積極的に断定はできなかった。これまでのアイヌ文化期の送り儀礼場跡の検出例においても、殻頂部の分布傾向などに留意された事例はない[※8]ことから、今後の出土例に注意していきたい。出土層位や年代測定結果から絶対年代が 16 世紀後半と推定できる中世末期のアイヌ民族の送り儀礼跡が検出された意義は大きいといえよう。

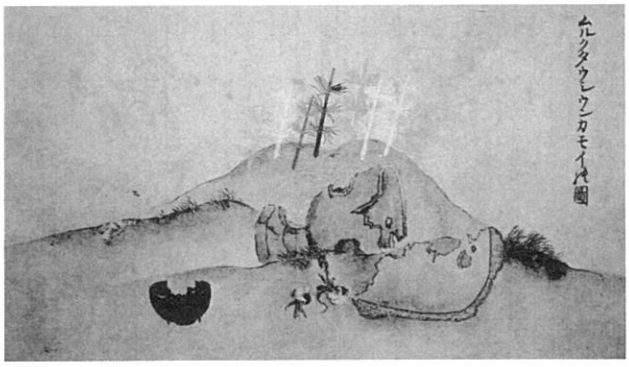


図 1 蝦夷生計圖説 ムルクタウシウンカモイ之圖
（村上貞助ほか 1794・河野ほか解説 1990 より）
粟稗収穫後の糠にイナウ（木幣）をたて、鉄鍋や臼、作物の蕪などが記され、カムイ（神）への尊い儀礼の場として紹介されている。

※1　千葉県立中央博物館 資料管理研究科 上席研究員

※2　札幌大学非常勤講師

※3　元苫小牧市博物館長

※4　人工構築物が無い現在の厚真町入鹿別川河口約 500m 西側の砂浜海浜の小礫を回収し、上厚真遺跡出土の小礫と比較したが、石材種別の構成比率の傾向や円磨度など、ほぼ同じ傾向を確認できている。

※5　杉浦ほか 2017 での年齢と殻長比較データは、現在の地理的な水温の相違がある。また上厚真遺跡のウバガイ集中ⅢSHB-01 が形成された 16 世紀後半の海水温との差異も想定され、厳密な同一環境下での比較には至らない。

※6　弁天貝塚では、送り儀礼の存在を積極的に示す痕跡、出土状態は確認できていない。

※7　上厚真遺跡ⅢB-01 の送り場跡では、イナウを差し建て祀った小柱穴などの痕跡は確認できていない。

※8　伊達市教育委員会 永谷幸人氏、国立アイヌ民族博物館 宮地 鼓氏のご教示による。

引用・参考文献

青野 友哉　2008　「北海道における貝塚文化の消長　縄文時代～近代の生業と祭祀」『地域と文化の考古学Ⅱ』明治大学文学部考古学研究室

赤松 守雄　1989　「第 6 章　第 6 節　弁天貝塚出土の貝類について」『弁天貝塚Ⅲ』 苫小牧市教育委員会

秋元 義元ほか　1988　「ウバガイの生態特性と生残りの環境について」『水産土木』24 №2 日本水産工学会

厚真町教育委員会　2007　『上幌内モイ遺跡(2)』

2010　『幌内 5 遺跡(1)・富里 2 遺跡・ニタップナイ遺跡(2)』

扇谷 昌康　1979　「第 8 章 シノタイ遺跡」『日高門別の先史遺跡』門別町教育委員会

木村 英明　2003　「第 8 章 考察　2.遺跡からみる生産と祈り」『アオシマナイ遺跡』 小清水町教育委員会

黒住 耐二ほか　2007　「港区芝の雑魚場跡鹿島神社境内地点から得られた動物遺体」『研究紀要』9　港区立港郷土資料館

黒住 耐二・大作 晃一　2021　『くらべてわかる貝類』 山と渓谷社

河野 本道・谷澤 尚一解説　1990　『蝦夷生計圖説（復刻版）』 北海道出版企画センター

佐藤 一夫　1976　『植苗貝塚』　苫小牧市教育委員会

佐藤 一夫ほか　1989　『弁天貝塚Ⅲ』　苫小牧市教育委員会

須川 人志・川村 要　1985　「三沢漁港内に標識放流したホッキガイの成長」『青森県水産増殖センター事業報告』14　青森県水産増殖センター

杉浦 大介ほか　2017　「青森県太平洋沿岸におけるウバガイ（ホッキガイ）の年齢と成長」『青森県産業技術センター水産部門研究報告』10　青森県産業技術センター水産総合研究所

高橋 理　2002　「第 7 章 自然科学的研究　第 3 節 静川 22 遺跡出土貝類」『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』苫小牧市教育委員会

吉村 圭三・道林 宣敬　2021　「弾帯受けおよび主歯の透過光観察によるウバガイの簡易年齢査定手法」『北海道水産試験場研究報告』99　北海道立総合研究機構水産研究本部

表1　出土貝類点数・重量一覧表

	名　称	点数/重量										重量小計	重量比率
		右殻(点数/重量)		左殻(点数/重量)		螺塔		破片		殻皮			
腹足網	タマキビ	−	−	−	−	1点	1.22g	−	−	−	−	1.22g	0.04%
	ヒメエゾボラ	−	−	−	−	−	−	8点	3.02g	−	−	3.02g	0.10%
	ユキノカサ	−	−	−	−	5点	0.06g	−	−	−	−	0.06g	0.00%
	パツラマイマイ	−	−	−	−	140点	0.09g	−	−	−	−	0.09g	0.00%
	ヤマボタル	−	−	−	−	1点	0.01g	−	−	−	−	0.01g	0.00%
	ケシガイ属	−	−	−	−	3点	0.01g	−	−	−	−	0.01g	0.00%
二枚貝網	ウバガイ	35点	158.64g	42点	135.08g	−	−	+	2,592.50g	−	−	2,886.22g	95.80%
	サラガイ	1点	0.83g	−	−	−	−	−	−	−	−	0.83g	0.03%
	ホタテガイ	1点	120.66g	−	−	−	−	12点	0.26g	−	−	120.92g	4.01%
	カワシンジュガイ	−	−	−	−	−	−	10点	0.01g	4点	0.21g	0.22g	0.01%
	合　計											3012.6g	100.00%

※ ＋:破片多数

表2　出土貝類生息環境一覧表

生息域	生息環境		種別	出土重量	重量比	
海水域	岩礁	潮間帯～水深10m	ヒメエゾボラ	3.02g	0.10%	0.15%
		潮間帯	タマキビ	1.22g	0.05%	
		潮間帯～水深10m	ユキノカサ	0.06g	0.00%	
	砂泥～礫底	潮間帯～水深30m	ウバガイ	2,886.22g	95.80%	99.85%
		潮間帯～水深10m	サラガイ	0.83g	0.03%	
		潮間帯～水深30m	ホタテガイ	120.92g	4.01%	
淡水域	砂礫底	渓流	カワシンジュガイ	0.22g	0.00%	0.00%
陸　棲		森林性	パツラマイマイ	0.09g	0.00%	0.00%
		森林性	ヤマボタル	0.01g	0.00%	
		森林性	ケシガイ属	0.01g	0.00%	
合　計				3012.6g		100.00%

表3　現生個体年齢別殻長値

年齢	殻長(mm)	年成長数値	
1歳	31.3mm	0→1歳　＋ 31.3mm	12ヵ月
2歳	50.9mm	1→2歳　＋ 19.6mm	12ヵ月
3歳	64.9mm	2→3歳　＋ 14.0mm	12ヵ月
4歳	74.9mm	3→4歳　＋ 10.0mm	12ヵ月
5歳	82.0mm	4→5歳　＋ 7.1mm	12ヵ月
6歳	87.0mm	5→6歳　＋ 5.0mm	12ヵ月
7歳	90.6mm	6→7歳　＋ 3.6mm	12ヵ月
8歳	93.2mm	7→8歳　＋ 2.6mm	12ヵ月

(杉浦ほか2017 八戸市周辺個体)

表4　現生標本年齢別殻長算出表

No.	殻長	満年齢	満年齢加算長	加算月数	推定年齢	弾帯受 孔長	弾帯受 年齢平均値	年齢別貝殻片殻平均重量
1	79.01mm	4歳	4.11mm	6.9ヵ月	4歳 7ヵ月	8.69mm	8.69mm	20.52g
2	85.32mm	5歳	3.32mm	8.0ヵ月	5歳 8ヵ月	10.11mm	10.27mm	33.61g
3	85.81mm	5歳	3.81mm	9.1ヵ月	5歳 9ヵ月	10.50mm		
4	86.62mm	5歳	4.62mm	11.1ヵ月	5歳 11ヵ月	10.19mm		
5	89.26mm	6歳	2.26mm	7.5ヵ月	6歳 8ヵ月	10.11mm	10.50mm	30.90g
6	89.32mm	6歳	2.32mm	7.7ヵ月	6歳 8ヵ月	10.93mm		
7	90.08mm	6歳	3.08mm	10.3ヵ月	6歳 10ヵ月	10.46mm		
8	90.96mm	7歳	0.36mm	1.7ヵ月	7歳 2ヵ月	10.58mm	10.58mm	34.24g
9	94.06mm	8歳	19.16mm	−	8歳以上	10.62mm	10.62mm以上	62.46g
10	94.48mm	8歳	19.58mm	−	8歳以上	11.95mm		
11	95.24mm	8歳	20.34mm	−	8歳以上	12.49mm		
12	95.75mm	8歳	20.85mm	−	8歳以上	12.61mm		
13	96.36mm	8歳	21.46mm	−	8歳以上	12.12mm		
14	98.77mm	8歳	23.87mm	−	8歳以上	10.82mm		
15	98.79mm	8歳	23.89mm	−	8歳以上	11.97mm		
16	99.28mm	8歳	24.38mm	−	8歳以上	11.36mm		
17	99.84mm	8歳	24.94mm	−	8歳以上	13.73mm		
18	100.54mm	8歳	25.64mm	−	8歳以上	12.74mm		
19	101.17mm	8歳	19.17mm	−	8歳以上	12.83mm		
20	101.34mm	8歳	19.34mm	−	8歳以上	11.87mm		
21	101.94mm	8歳	19.94mm	−	8歳以上	12.39mm		
22	104.37mm	8歳	17.37mm	−	8歳以上	14.57mm		
23	108.27mm	8歳	21.27mm	−	8歳以上	12.76mm		
24	108.66mm	8歳	21.66mm	−	8歳以上	14.71mm		
25	108.92mm	8歳	21.92mm	−	8歳以上	14.42mm		
26	108.94mm	8歳	18.34mm	−	8歳以上	13.27mm		
27	110.76mm	8歳	20.16mm	−	8歳以上	14.73mm		
28	111.12mm	8歳	20.52mm	−	8歳以上	14.48mm		

表5 出土ウバガイ推定年齢算出表

ブロック名	左右殻	弾帯受長	推定年齢	備考
Cブロック	**左殻**	**14.40mm**	**8歳以上**	
Eブロック	**左殻**	**12.57mm**	**8歳以上**	
	右殻	12.65mm	8歳以上	
	右殻	14.40mm	8歳以上	
Gブロック	**左殻**	**13.20mm**	**8歳以上**	
	右殻	13.26mm	8歳以上	
Hブロック	**左殻**	**9.01mm**	**4歳3ヵ月**	
	左殻	**11.28mm**	**8歳以上**	
	左殻	**11.41mm**	**8歳以上**	
	左殻	**11.95mm**	**8歳以上**	
	左殻	**12.63mm**	**8歳以上**	
	左殻	**13.39mm**	**8歳以上**	
	左殻	**14.92mm**	**8歳以上**	
	左殻	**16.92mm**	**8歳以上**	**孔長最大値**
	右殻	6.97mm	3歳未満	孔長最小値
	右殻	10.53mm	6歳5ヵ月	
	右殻	11.83mm	8歳以上	
	右殻	11.95mm	8歳以上	
	右殻	15.39mm	8歳以上	

ブロック名	左右殻	弾帯受長	推定年齢	備考
Jブロック	**左殻**	**12.46mm**	**8歳以上**	
	左殻	**13.13mm**	**8歳以上**	
	左殻	**13.30mm**	**8歳以上**	
	右殻	12.32mm	8歳以上	
Kブロック	右殻	14.24mm	8歳以上	
SH.3	右殻	16.53mm	8歳以上	(単点)
壁面	右殻	16.35mm	8歳以上	
立会	**左殻**	**12.15mm**	**8歳以上**	
	左殻	**13.46mm**	**8歳以上**	
	左殻	**14.30mm**	**8歳以上**	
	左殻	**14.45mm**	**8歳以上**	
	左殻	**16.15mm**	**8歳以上**	
	右殻	14.11mm	8歳以上	
西側撹乱	右殻	15.69mm	8歳以上	
分析対象出土資料構成内訳	左右殻		3歳未満	1点
	左殻	19点	**4歳3ヵ月**	1点
	右殻	14点	6歳5ヵ月	1点
	合計	33点	**8歳以上**	30点

※殻頂部残存資料のうち内靭帯孔長軸が残存している破片を対象。

表6 ⅢSHB-01ウバガイ殻頂部比率

ブロック名	殻頂部点数	殻頂部重量	殻頂以外重量	重量比(殻頂/総破片)		備考
Aブロック	3点	15.40g	69.3g	1.07%	少	
Bブロック	0点	0.00g	14.3g	0.00%	無	
Cブロック	1点	10.97g	83.8g	0.76%	少	
Dブロック	0点	0.00g	31.2g	0.00%	無	
Eブロック	11点	61.52g	383.0g	4.28%	多	点数多
Fブロック	0点	0.00g	79.6g	0.00%	無	破片が多い割に殻頂部なし
Gブロック	4点	15.86g	139.0g	1.10%	少	
Hブロック	13点	64.78g	118.0g	4.50%	多	点数多
Iブロック	0点	0.00g	38.4g	0.00%	無	
Jブロック	6点	13.52g	199.0g	0.94%	少	
Kブロック	3点	20.95g	251.0g	1.46%	少	
Lブロック	0点	0.00g	31.5g	0.00%	無	
総 計	41点	203.00g	1438.1g	14.12%		

※J・Kブロック相当

殻頂部	壁面SH	1点	4.53g	83.03g	19.69%	多
	立会出土	11点	78.50g			
殻頂部以外	壁面SH	+	197.63g	421.63g		
	立会出土	+	224.00g			
J・Kブロック総括		21点	117.50g	871.63g	6.32%	多 点数多量・最も比率が高い

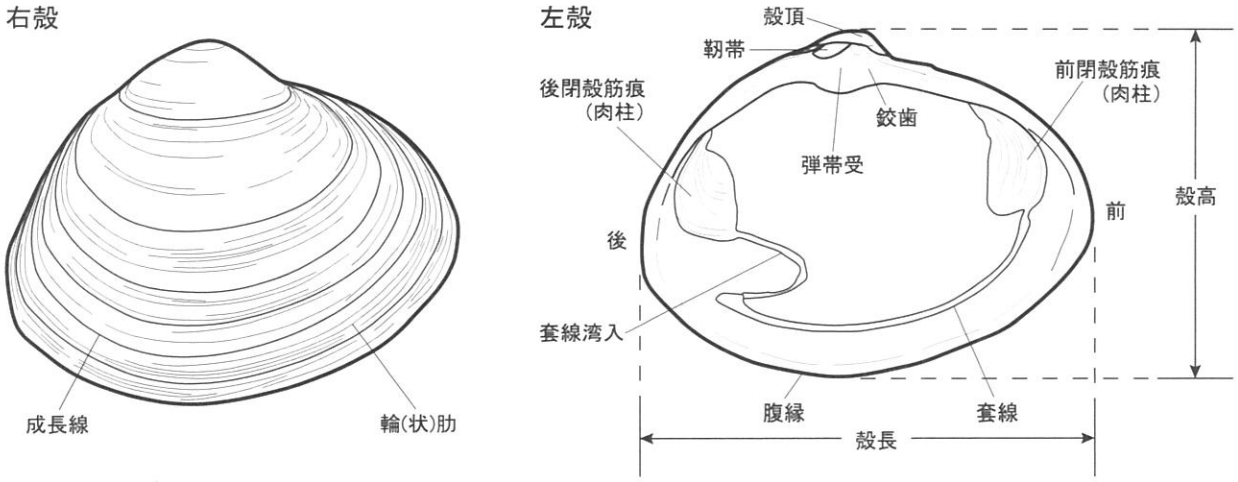


図２　ウバガイ部位名称

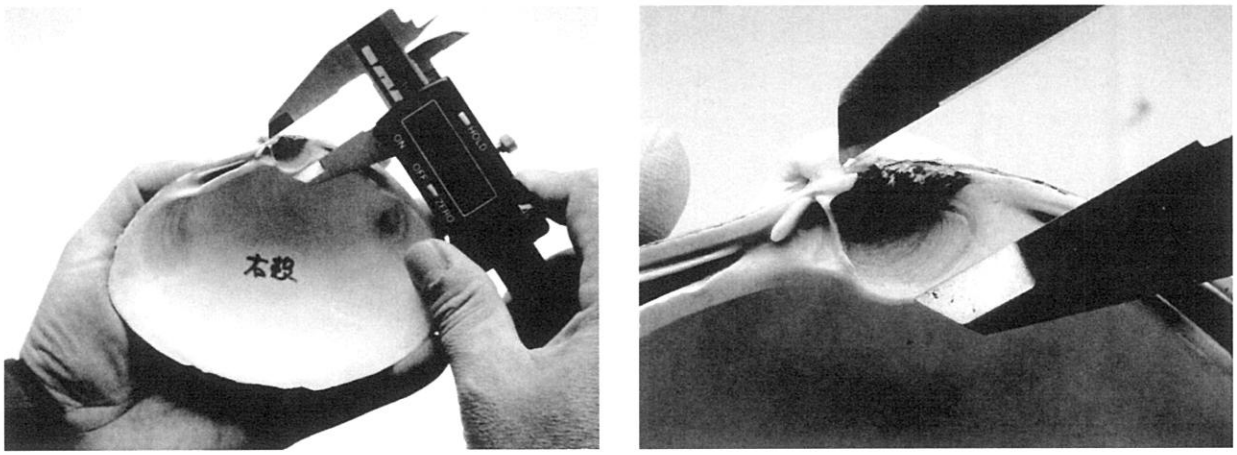


写真１　現生標本ウバガイ弾帯受計測方法

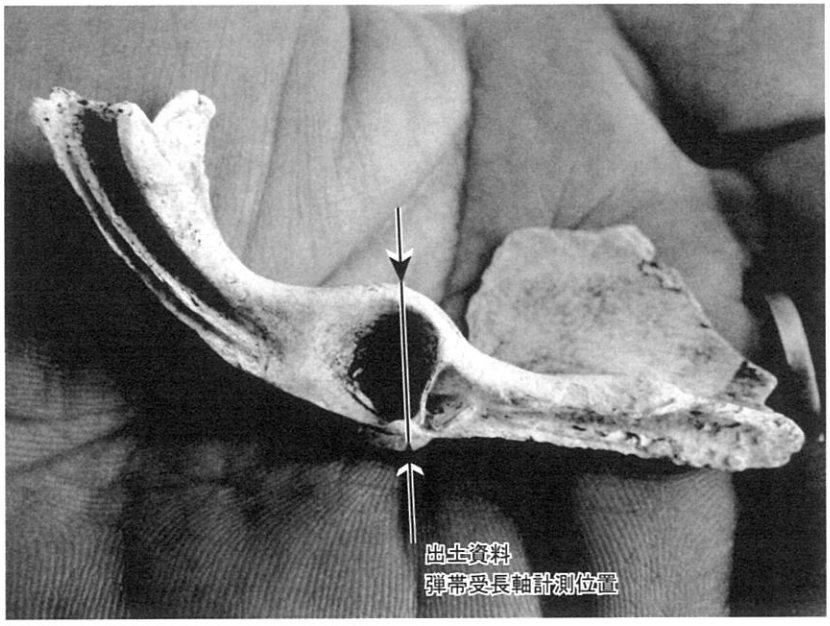


写真２　出土ウバガイ弾帯受計測方法

第4節　厚真町上厚真遺跡から検出された種子

北海道大学大学院文学研究院　高瀬克範

1. 遺跡の概要

遺跡の名称　上厚真遺跡（J-13-1）

遺跡の所在地　勇払郡厚真町字厚和 66-1，72-1，72-6，72-8

発掘調査期間　2021 年 6 月 21 日～2021 年 7 月 1 日（調査面積 113 ㎡）

発掘調査機関　厚真町教育委員会

発掘調査担当　乾哲也・奈良智法

遺跡の立地　厚真川と軽舞川の合流地点に面する台地上

検出遺構

中世アイヌ文化期：焼土 1 ヵ所，柱穴 2 本，遺物集中区（灰集中，獣骨集中，貝殻集中含む）2 ヵ所，礫集中 1 ヵ所

擦文文化期：遺物集中区 1 ヵ所，土器集中 1 ヵ所，礫集中 1 ヵ所

続縄文文化期：焼土 3 ヵ所（立会含む），土器集中 2 ヵ所

縄文時代：土坑墓 1 基，焼土 1 ヵ所

2. 資料

本稿では，2021 年度に実施された上厚真遺跡の発掘調査によって回収された種子について報告する。対象とするのは，ウォーター・フローテーション法によってえられた微細な遺物のうち，種子とその可能性があるものとして筆者に送付された資料である。フローテーションのサンプル番号は，No. 2，4～8，11，12 の 8 資料がこれに該当する（表 1）。種子は，単独の焼土や遺物集中，および遺物集中内で貝，灰，獣骨などが分布する範囲の土壌内に含まれていたものである。発掘調査の所見にもとづくこれら遺構の帰属文化は，No. 2 が続縄文文化であるほかは，すべて考古学的アイヌ文化と判断されている。出土資料の一覧，実体顕微鏡下での観察結果の記載，代表的な資料の写真を以下に提示する。なお，本稿で取り扱った資料は，2022 年 8 月に報告者のもとに届き，観察・記録をおこなったのち 2022 年 10 月中に本報告とともにすべての資料を厚真町教育委員会へ返送した。

3. 出土した種子

ヒエ属 *Echinochloa* P. Beauv.　（図版 1-1：ⅢSHB-01 出土）

アイヌ文化期の貝集中であるⅢSHB-01 で 1 点が確認された。穎果は広楕円形。背面には果長の 2/3 ほどを占める楕円形の大きな胚がある。その反対側の腹面にはヘラ型状のヘソがある（椿坂 1993）。出土資料の表面の保存状態は良好ではないが，図版 1-1 に示した特徴から栽培型ヒエ（*Echinochloa esculenta* H. Scholz）と同定される。計測値は，図版 1-1：L 1.8 × B 1.8 × T 1.2（mm）である。

ムギ類 *Hordeum* L. *and Triticum* L.（図版 1-2：ⅢB-02 出土）

獣骨や礫などから構成されるアイヌ文化期の遺物集中区範囲であるⅢB-02 で 1 点が確認された。図版 1-2 は大きく破損しているうえに被熱によるダメージを強く受けているものの，紡錘状楕円形と思われる形状や腹面中央の縦溝が観察される。形態，サイズおよび種子表面から溝にいたるまでの深さがそれほど深くはない点からみてオオムギ *Hordeum vulgare* L. と思われる。ただし，コムギ（*Triticum aestivum* L.）の可能性も完全には排除できないため，ここではムギ類とした。計測値は，図版 1-2：L（5.0）× B（3.0）× T（2.5）(mm)である。

ユリ科 LILIACEAE（図版 1-3，4：ⅢSHB-01 出土）

ⅢSHB-01 から 2 個検出された。鱗茎はやや円形の形態を示す。可能性がある種として，ノビル *Allium macrostemon* Bunge，ヒメニラ *Allium monanthum* Maxim.，キバナノアマナ属 *Gagea* Salisb. などがあるが，手元にある現生資料の少なさや，種内での鱗茎形態差の大きさなどから種の特定にはいたらなかった。計測値は，図版 1-3：L 6.2 × B 5.6 × T 5.0 (mm)，図版 1-4：L 4.3 × B 4.3 × T（2.2）(mm)である。

キハダ属 *Phellodendron* Rupr.（図版 1-5：ⅢSHB-01 出土）

ⅢSHB-01 から，種子 1 片が出土した。半横広卵形の種子の破片が確認され，表皮には浅い凹みによる網目模様がみられる。形態的特徴からキハダ *P. amurense* Rupr. と同定される。計測値は，図版 1-5：L（2.7）× B（1.4）× T 1.0 (mm)である。

マタタビ属 *Actinidia* Lindl.（図版 1-6：ⅢB-02 出土）

ⅢB-02 から 1 粒が出土した。種子は長楕円形で，種子には凹点による網目模様がある。マタタビ *A. polygama*（Sieb. et Zucc.）Planch. ex Maxim. もしくはサルナシ *A. arguta*（Sieb. et Zucc.）Planch. ex Miq. のいずれかと考えられるが，両者の種子は形態と表面組織がきわめて類似しているため種子からの同定は困難である。計測値は，図版 1-6：L 1.7× B 1.0 × T 0.7 (mm) である。

カエデ科 ACERACEAE（図版 1-7：ⅢSHB-01 出土）

ⅢSHB-01 から 1 点が検出された。分果（翼果）はなく，種子本体のみが残存している。線状長楕円形で，果皮に隆状模様がみられる。計測値は，図版 1-7：L (6.0) × B 2.8 × T 2.0 (mm) である。

ニワトコ属 *Sambucus* L.（図版 1-8～12：ⅢSHB-01 出土）

ⅢSHB-01 から，33 粒の酸化種子が出土した。現生の種子の混入の可能性もあるため 3 個程度を解剖したが，内部は空洞で非常に新しい資料であることを示す痕跡は確認できなかった。種子は狭楕円形で背面は丸みがあり，腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. sieboldiana (Miq.) H. Hara と判断される。ただし，本州北部から北海道の林中にエゾニワトコ *S. racemosa* subsp.

kamtschatica (E.L.Wolf) Hultén が分布するという。計測値は，図版 1-8：L 2.1 × B 1.3 × T 0.7 (mm)，図版 1-9：L 2.0 × B 1.0 × T 0.6 (mm)，図版 1-10：L 2.7 × B 1.1 × T 0.6 (mm)，図版 1-11：L 2.0 × B 1.3 × T 0.6 (mm)，図版 1-12：L 2.0 × B 0.9 × T 0.5 (mm) である。

ブドウ科 VITIDACEAE（図版 1-13：ⅢSHB-01 出土）

続縄文文化期の焼土であるⅢF-02 およびアイヌ文化期のⅢSHB-01 から計 2 粒，6 片が出土した。種子は広倒卵形。背面は丸みがあり，倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜があり，稜の両側に針形の凹みがある。ブドウ属と同定され，エビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* (Regel) Nakai もしくはヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat と考えられる。北海道ではエビヅルの現在の分布が南部に限られることを考慮すると，後者である可能性が高い。計測値は，図版 1-13：L 4.5 × B 3.8 × T 2.0 (mm) である。

クルミ属 *Juglans* L.　（図版 1-14～17：ⅢSHB-01 出土）

続縄文文化期の焼土ⅢF-02 から 0.193 g，アイヌ文化期の貝殻集中ⅢSHB-01，灰集中ⅢAS-01，遺物集中区ⅢB-01 およびⅢB-02 から 2.318g の計 2.511g の内果皮が出土した。表面には縦に浅い溝状の模様があり，オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. と同定される。色調が一部褐色を呈するものも存在しており，必ずしもすべての破片が完全に炭化しているわけではないと思われる。いずれも細片のためサイズの計測はしておらず，表 1 には個数ではなく重量を掲示した。

不明 Unidentifiable seeds（図版 1-18～21：ⅢSHB-01 出土）

表 1 では，不明種子のうち，将来的に同定できる可能性があるが手元に比較標本がないために同定できないものを「不明 1」，破損や被熱によるダメージなどにより保存状態が悪いために同定不能である資料を「不明 2」とした。不明 1 は，14 個出土した。ⅢB-02 出土の図版 1-18 は広卵形で，背面には果長の二分の一ほどのくぼみがあり，胚と思われる。種子の形状，サイズからみてキビ *Panicum miliaceum* L. の穎果の可能性があるが，同定のための重要な基準となる胚の形状が明確ではない（椿坂 1993）。ⅢSHB-01 出土の図版 1-19～21 は形態，サイズ，炭化の状態などからみてマメ科 FABACEAE の可能性があるが，ヘソを明確に確認することができない。計測値は，図版 1-18：L 1.4 × B 1.7 × T 1.2 (mm)，図版 1-19：L 2.6 × B 1.7 × T 1.5 (mm)，図版 1-20：L 4.1 × B (3.4) × T (1.9) (mm)，図版 1-21：L 1.4 × B 0.8 × T (0.7) (mm) である。このほか，同定できない不明 2 の種子片が 38 個確認された。

菌類 Fungi（図版 1-22：ⅢSHB-01 出土）

ⅢSHB-01 で菌類?が 1 個，ⅢSHB-01，ⅢB-01，ⅢB-02 で菌核が 29 個確認された。図版 1-22 の計測値は，L 1.8 × B 1.3 × T 1.0 (mm) である。

4. コメント

上厚真遺跡から出土した種子のうち，続縄文文化期の資料はブドウ科，クルミ属のみであった。アイヌ文化期からは，栽培種をふくむ多様な種子が出土した。厚真町内の遺跡では，アイヌ文化期の種子はこれまでに厚幌１（吉崎・椿坂 2004），ニタップナイ（椿坂 2009，2010a），幌内 7（椿坂 2010b），オニキシベ２（椿坂 2011），ヲイカルマイ（椿坂 2013a），ヲチャラセナイ・ヲチャラセナイチャシ跡（椿坂 2013b），ショロマ１（椿坂 2015），幌内８（高瀬 2020），富里４（高瀬 2022）などから検出されている。これらと比較すると，上厚真から出土した種子はすでに知られているヴァリエーションのなかにほぼ収まっていると判断できる。ただし，上厚真でカエデ科が出土した点はあらたな知見である。アイヌ民族は，カエデ科の木をさまざまな道具の原料としたり，皮を煎じて飲用したりしているが，その樹液の利用もかなり広く知られている（知里 1976，更科・更科 1976）。種子の利用については現時点では具体的な情報がなく，資料数の少なさを考慮しても，出土種子がカエデ科の意図的な利用と関係しているのかどうかは定かではない。

栽培種の可能性があるものとして，ヒエ属とムギ類が検出された。これらもまた同時期の厚真町内の遺跡ですでに検出されてきている。ヒエ属は炭化による変形を若干受けていると思われるが，長さが 1.8mm ほどとサイズが大きく，幅も 1.8mm と広い。1 点のみの検出にとどまるが，栽培型と判断される。ムギ類は種子のダメージが大きく，長粒・短粒といったタイプはもとより，オオムギかコムギかを識別することも難しい。このほかにもキビがある可能性があるが，最終的な同定にはいたらなかったために本報告では不明 1 のなかに含めている。

本稿の作成にあたって，乾哲也氏・奈良智法氏から遺跡についての詳しい情報を提供していただいた。また，椿坂恭代氏からも同定にあたって多大なご協力と有益なご助言をいただいた。お世話になった方々に，記して感謝申しあげる。

文献

更科源蔵・更科　光 1976『コタン生物記Ⅰ　樹木・雑草篇』法政大学出版会

高瀬克範 2020「厚真町幌内 8 遺跡から出土した炭化種子」『幌内 8 遺跡』，pp. 189-195，厚真町教育委員会

高瀬克範 2022「厚真町富里 4 遺跡から出土した炭化種子」『富里 4 遺跡』，pp. 47-51，厚真町教育委員会

知里真志保 1976『知里真志保著作集　別巻Ⅰ分類アイヌ語辞典　植物編・動物編』平凡社

椿坂恭代 1993「アワ・ヒエ・キビの同定」『先史時代と関連科学』，pp. 261-281，吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会

椿坂恭代 2009「厚真町ニタップナイ遺跡から検出された炭化植物種子」『ニタップナイ遺跡（1）』，pp. 265-276，厚真町教育委員会

椿坂恭代 2010a「厚真町ニタップナイ遺跡から検出された炭化植物種子」『幌内 5 遺跡(1)　富里 2 遺跡　ニタップナイ遺跡(2)』，pp. 297-301，厚真町教育委員会

椿坂恭代 2010b「幌内 7 遺跡出土の炭化種子について」『厚幌 1 遺跡(2)　幌内 7 遺跡(1)』，pp. 262-268，厚真町教育委員会

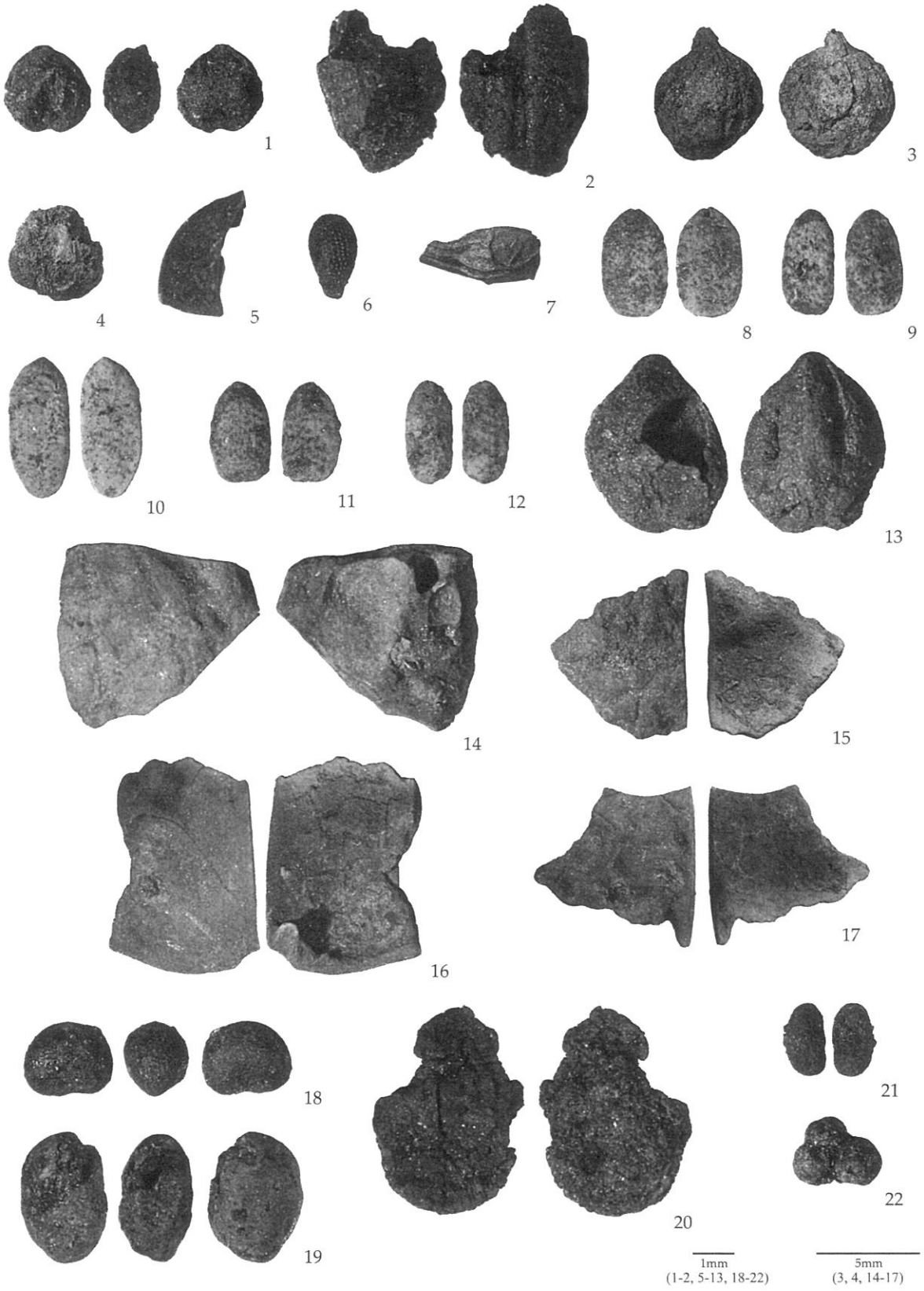
椿坂恭代 2011「オニキシベ 2 遺跡から検出された植物種子」『オニキシベ 2 遺跡』，pp. 327-335，厚真町教育委員会
椿坂恭代 2013a「厚真町ヲイカルマイ遺跡から検出された植物種子」『ヲイカルマイ遺跡』，pp. 143-146，厚真町教育委員会
椿坂恭代 2013b「ヲチャラセナイ遺跡・ヲチャラセナイチャシ跡から検出された植物種子」『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡　第二分冊』，pp. 18-33，厚真町教育委員会
椿坂恭代 2015「厚真町ショロマ 1 遺跡から検出された植物種子」『ショロマ 1 遺跡(1)』，pp. 372-378，厚真町教育委員会
吉崎昌一・椿坂恭代 2004「北海道勇払郡厚真町厚幌 1 遺跡の植物種子」『厚幌 1 遺跡』，pp. 241-256，厚真町教育委員会

表1　上厚真遺跡炭化種子同定一覧表

サンプルNo.	遺構名	遺構層位	遺構帰属時期	土量	ヒエ属	ムギ類	ユリ科	ブドウ科	キハダ属	ニワトコ属	マタタビ属	カエデ科	クルミ属	不明1	不明2	菌類?	菌核
				(ℓ)	粒	粒	粒	粒	片	片	粒	粒	片	(g)	粒	粒		
2	ⅢF-02	ⅢcU	続縄文文化前期	2.0	-	-	-	1	-	-	-	-	-	0.193	-	-	-	-
4	ⅢB-01 ⅢSHB-01	ⅢbU	中世アイヌ文化期	16.2	1	-	2	1	6	1	12	-	1	1.772	7	27	1	27
5	ⅢB-01 ⅢSHB-01 壁面拡張部分	ⅢbU	中世アイヌ文化期	1.1	-	-	-	-	-	-	21	-	-	0.225	2	4	-	-
6	ⅢB-01 ⅢAS-01	ⅢbU	中世アイヌ文化期	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.037	-	-	-	-
7	ⅢB-01 ⅢB-01 (東側)	ⅢbU	中世アイヌ文化期	0.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.002	1	2		1
8	ⅢB-01 ⅢB-01 (中央)	ⅢbU	中世アイヌ文化期	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.001	-	-	-	-
11	ⅢB-01 ⅢB-01	撹乱	中世アイヌ文化期	0.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.017	-	1	-	-
12	ⅢB-02	ⅢbU	中世アイヌ文化期	1.2	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1.014	4	4	-	1

網掛けは酸化種子

図版1


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
1mm
(1-2, 5-13, 18-22)
5mm
(3, 4, 14-17)

引用・参考文献

青野 友哉　2008「北海道における貝塚文化の消長:縄文時代～近代の生業と祭祀」『地域と文化の考古学Ⅱ』明治大学文学部考古学研究室

赤石 慎三　2004「弁天貝塚出土のホタテガイ製品」『館報』第1号 苫小牧市博物館

赤松 守雄　1989「第6章　第6節　弁天貝塚出土の貝類について」『弁天貝塚Ⅲ』苫小牧市教育委員会

厚真町　1986『厚真町史』/1998『増補 厚真町史』

厚真町教育委員会

2004『厚幌1遺跡』/2006『上幌内モイ遺跡(1)』/2007『上幌内モイ遺跡(2)』/2009『上幌内モイ遺跡(3)』

2010a『厚幌1遺跡(2)・幌内7遺跡(1)』/2010b『幌内5遺跡(1)・富里2遺跡・ニタップナイ遺跡(2)』

2011『オニキシベ2遺跡』/2016『上幌内1遺跡』/2017『上幌内2遺跡』/2020『幌内8遺跡』

厚真村　1956『厚真村史』

厚真村郷土研究会

1956『厚真村古代史』/1958「1957のあゆみ」『郷土研究』4/1959「記ろく一年のあしあと」『郷土研究』5

1960「昭和34年一年のあゆみ」『郷土研究』6

池田 実・亀井 喜久太郎　1976『厚真の旧地名を尋ねて』/1978『続厚真の旧地名を尋ねて』

石井 次郎　1955「厚真村字周文の竪穴様の食料貯蔵跡について」『先史時代』第2輯 先史学同好会

宇田川 洋　1989『イオマンテの考古学』東京大学出版会

扇谷 昌康　1979「第8章 シノタイ遺跡」『日高門別の先史遺跡』門別町教育委員会

大塚 和義　1981「失われたアイヌの儀礼」『アニマ』№97 平凡社

小野 哲也　2005「北海道域を取り巻く製品流通状況について」『北海道考古学』第41輯 北海道考古学会

2007「北海道出土鉄鍋の生産地」『北海道考古学』第43輯 北海道考古学会

萱野 茂　1978『アイヌの民具』すずさわ書店

越田 賢一郎　2004「鉄鍋再考」『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター

近藤 務ほか　1984「北海道苫小牧市静川ボーリング・コアにみられる第四系」『第四紀研究』22巻4号 日本第四紀学会

近藤 務　1997「石狩低地帯南東・静川台地周辺の第四系―最終間氷期の相対的海水準変動・基盤の昇降運動および古地理変遷―」『加藤誠教授退官記念論文集』加藤誠教授退官記念論文集刊行委員会

小松原 琢ほか　2014「勇払平野と支笏火砕流台地地下の上部第四系層序ボーリング」『海陸シームレス地質情報集』地質調査総合センター

善財 一ほか　2006『図解 日本刀事典』学研

玉蟲左太夫(稲葉一郎 解読)　1992『蝦夷地・樺太巡見日誌 入北記』北海道出版企画センター

土井 重男　2013「勇払郡各村畑反別調帳」『鵡川』5号 むかわ町郷土史研究会

苫小牧市教育委員会　1987『弁天貝塚Ⅰ』/1988『弁天貝塚Ⅱ』/1989『弁天貝塚Ⅲ』/2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』

中川 光弘　2018「南西北海道、石狩低地帯におけるテフラ層序学：支笏―洞爺火山地域の噴火履歴」『地質学雑誌』第124巻第7号　日本地質学会

北海道埋蔵文化財センター　2003『浜厚真3遺跡』/2017『上幌内3遺跡』/2019『オコッコ1遺跡(2)』

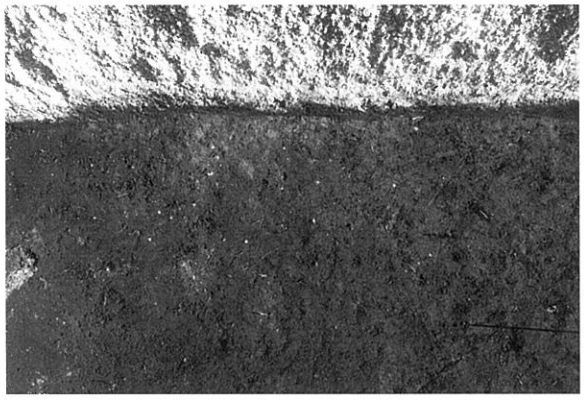
2022『桜丘1遺跡・ニタッポロ沢遺跡・日高幌内1遺跡』

松浦武四郎(秋葉実 解読) 1985「戊午 東部安都麻志 全」『戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌 中』北海道出版企画センター

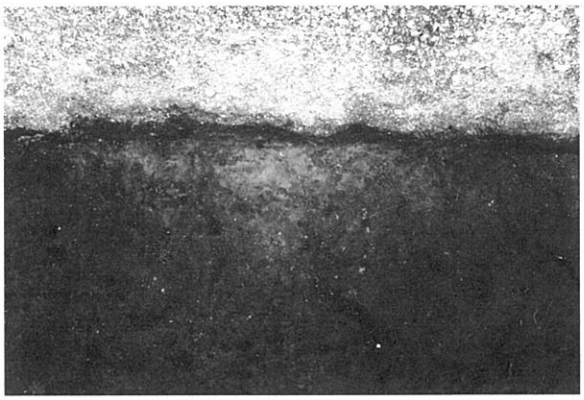
宮夫 靖夫　1980「胆振東部に於ける貝殻文土器の新例について」『北海道考古学』第16輯 北海道考古学会

上厚真遺跡
写真図版

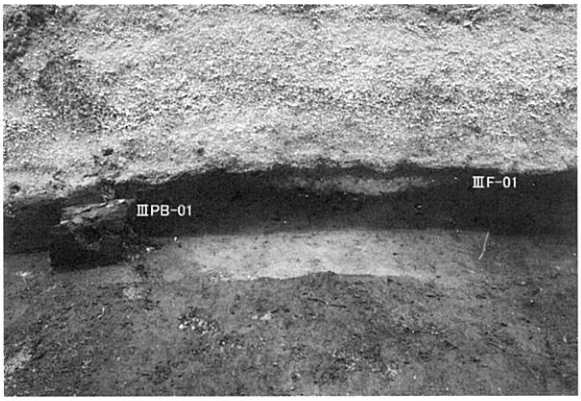
図版1



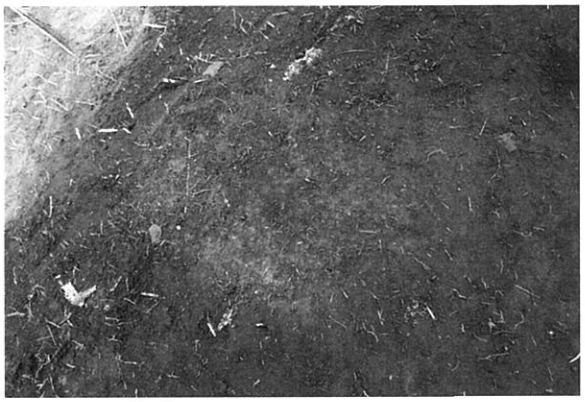
1. ⅢF-01焼土ブロック検出　N→



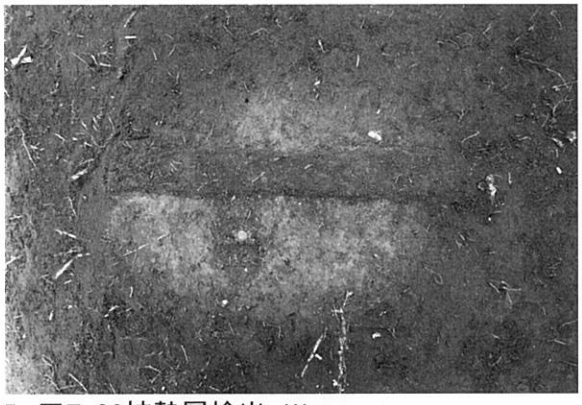
2. ⅢF-01被熱層検出　N→



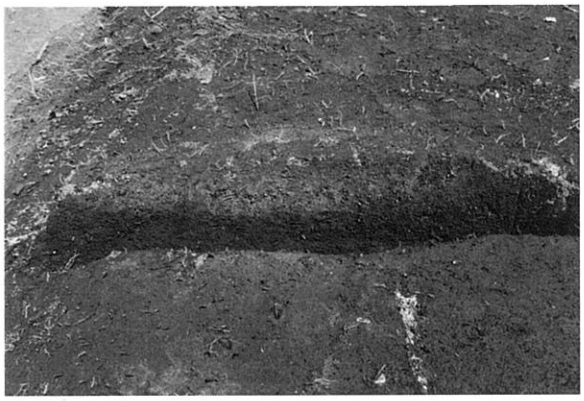
3. ⅢF-01(アイヌ期)断面・ⅢPB-01(続縄文期)検出 N→



4. ⅢF-02検出　SW→



5. ⅢF-02被熱層検出　W→



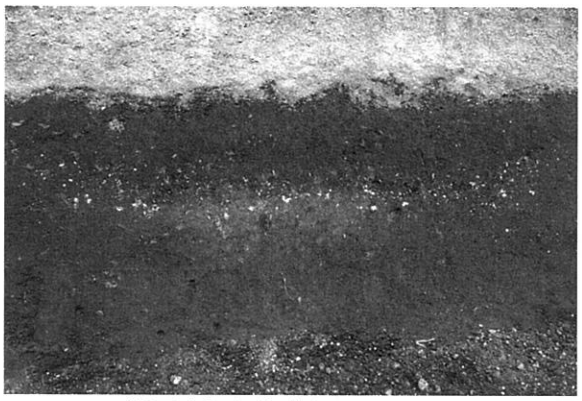
6. ⅢF-02断面　W→

7. ⅢF-03検出　S→

8. ⅢF-03断面　S→

図版2

1. ⅢF-04検出（立会地点） SE→

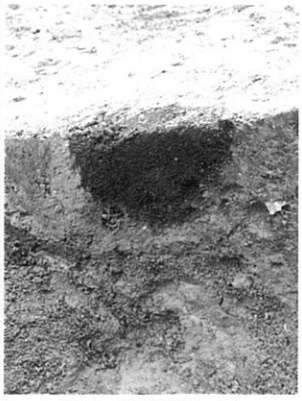


2. ⅢF-04断面（立会地点） S→

3. ⅢKP-01完掘 W→

4. ⅢKP-01断面 W→

5. ⅢKP-02完掘 E→



6. ⅢKP-02断面 E→

7. ⅢB-01(ⅢAS-01・ⅢBB-01)出土状態1 N→

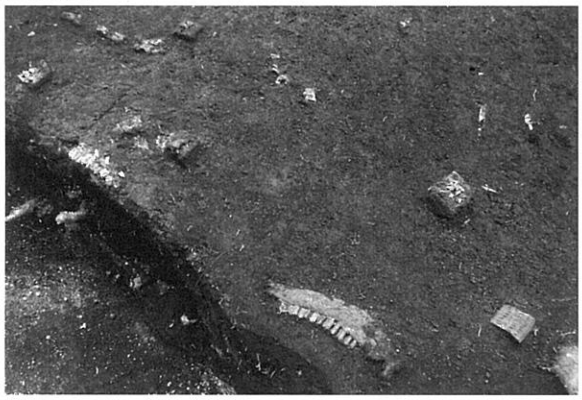
図版3

1. ⅢB-01(ⅢAS-01・ⅢBB-01)出土状態2　NW→

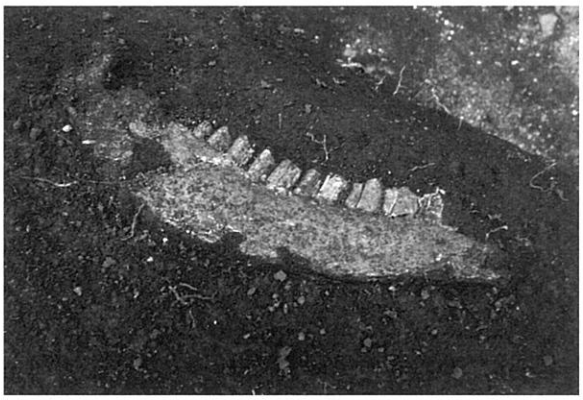
2. ⅢB-01(ⅢBB-01)出土状態　NE→

3. ⅢB-02(左)・03(右)出土状態　SE→

図版4



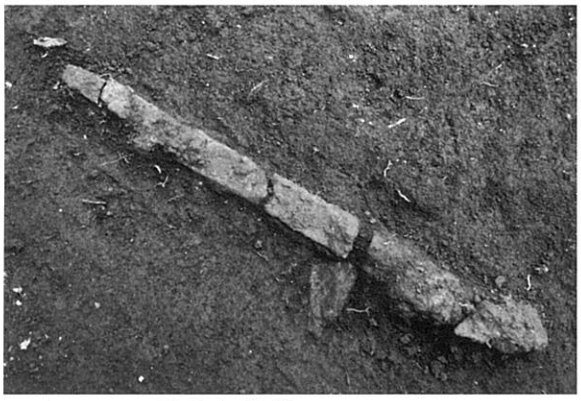
1. ⅢB-02出土状態　SE→



2. ⅢB-02シカ下顎出土状態　N→

3. ⅢB-03出土状態　W→

4. ⅢB-03出土状態拡大　SW→



5. ⅢB-03刀子出土状態　SE→

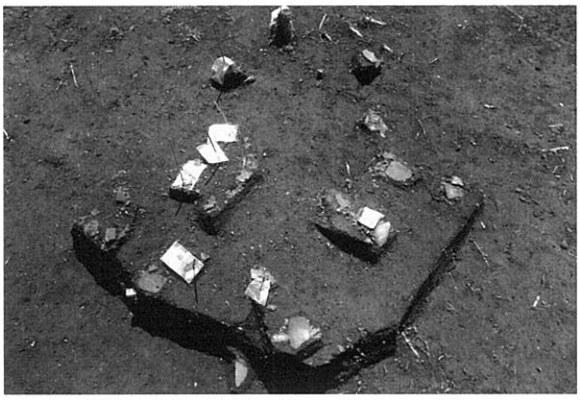
6. ⅢPB-01出土状態　NE→

7. ⅢPB-02出土状態　N→

8. ⅢPB-02出土状態拡大　N→

図版5

1. ⅢPB-02(下層)とⅢBB-01(上層)の層位関係　NW→

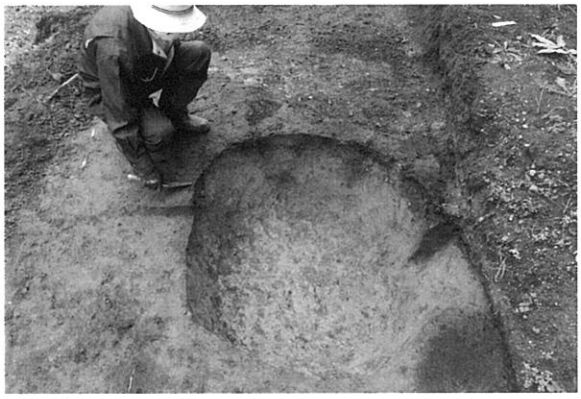


2. ⅢPB-03出土状態　NE→

3. ⅢSB-01出土状態　NE→

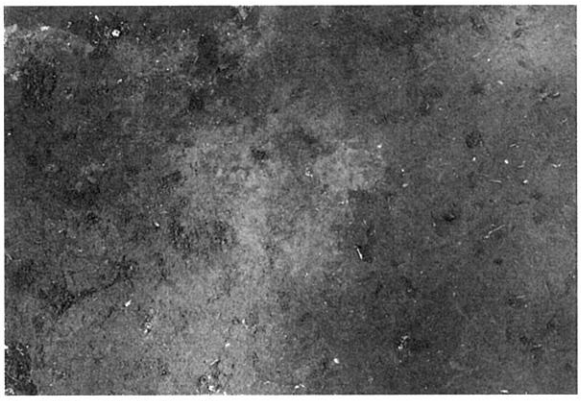
4. ⅢSB-02出土状態　SW→

5. ⅤGP-01検出　W→



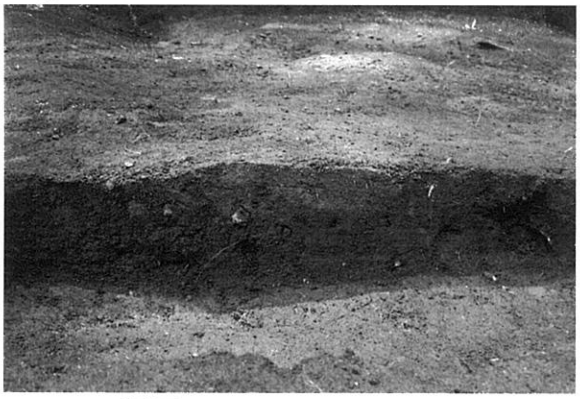
6. ⅤGP-01完掘　W→

7. ⅤGP-01断面　W→

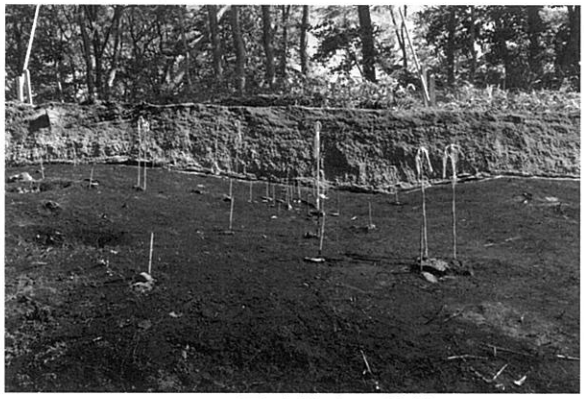


8. ⅤF-01検出　N→

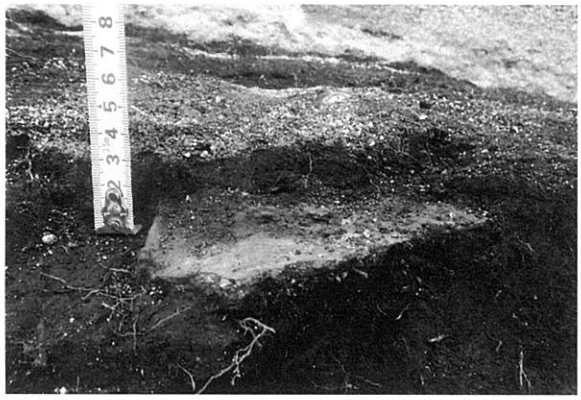
図版6



1. ⅤF-01断面　N→



2. X・Y-11・12区 Ⅲ層遺物出土状態　N→



3. Y-11区 鉄鍋口縁部片出土状態　N→

4. Y-12・13区 貝殻文土器出土状態　N→

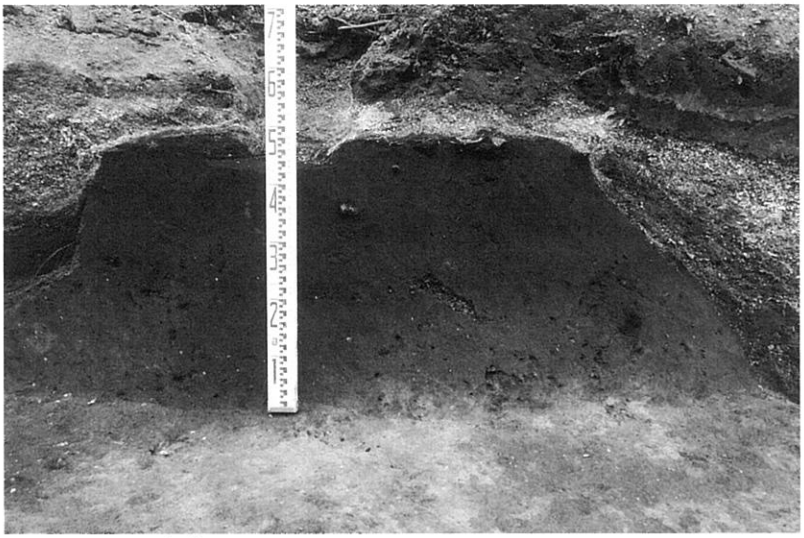
5. 作業状況1　E→

6. 作業状況2　N→

7. 上厚真小学校児童見学　SE→

8. 火山灰除去作業状況　W→

図版7

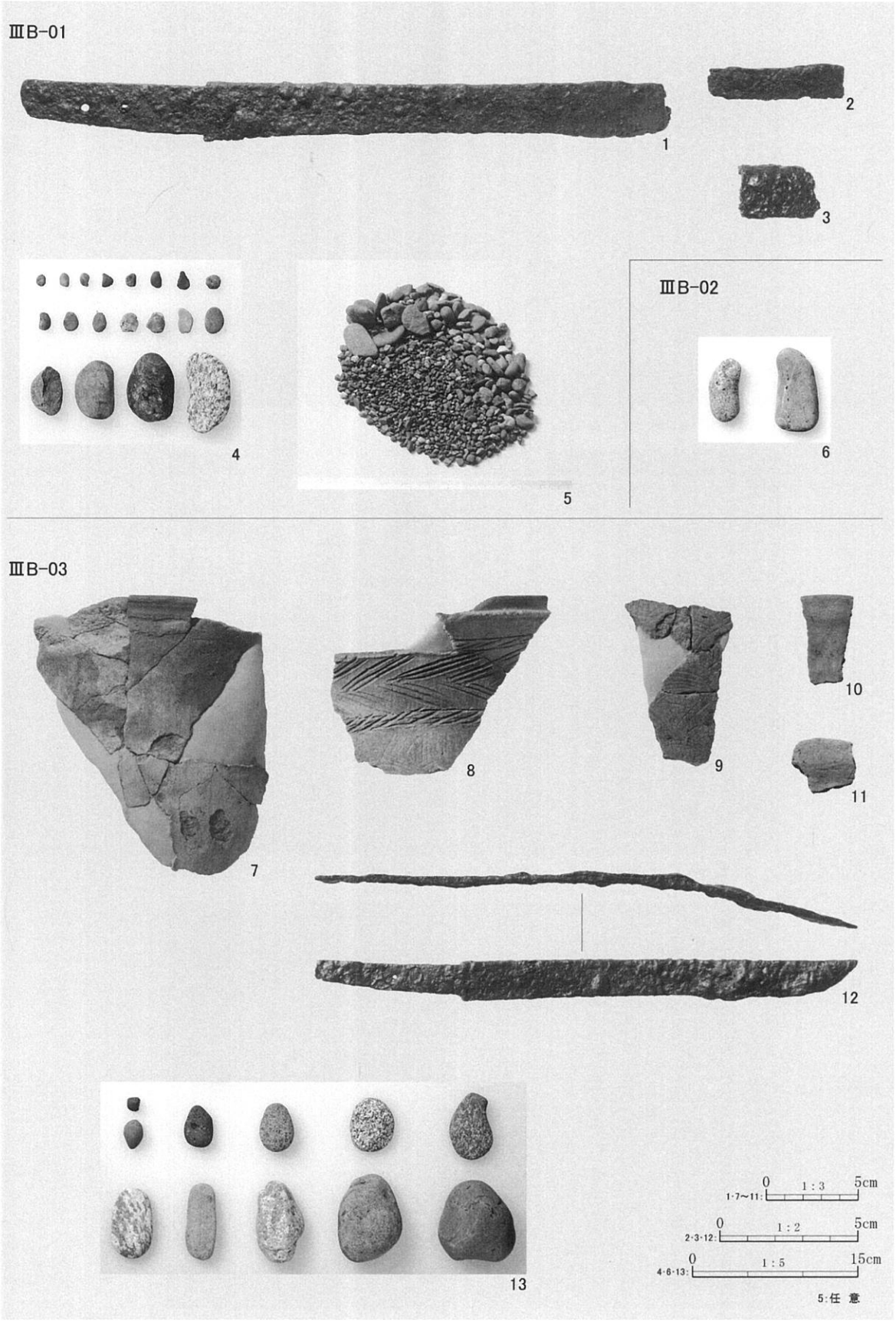


1. ⅢB-01調査終了断面　N→

2. 調査終了1　NE→

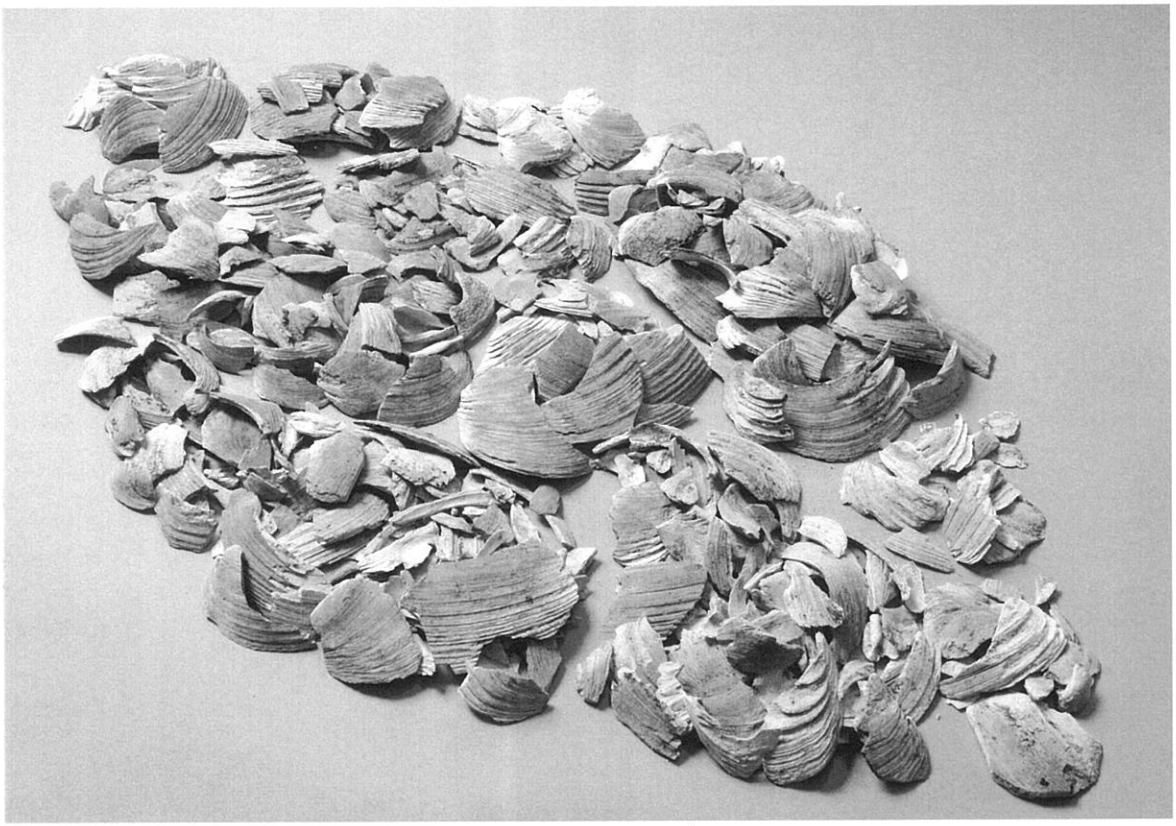
3. 調査終了2　NW→

図版8

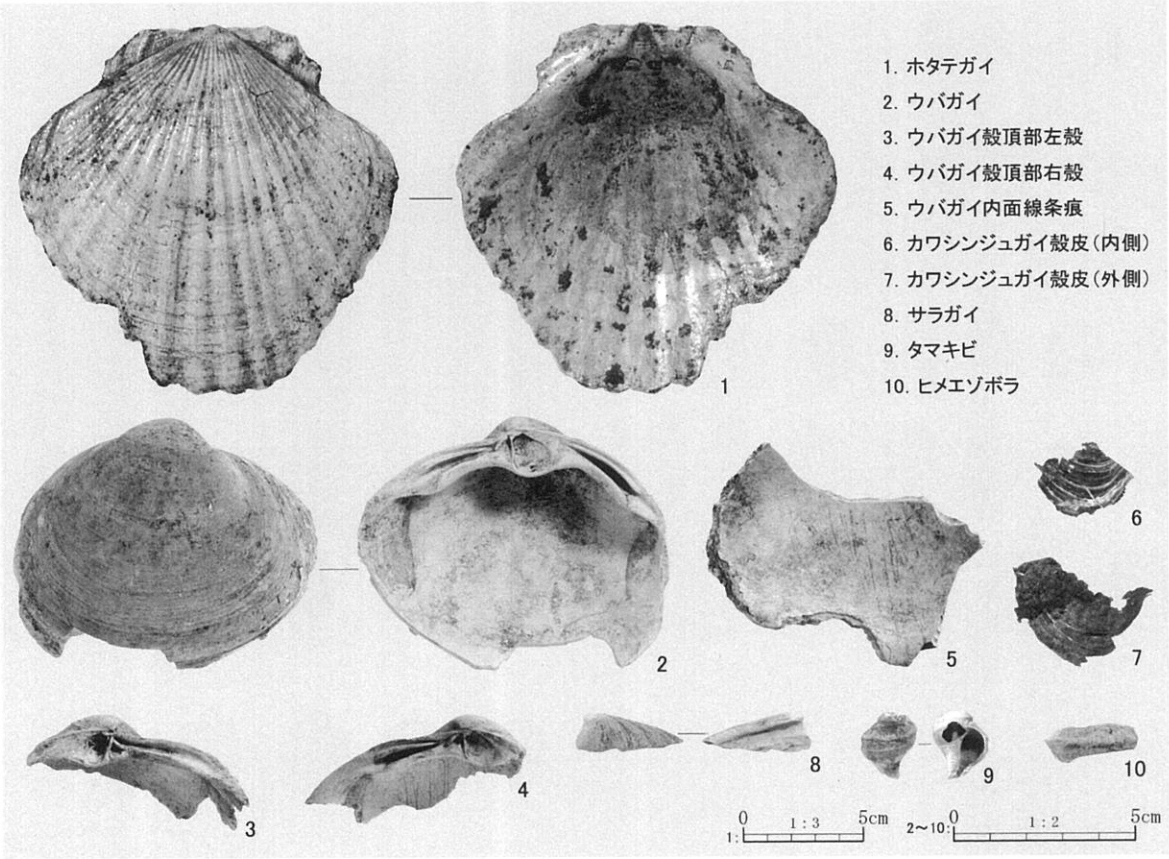

ⅢB-01
1
2
3
4
5
ⅢB-02
6
ⅢB-03
7
8
9
10
11
12
13
1·7~11: 0 1:3 5cm
2·3·12: 0 1:2 5cm
4·6·13: 0 1:5 15cm
5:任 意

ⅢB出土遺物

図版9

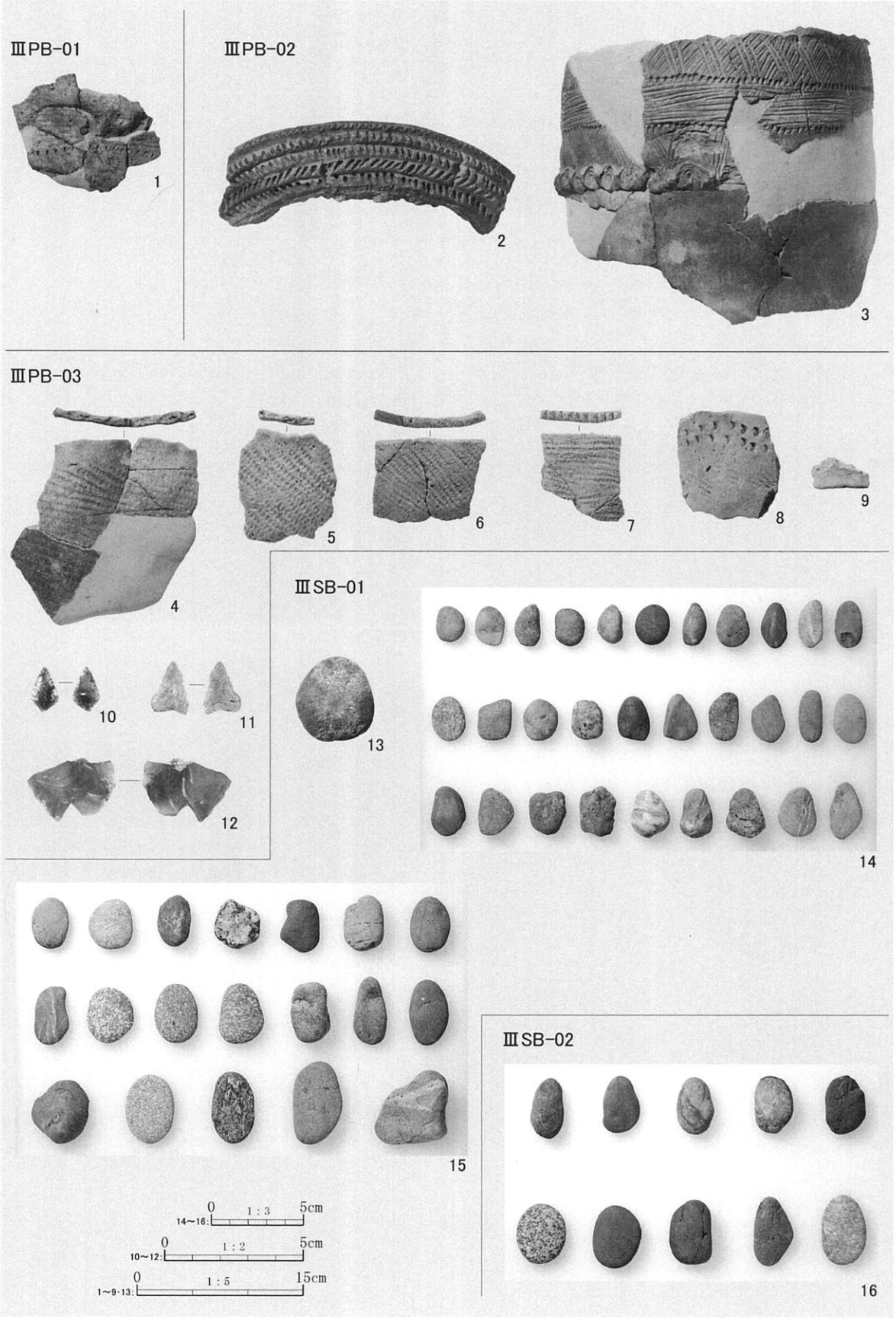


1. ⅢSHB-01出土ウバガイ殻頂部以外の破片資料（A～Lブロック）



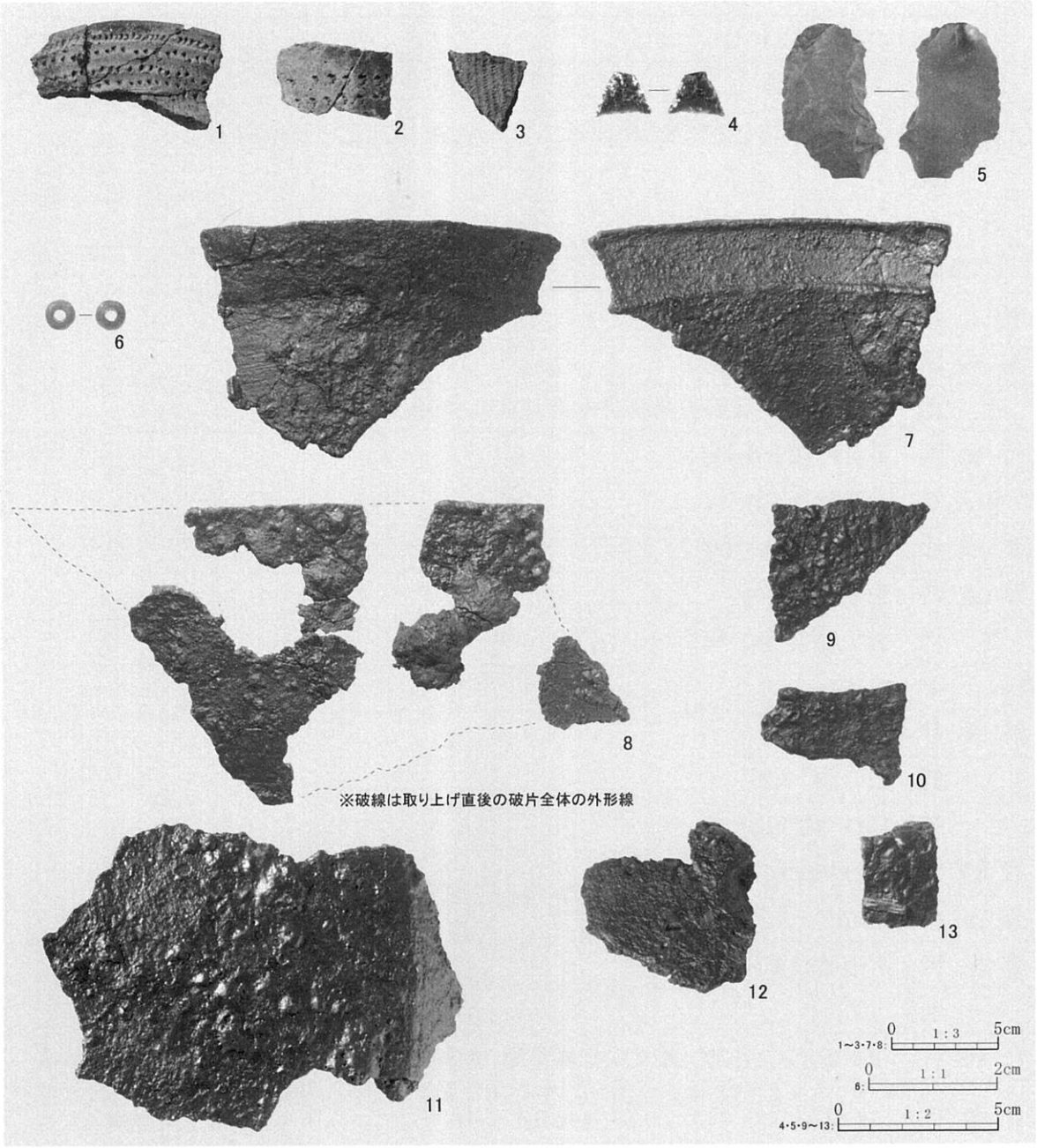
2. ⅢSHB-01出土貝類

図版10

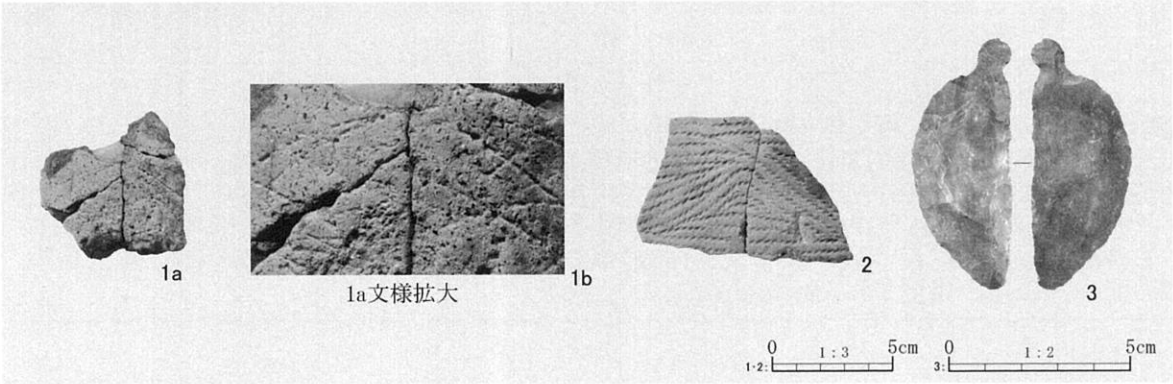


ⅢPB・ⅢSB出土遺物

図版11



1. Ⅲ層包含層出土遺物



2. Ⅴ層包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみあつまいせき
書名	上厚真遺跡
副書名	町道上厚真小学校通り線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	乾 哲也・奈良智法
編集機関	厚真町教育委員会
所在地	〒059-1601 北海道勇払郡厚真町京町165番地の1
発行機関	厚真町教育委員会
発行年月日	2023年 3月24日
ふりがな	かみあつまいせき
収録遺跡	上厚真遺跡
所在地	勇払郡厚真町字厚和66-1,72-1・6・8
市町村コード	01581
遺跡番号	J-13-1
北緯	42° 38′ 30″
東経	141° 51′ 18″
調査期間	2021年6月21日～7月1日
調査面積	113㎡
調査原因	町道改良拡幅工事
種別	
主な時代	中世アイヌ文化期、擦文文化期後期、続縄文文化期前葉・末葉、縄文時代早期
主な遺構	中世アイヌ文化期:焼土1ヵ所・柱穴2本・遺物集中(灰集中・獣骨集中・貝殻集中含む)2ヵ所・礫集中1ヵ所、擦文文化期:遺物集中1ヵ所・土器集中1ヵ所・礫集中1ヵ所、続縄文文化期:焼土3ヵ所(立会区域含む)・土器集中2ヵ所、縄文時代:土坑墓1基・焼土1ヵ所
主な遺物	中世アイヌ文化期:鉄鍋・刀剣類・ウバガイ(送り場跡)・ガラス玉、擦文文化期・続縄文文化期・縄文時代:土器・石器

要約

厚真川河口から約5.6㎞の支流軽舞川との合流点に面した標高約17mの台地上に所在している。調査は、台地縁辺の標高約13m～17mの平坦面から斜面を幅約4m、総延長約37m行った。遺構・遺物は斜面は少なく、標高約17m付近の平坦面に多く出土する傾向にある。特筆するものとしては、中世アイヌ文化期のⅢB-01とした遺物集中(送り場跡)が挙げられる。この遺構は灰集中、獣骨、貝殻集中で構成されており、貝殻集中はウバガイの集中である。本資料は当町で初例となり、厚真川下流域の海岸部に近い生業を知る貴重な手がかりとなった。

上厚真遺跡
－町道上厚真小学校通り線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　行　日　　令和５年３月２４日
編集・発行　　厚真町教育委員会
〒059-1601　北海道勇払郡厚真町京町 165 番地の１
TEL　(0145)－27－2495　FAX (0145)　－27－3178
印　刷　　ひまわり印刷株式会社